

60-3201
1200501270827

60



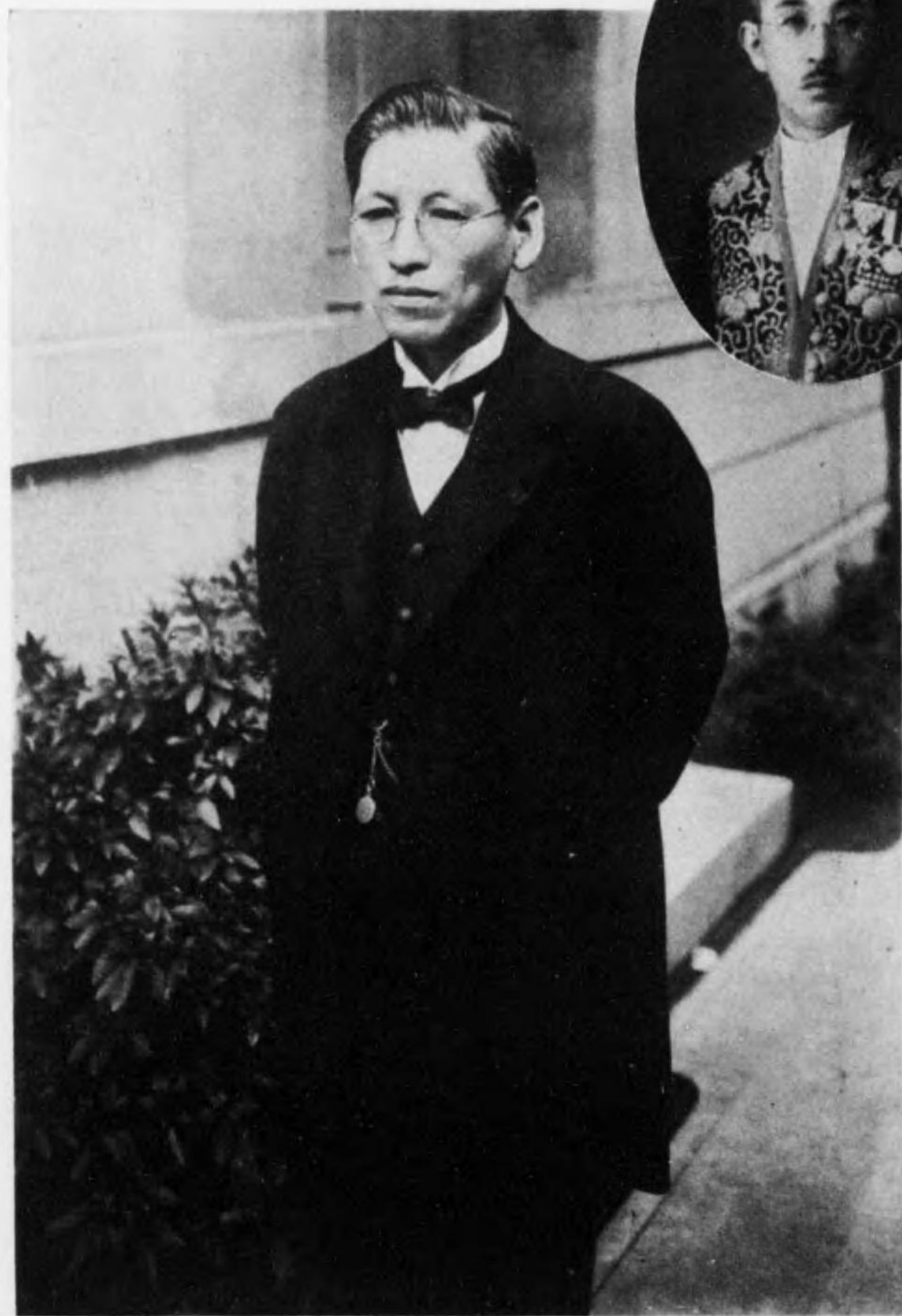
始



60

10





校閱者 醫學博士 上村行彰先生

著者 關西鍼灸學院院長 山本新梧



上村行彰先生校閱
山本新梧編著

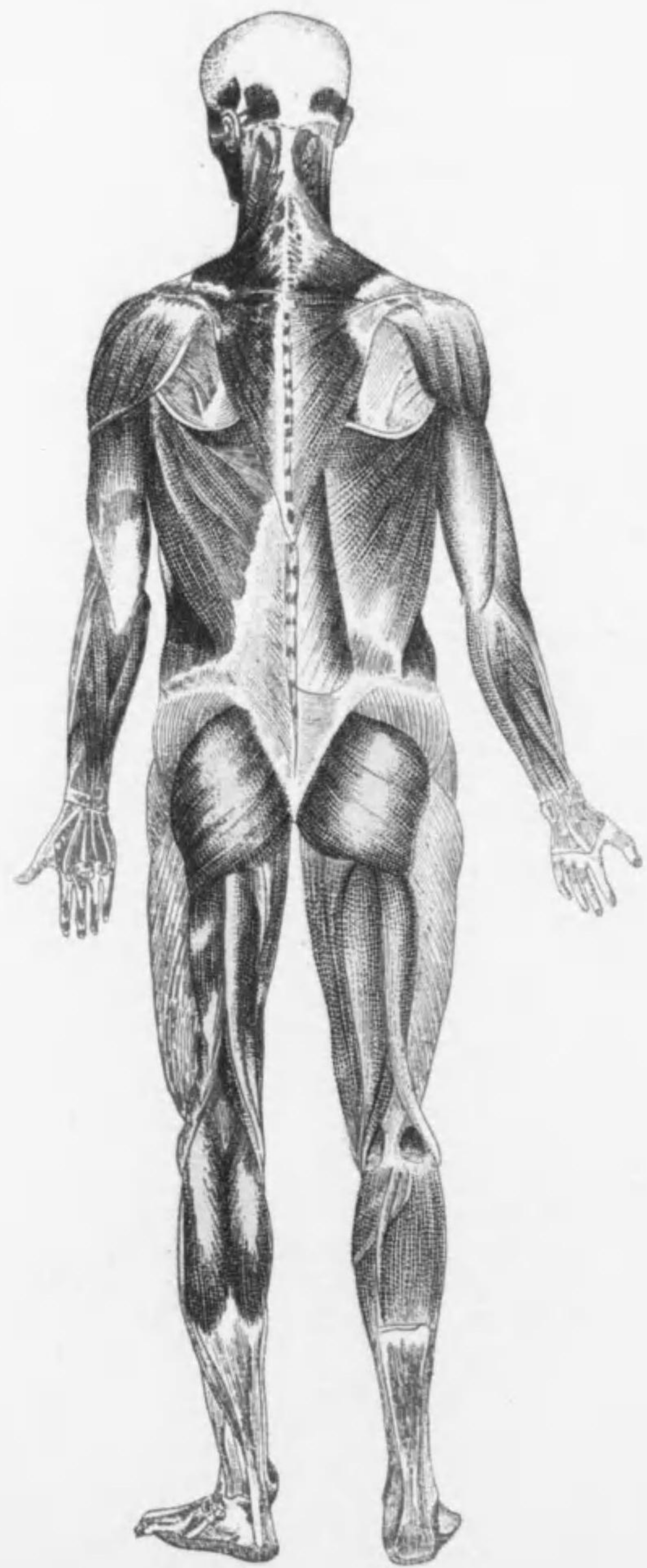
日本鍼灸學教科書

解 剖 學 編
生 理 學 編
鍼 灸 學 編
消 毒 學 編



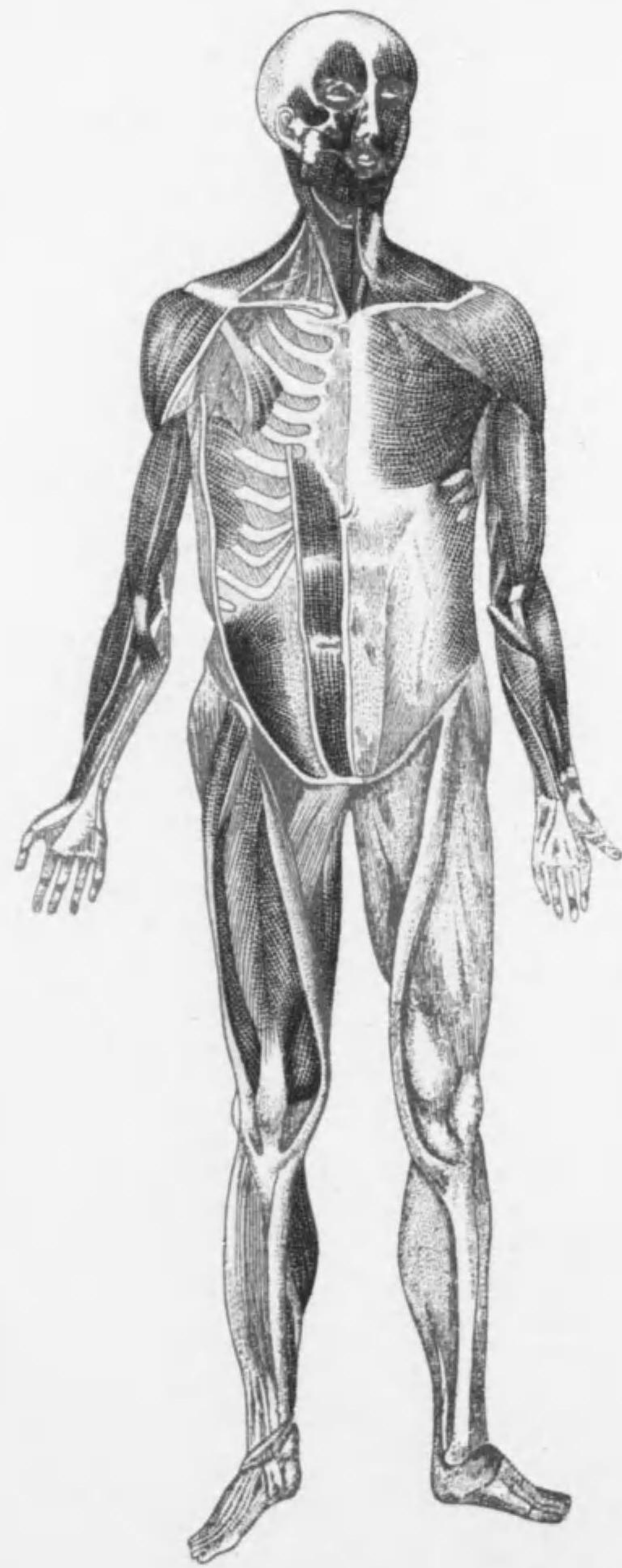
前編增訂第五版

關西鍼灸學院出版部



全身肌肉一覽圖

(後面)

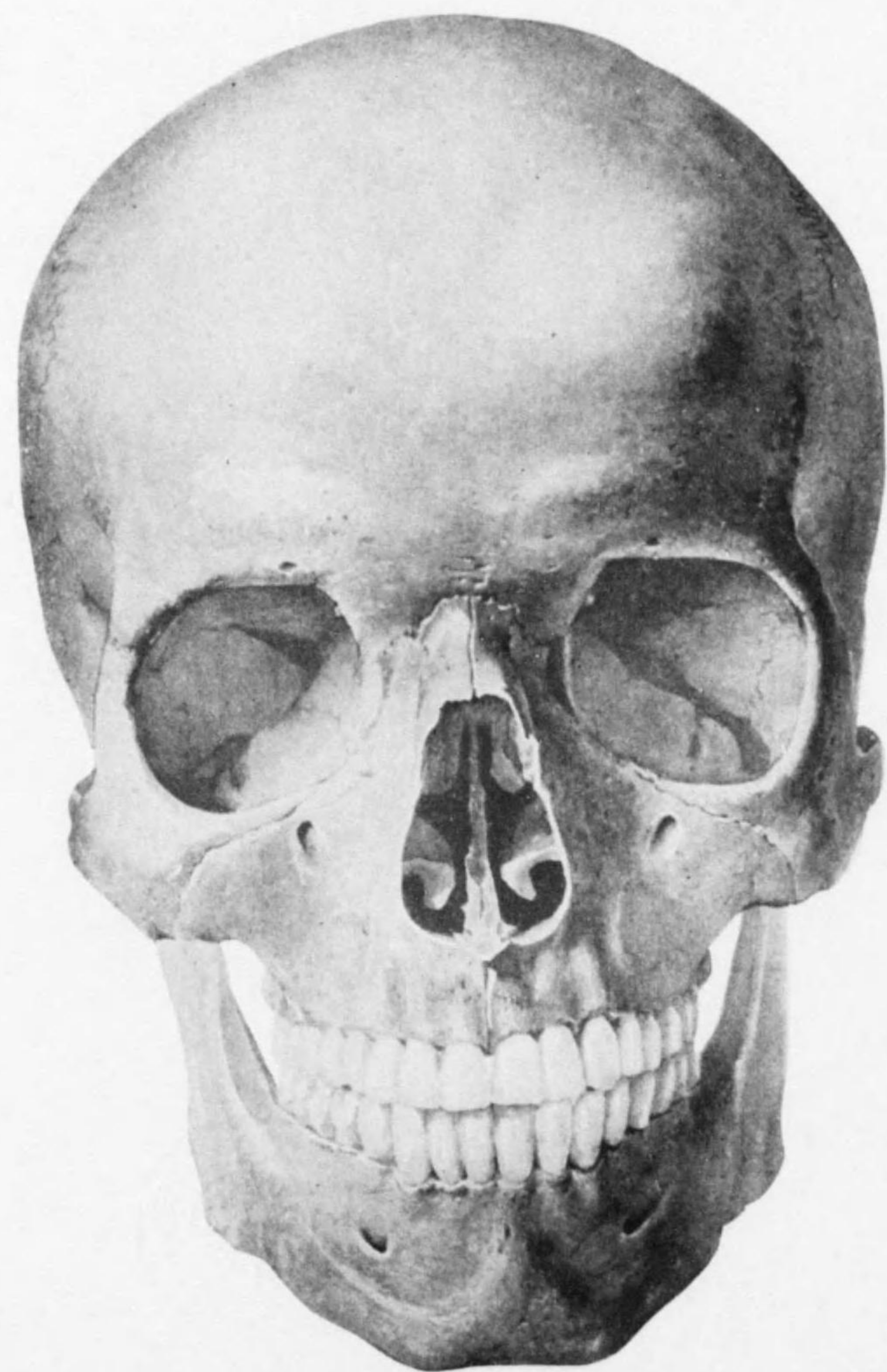


全身肌肉一覽圖

(前面)

骨 蓋 頭

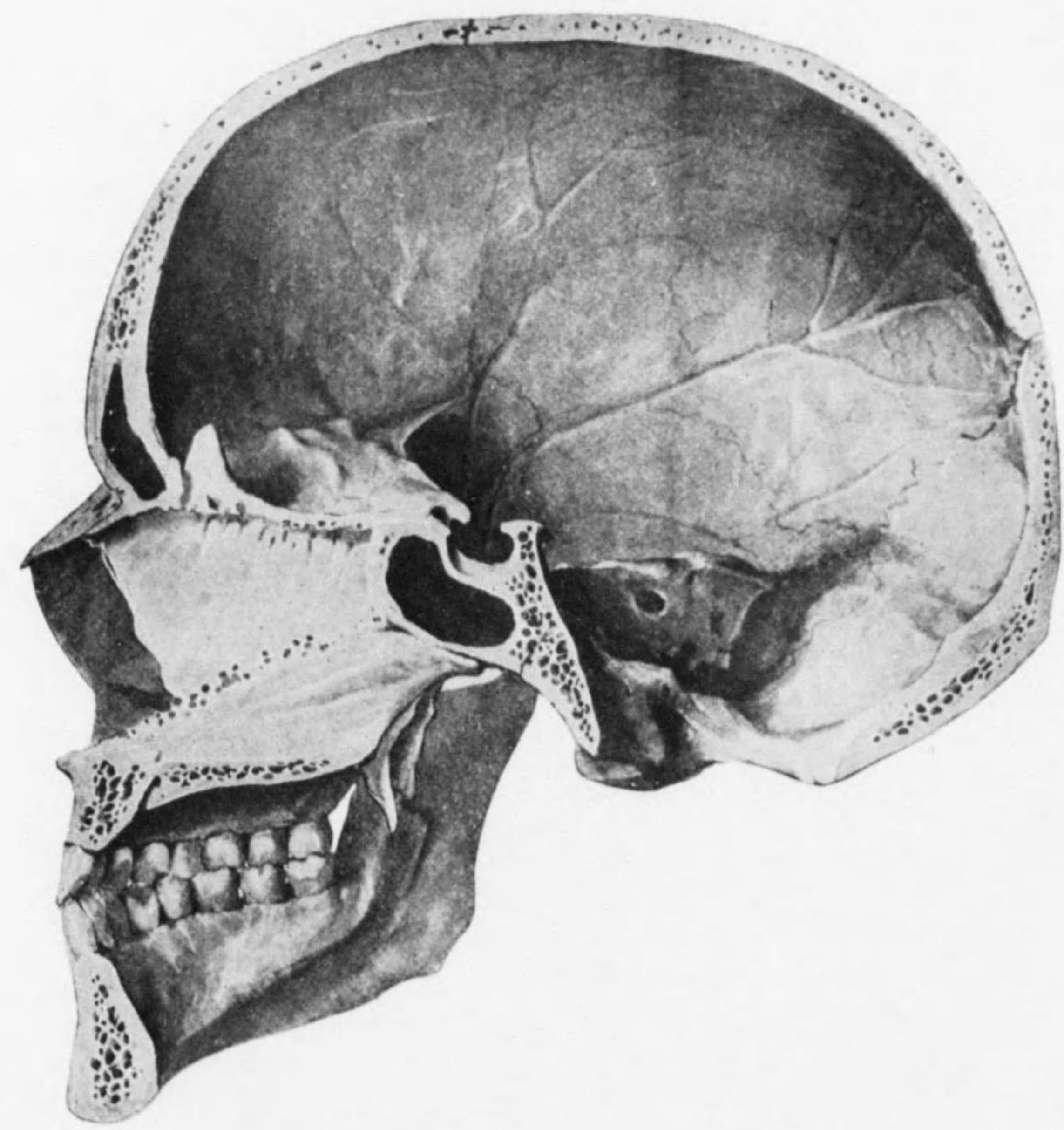
(面 前)



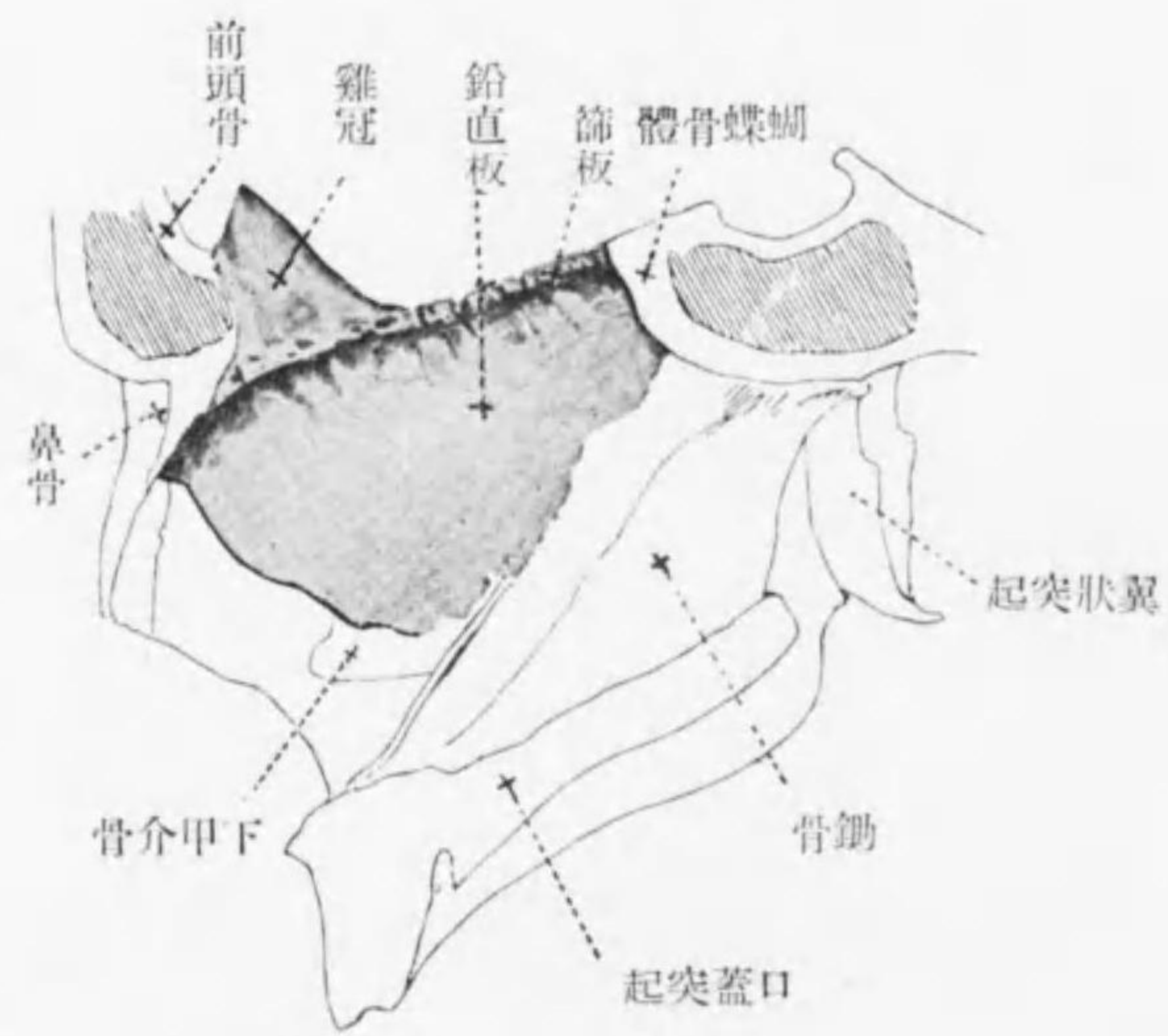
(Nach Spalteholz.)

骨 蓋 頭

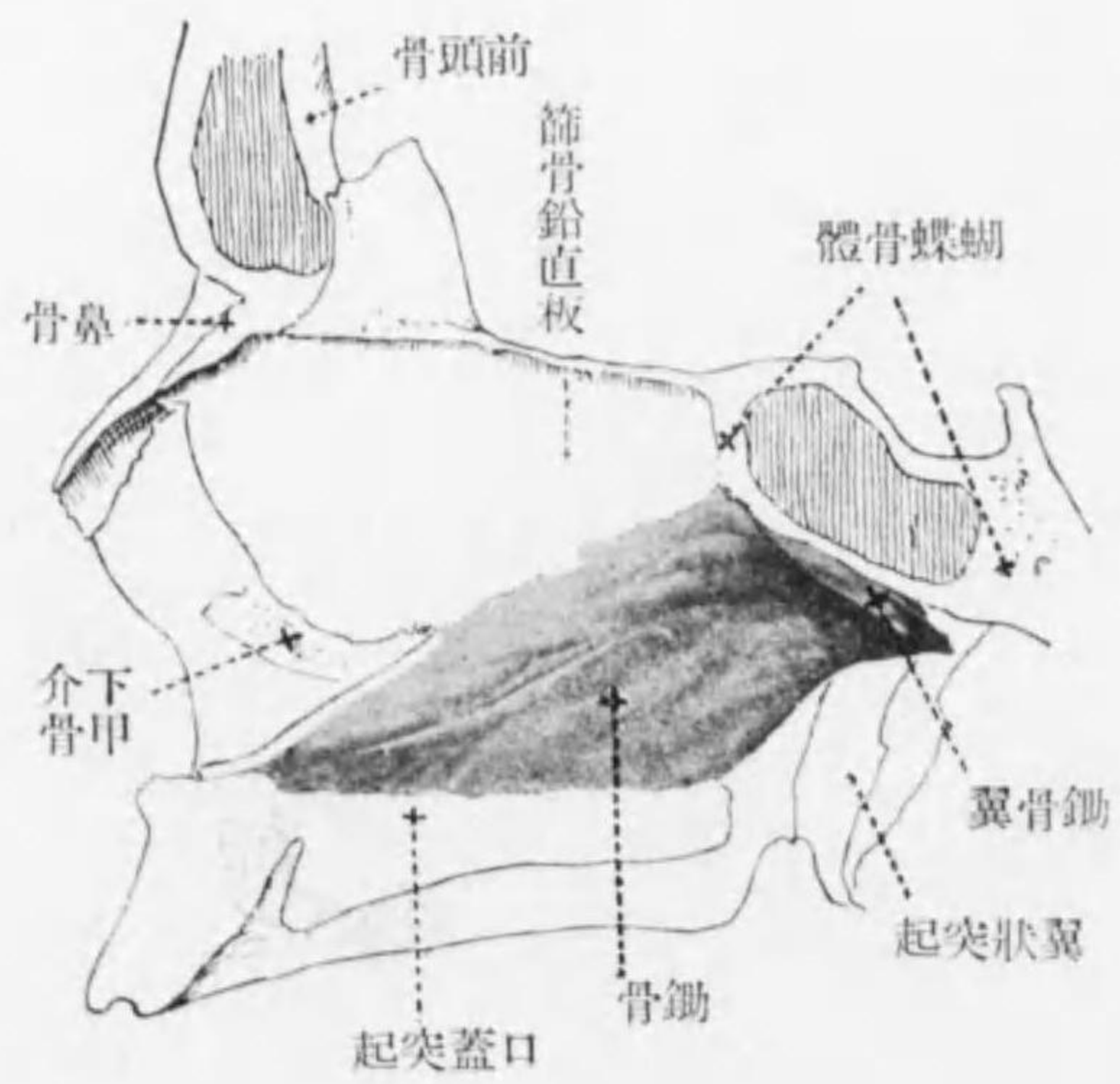
(斷 中 正)



(Nach Spalteholz.)



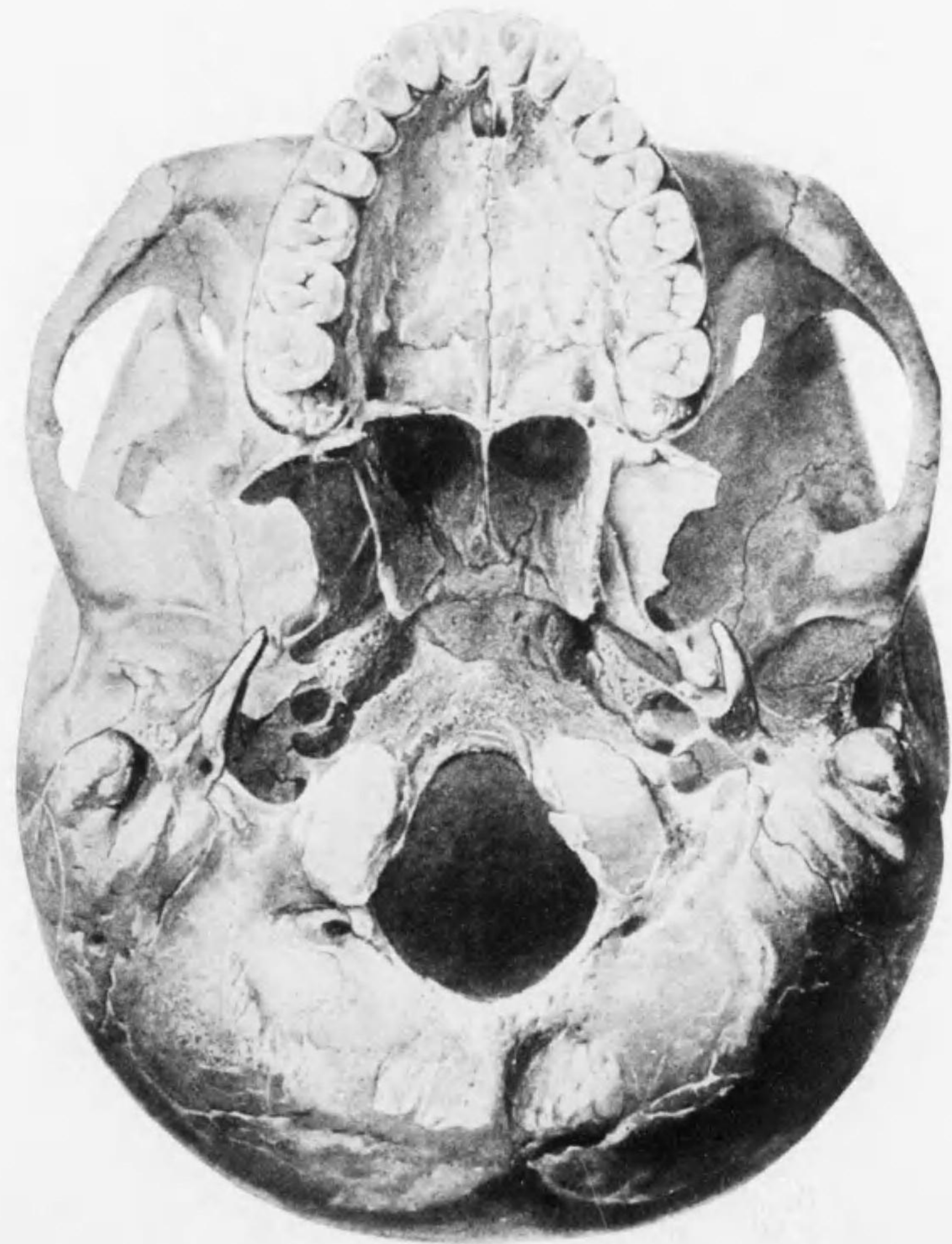
篩骨鉛直板



骨鋤

(Nach Spalteholz.)

底蓋頭
(面外)

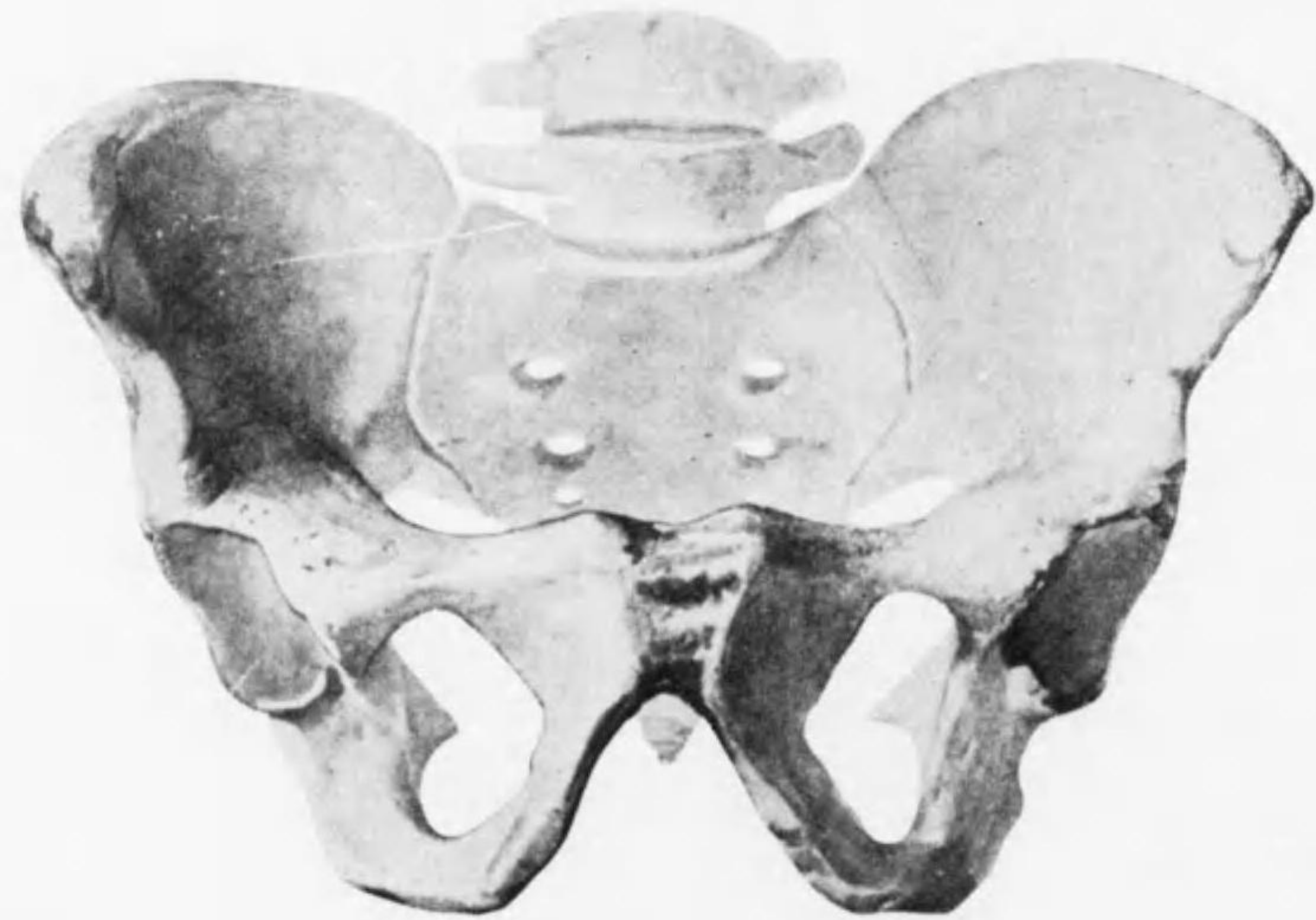


(Nach Spalteholz.)

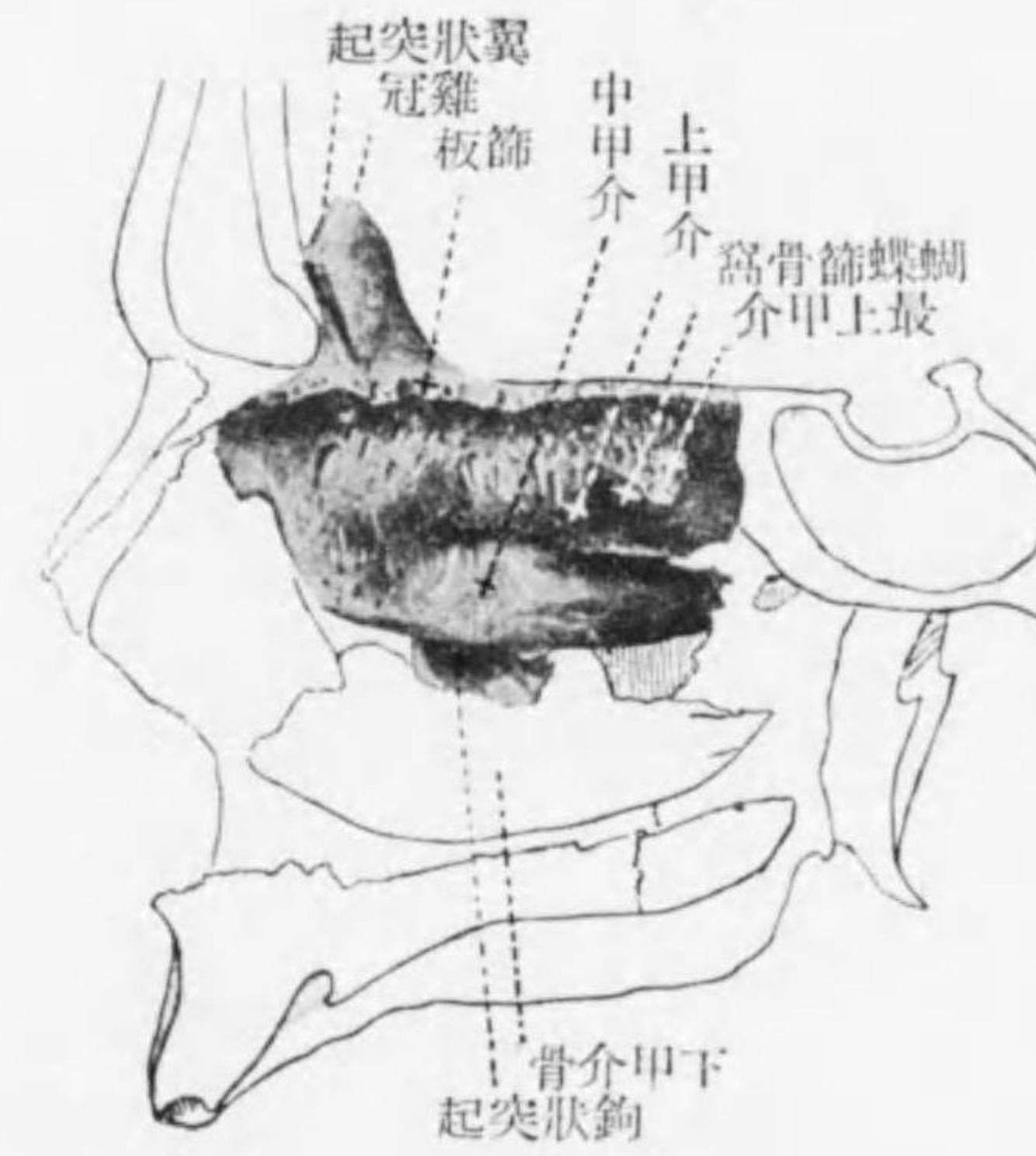
盤 骨

(面 前)

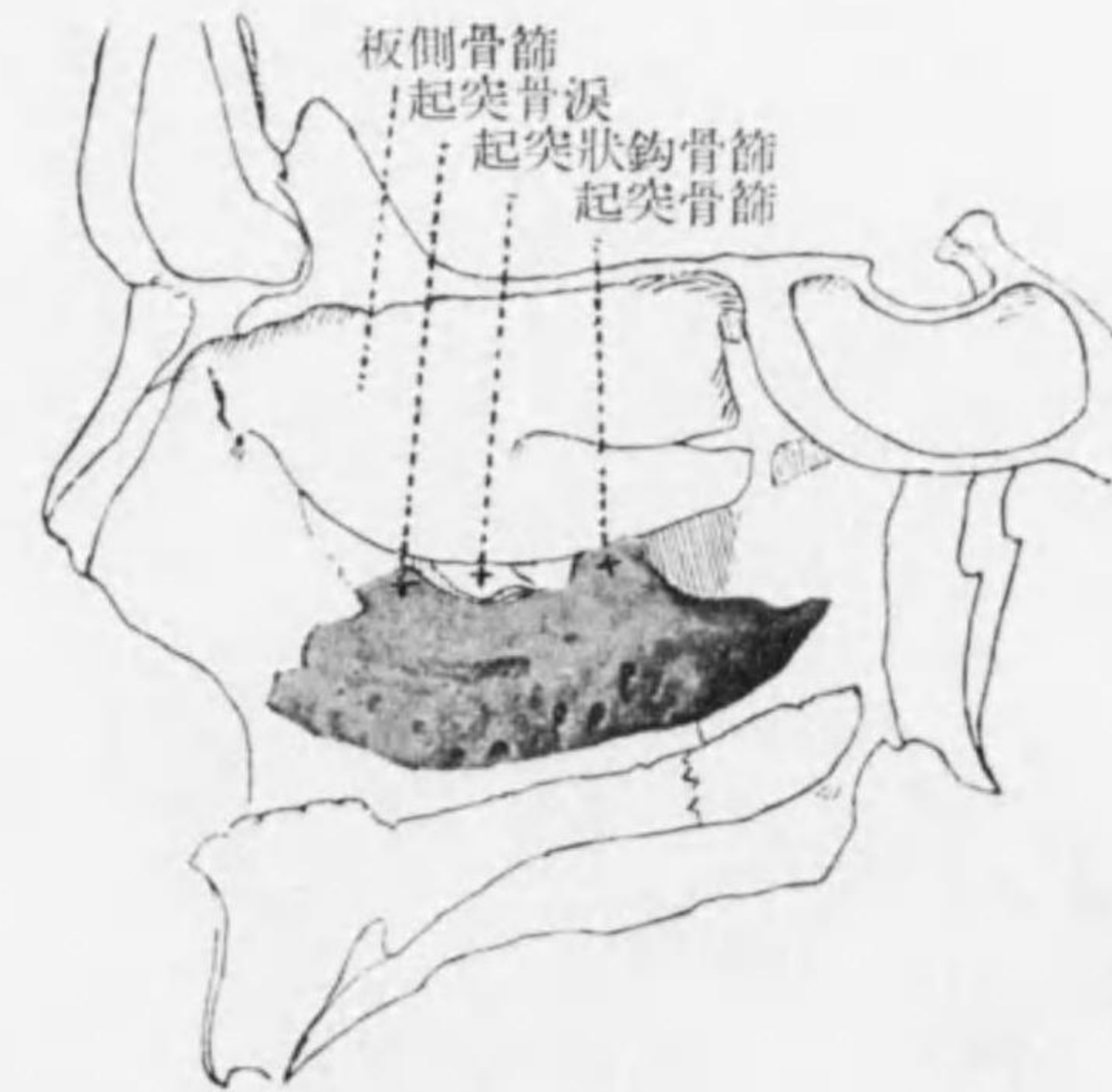
性女 圖下 性男 圖上



(Nach Spalteholz.)



篩骨側部 (右迷路)



下甲介骨 (右)

(Nach Spalteholz.)

肩胛關節 (右)



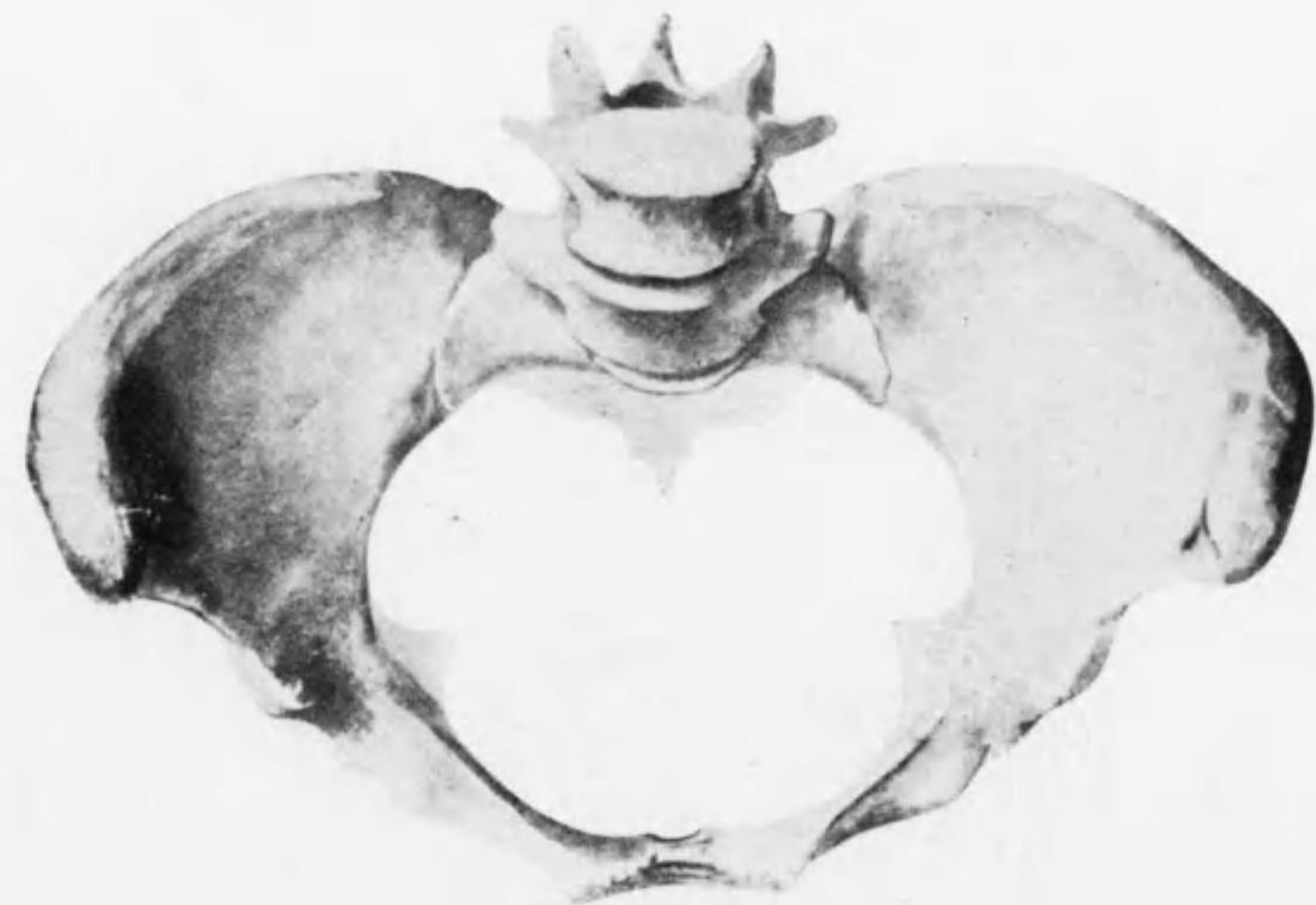
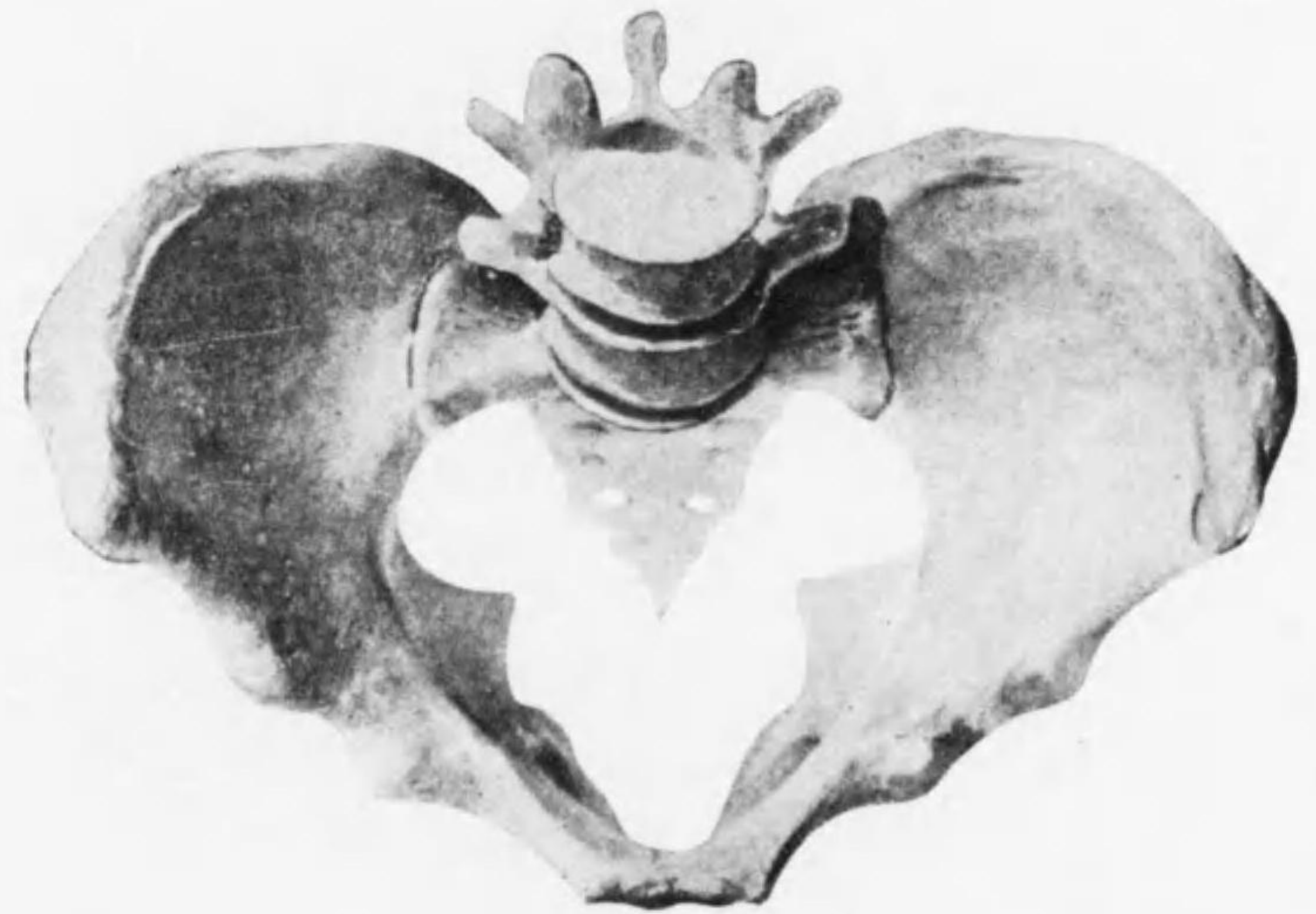
(Nach Spalteholz.)

肘關節 (右)

盤 骨

(面 上)

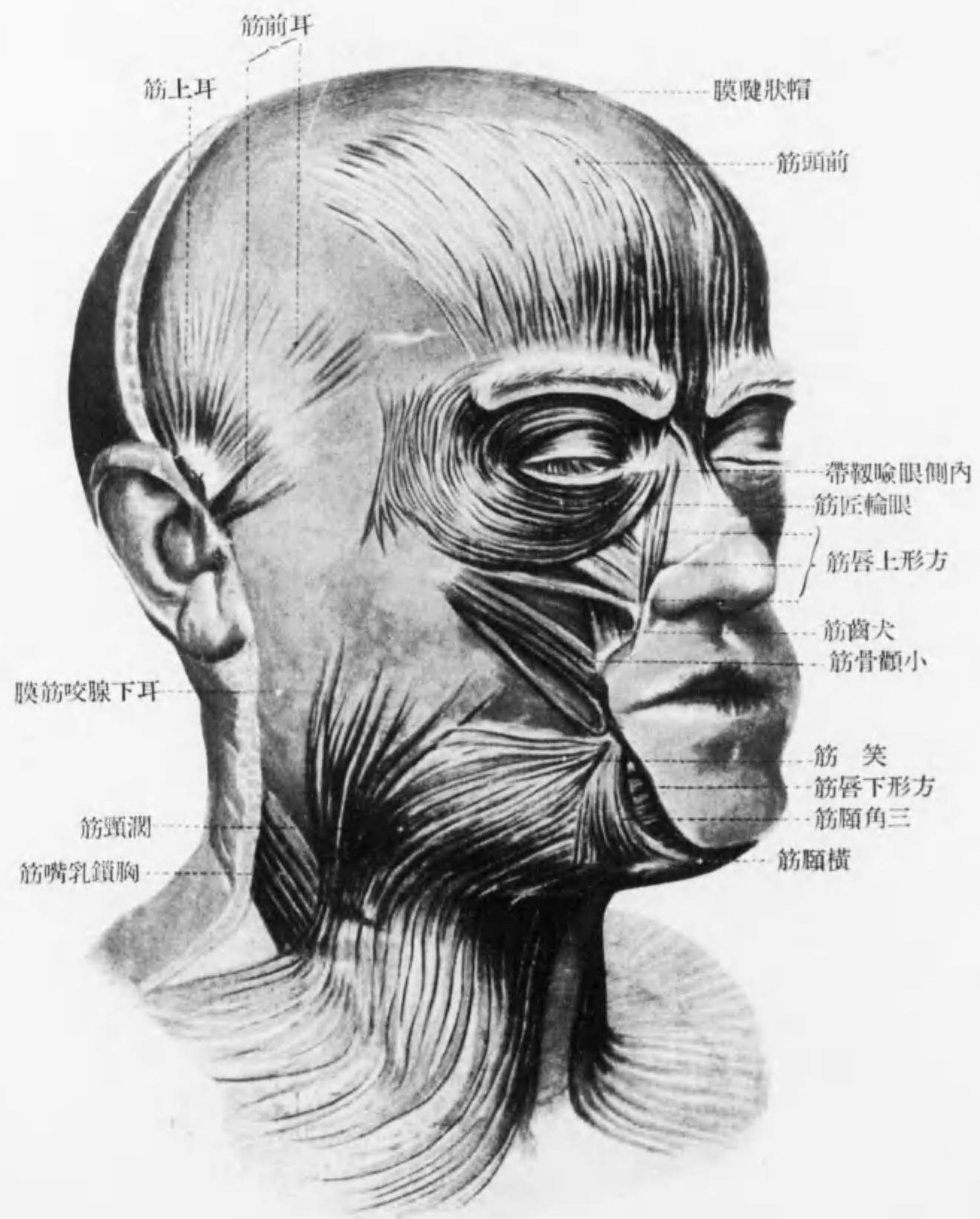
性女 圖下 性男 圖上



(Nach Spalteholz.)

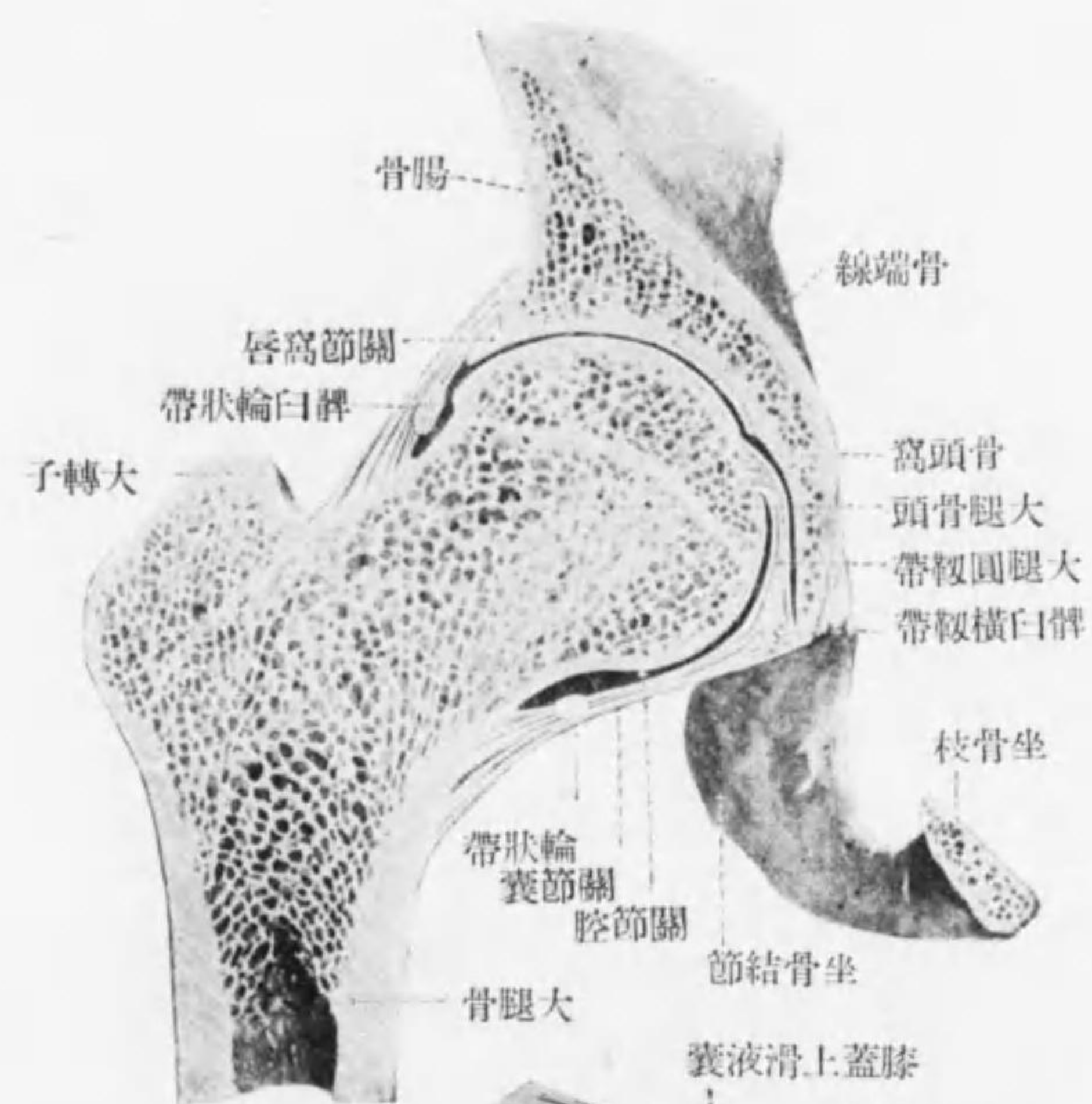
筋諸面顏及蓋頭

(側 右)



(Nach Spalteholz)

股關節(右)



膝蓋關節(右)



(Nach Spalteholz.)

筋 頸
(面 前)

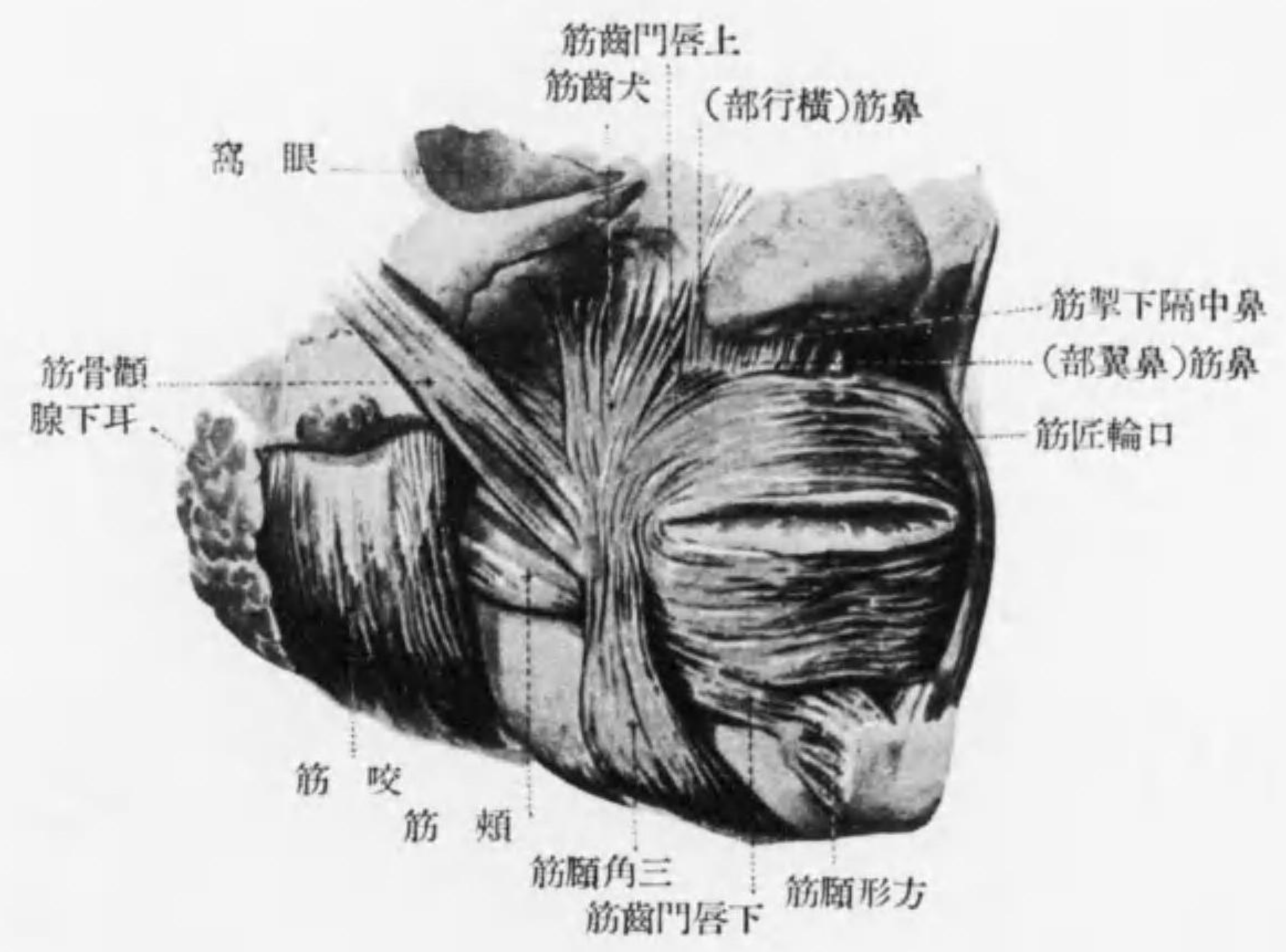


骨胛肩

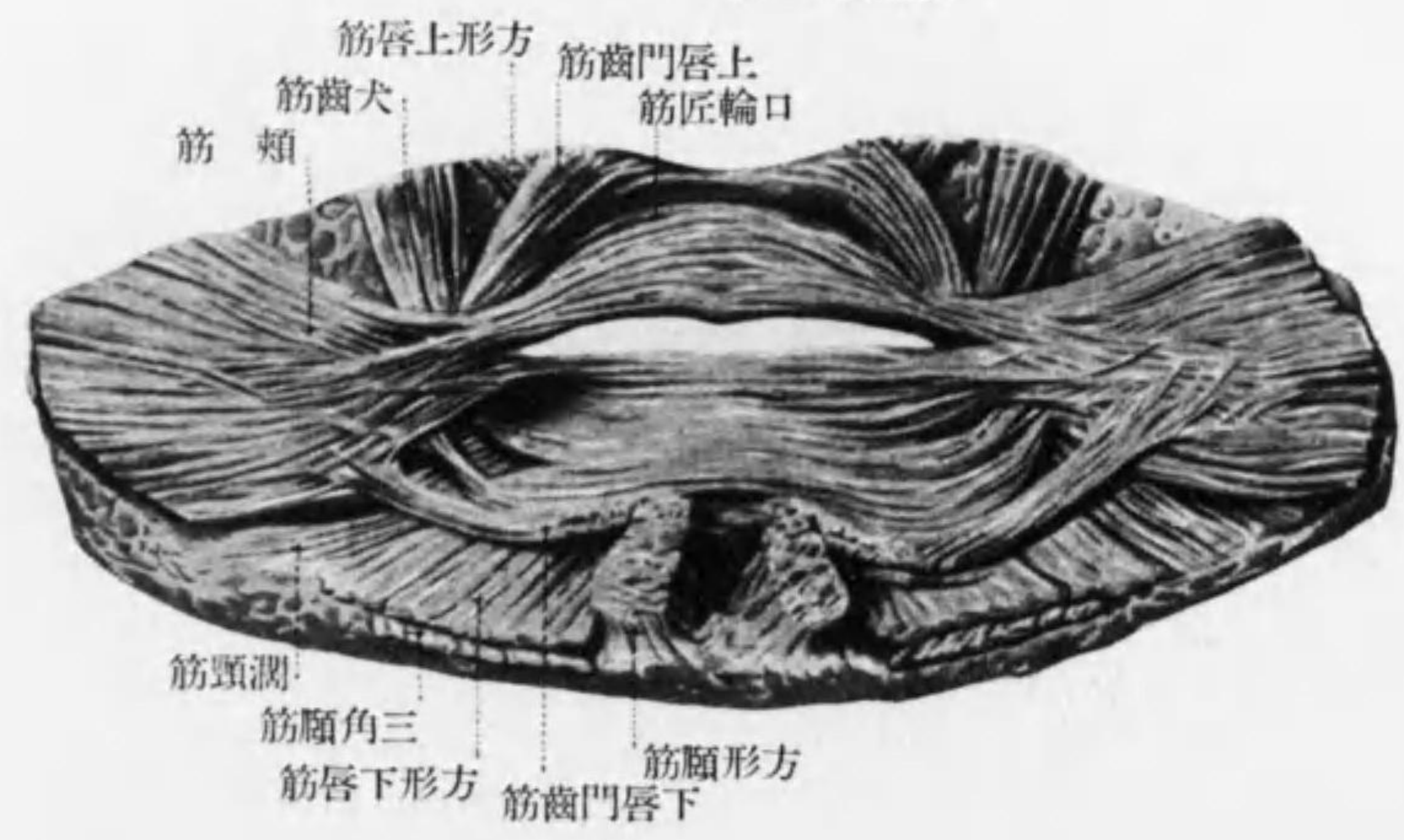
(根斷)骨鎖

(Nach Spalteholz)

筋 諸 圍 口
(側 右)



(リヨ面後)



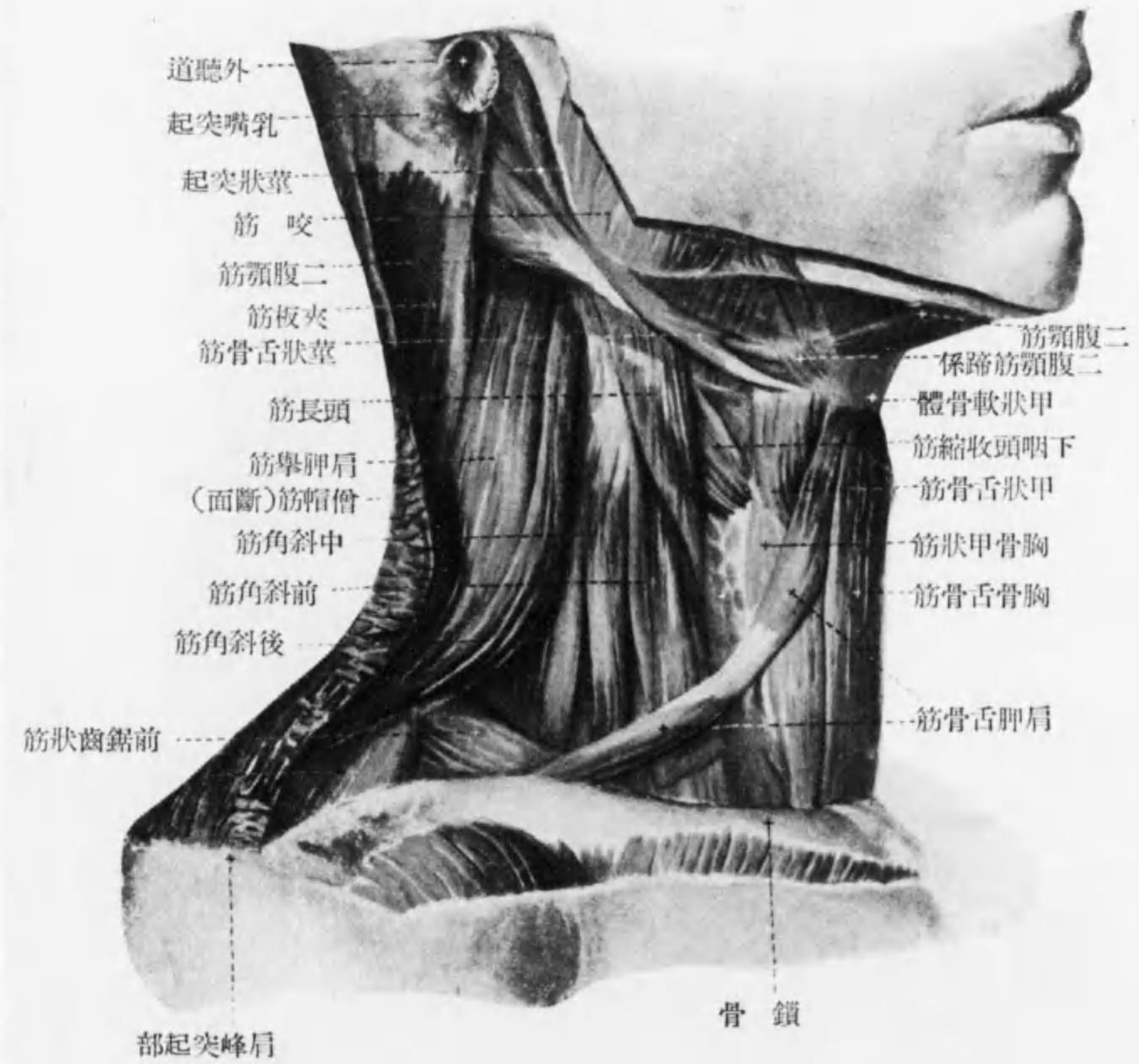
(Nach Spalteholz)

筋 腹 直
(面 前)



(Nach Spalteholz)

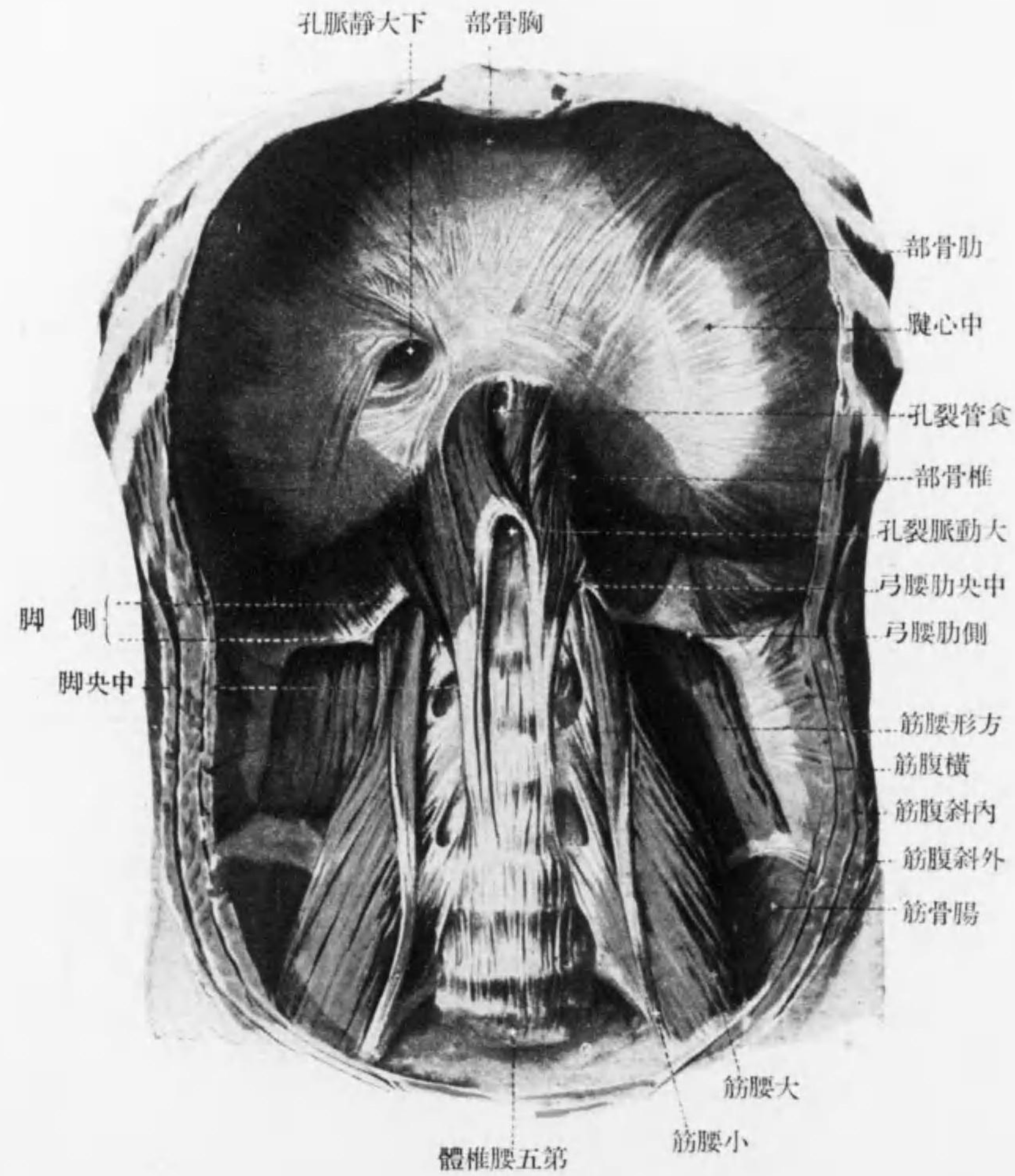
(層三第) 筋 頸
(側 右)



(Nach Spalteholz)

膜 膈 横

(ヲヨ方前及方下)



(Nach Spalteholz)

(層三第) 筋 腹

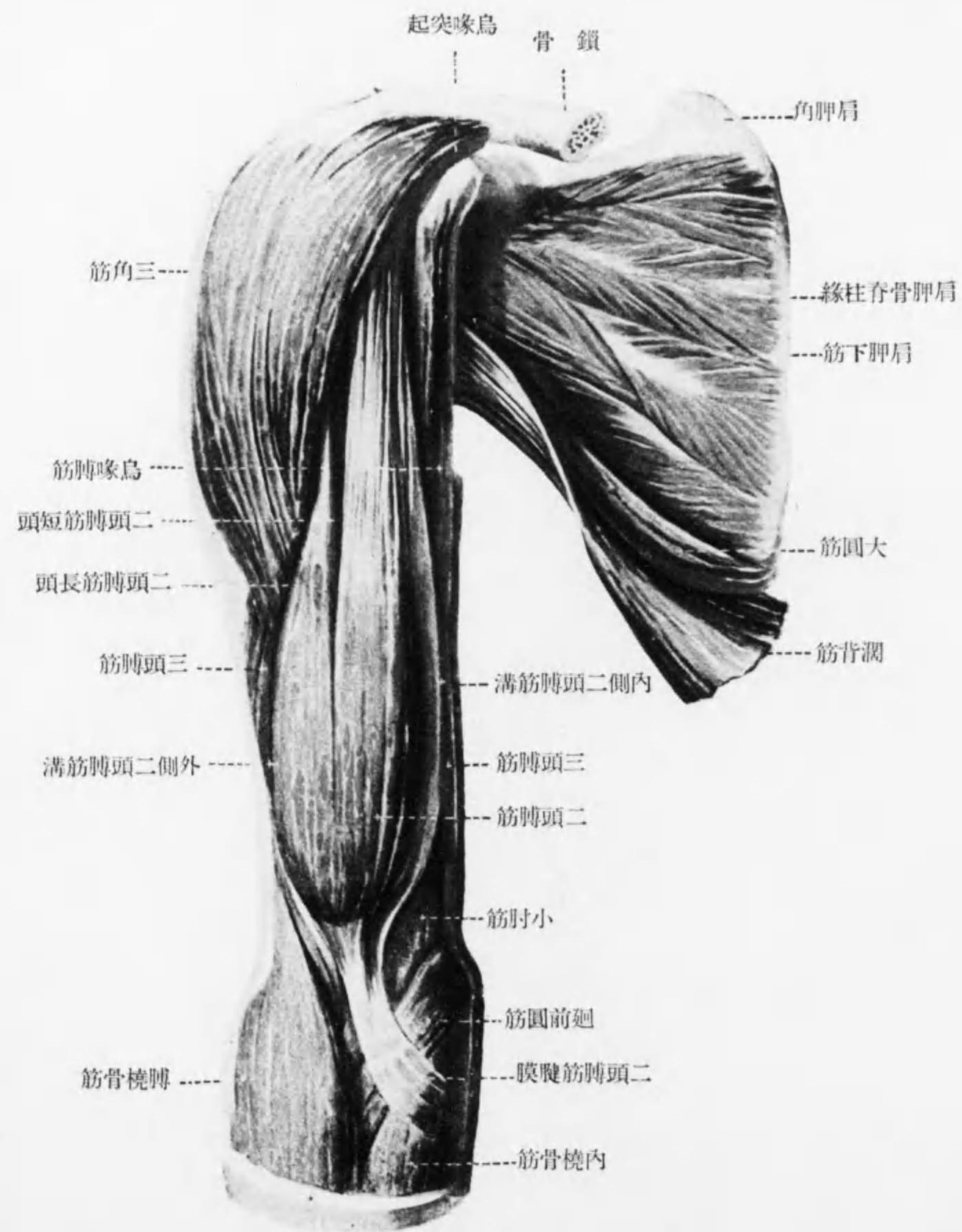
(面 前)



(Nach Spalteholz)

筋諸膊上側右

(面 前)



(Nach Spalteholz)

(層 淺) 筋 背

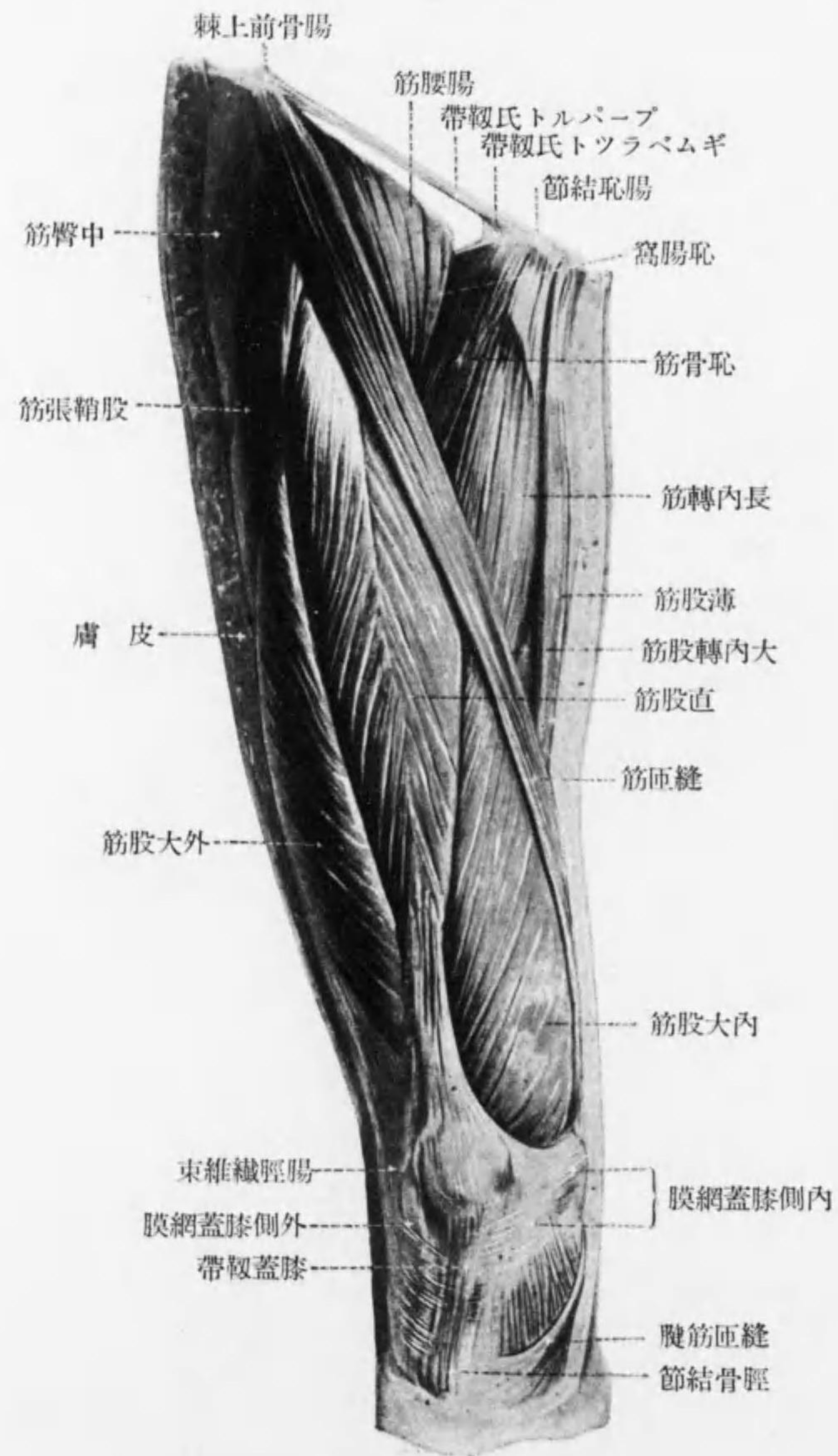
(面 後)



(Nach Spalteholz)

筋諸腿大側右

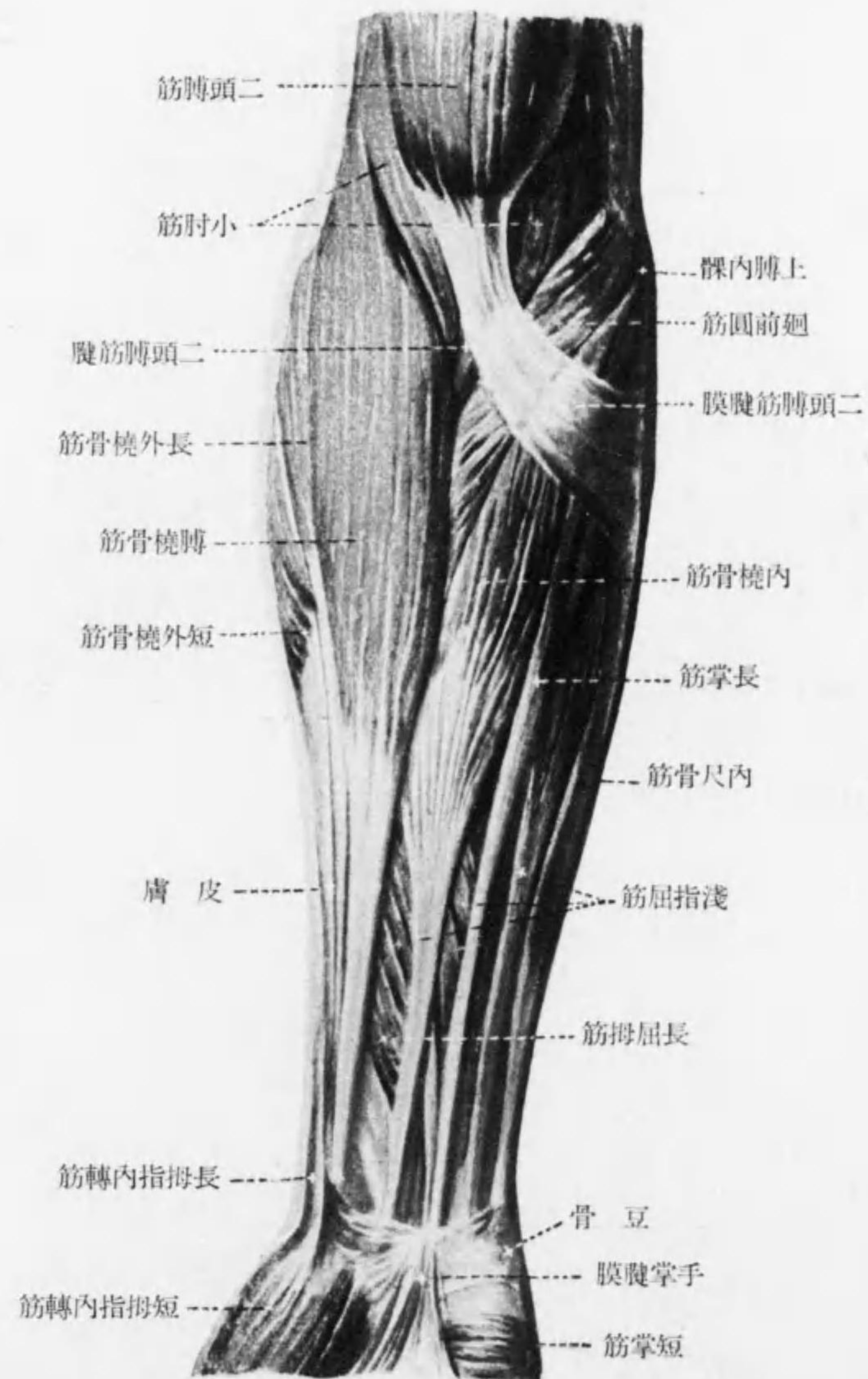
(面 前)



(Nach Spalteholz)

筋諸膊前側右

(面 前)



(Nach Spalteholz)

筋諸腿下側右
(面側)



(Nach Spalteholz)

第十五版自序

本書ハ初版發行以來既ニ二十六星霜ヲ經、版ヲ重ヌル毎ニ筆ヲ禿シ時代ノ進運ニ隨伴シ改訂増補シ來リシガ年次版ヲ重ヌル毎ニ嘖々タル世ノ好評ヲ博シ、茲ニ第十五版ヲ上梓スルノ盛運ニ際會セシハ著者ノ最モ欣快トスル所ナリ、是レ一ニ讀者諸彦ノ甚大ナル後援ニ由ルト雖モ又一面斯界發展ノ結果ニ外ナラザルヲ以テ、著者之レニ酬ユルニ曩ニ鍼灸學編、生理學編及ビ消毒學編ヲ根本的ニ改善大增補シ且ツ挿圖ヲ全部改版シ第十四版ニ於テ新タニ參考トナルベキ數葉ノ着色大解剖圖ヲ插ミ今回更ニ全部ヲポイント活字トナシ、ソノ面目ヲ一新シ斯界進步ノ一端ニ供ヘタリ、幸ニ好評ヲ賜ランコトヲ望ム。

昭和十二年六月十五日

著者識

第一版自序

鍼灸治學ハ、泰西醫學ノ東漸ニ伴ヒ一時不運ノ境涯ニ徜徉シ、將サニ世人ノ記憶ヲ脱セムトスルニ瀕セシト雖モ、我國古來ノ醫術ニシテ汎ク世ニ行ハレ一タビ隆盛ヲ極メタル鍼灸ノ眞理ハ固ヨリ永ク地中ニ蟄伏シ居ルモノニアラサレバ、茲ニ再ビ巍然トシテ其頭角ヲ顯ハシ、今ヤ療屬トシテ有効缺クベカラザルモノタルヲ認識セラレ、亞テ之ヲ研究シ倍々其蘊奧ヲ探ラントスルモノ歲月ト共ニ其多キヲ加フルニ至リ、從テ其研究ノ資ニ供スベキ著書世ニ行ハル、モノ少ナシトセズ、然レドモ一長一短未ダ執テ以テ後進者ノ教科ニ適スベキモノアルヲ見ザルハ、著者ノ竊カニ遺憾トセシトコロナリ。

而シテ著者ハ夙ニ志ヲ斯學ノ發達普及ニ注ギ、其教育機關ヲ設ケテ

後進者ヲ育成スルコト茲ニ歲アリ。此間成書ニ照ラシ經驗ニ鑑ミ説ケバ筆シ、述ブレバ叙シタルモノ累積シテ遂ニ一編ノ書冊ヲ成スニ至レリ。關西鍼灸學院ノ教科書ハ即チ之ニ屬ス。想フニ斯學ハ研究其歩ヲ進ムルニ從ヒ、益々深遠ニシテ廣汎ナルヲ覺ユルノミ。

而カモ著者ガ自叙シタル教科書ニ據リ養成シタル後進者ノ成績ニ徵スレバ、結果良好ニシテ稍ヤ著者ノ理想ニ近カラントスルノ曙光ヲ認メシヲ以テ、他日之ヲ補正シテ公刊セントスルノ意アリシモ、如何セン身ハ日常業務ノ繁劇ニ苦メラレ素志ヲ貫クノ閑ヲ得ザルコト實ニ三春秋ニ涉リ、在苒今日ニ至リシガ、時運ノ要求ハ徒ラニ上梓ノ遷延ヲ容サズ、止ムナク業務ノ閑餘ヲ以テ之ガ編纂補修ニ罷メ、遂ニ公刊スルノ運ビニ至レリ。而シテ著者ヲシテ本書ヲ公刊スルノ決心ト勇氣ヲ鼓舞セシメタル動機ハ蓋シ辱知上村行彰先生ノ指導

ニ負フ處鮮少ナラズ。是レ先生ニ對シ虔デ感謝ノ意ヲ表スル處ナリ。

顧フニ著者ハ淺學菲才素ヨリ著書ノ器ニアラズ、此故ニ書中記スル處敢テ眞理ノ全班ヲ盡シタリトハ信ゼズ、異日大方ノ示教ヲ俟テ更ニ訂正ヲ加フルコトアルベシト雖モ、幸ニ鍼灸治學ヲ研究セムト欲スルノ士ニ對シ、庶幾ハ多少ノ參考ニ資スル處アラバ當ニ著者ノ本懷ノミニアラザルナリ。

明治四十五年五月十五日

山本新梧識

第二版自序

本書第一版ハ世ノ要求非常ニ切ナリシカバ、急遽版ニ上セシ爲メ著者ノ意ニ充タザルモノ甚ダ多カリシガ、今ヤ茲ニ版ヲ改ムルノ機運ニ遭遇シタルヲ以テ新ニ數項ヲ加ヘ、全編ニ亘リテ遺漏ヲ補ヒ、挿圖ヲ増シ、殆ンド改著ノ如キ増補訂正ヲ爲シ、且ツ挿圖ノ不鮮明ナルモノハ總テ鮮明ナルモノト取更ヘタリ。然レドモ之ヲ以テ未ダ完璧トナスモノニ非ラズ、版ヲ重ヌルニ從ヒ、斯學ノ進歩ニ隨伴シテ倍々改善ヲ加ヘ、遺漏ナキノ域ニ達セシムルヲ期スベシ

大正四年衆議院議員總選舉ノ日

著者誌

第三版自序

本書ノ世ニ出テヨリ僅カニ三星霜餘ニシテ早クモ第二版ハ讀者諸士ノ歡迎シ盡ス所トナリ、今ヤ第三版ヲ發行スルニ至リタルハ著者ノ大ニ光榮トシ、且ツ欣喜ニ堪ヘザル所ナリ。茲ニ於テカ、著者ハ前版ノ猶ホ足ラザル所ヲ補ヒ、字句ノ妥當ナラザルモノハ之ヲ訂シ、更ニ精圖ヲ加ヘ或ハ不鮮明ナルモノハ之ヲ取更ヘ、以テ斯學進步ノ趨勢ニ伴フト同時ニ讀者諸士ノ厚庇ニ酬ユル所アランコトヲ期セリ。幸ヒニ愛讀ヲ給ヘ。

大正六年初夏

著者識

凡例

- 一、本書之ヲ分テ四編トシ、解剖學、生理學、鍼灸學、消毒學ノ四科ヲ前編及ビ中編ニ分載シ、經穴學、病理總論、病理治療學ノ三科ヲ後編ニ載ス。
- 二、本書ハ專ラ教科書ニ充ツルタメニ編述セルモノナルヲ以テ解剖生理二科ノ如キハ可及的詳密ナランコトヲ欲シタリ。世或ハ鍼灸術ニ於テカ、ル深遠ナル智識ヲ要セズト曰ハン。然レドモ鍼灸術タル素ヨリ疾病治療ノ一技術タルヲ以テ之ガ適切ナル治方ヲ行フニハ人體ノ基礎タル解剖生理ノ二科ニ通ジ、以テ之ヲ應用スルニ非ズンバヨク之ガ目的ヲ達スルコト能ハズ、是レ吾人ガ本科ヲ殊ニ詳述セシ所以ナリ。
- 三、然リト雖モ解剖生理ノ二科ハ之ヲ教授スルニ當リ必ズシモ全編ヲ授ケントスルモノニアラズ。先ヅ其要ヲ摘ミテ之ヲ授ケ、大綱ニ通ジタル後チ必要ニ應ジテ之ヲ補充スルノ方針ニ據ルヲ可トス。殊ニ解剖學ハ之ヲ系統的ニ敘述セルヲ以テ局部ノ應用ニハ更ニ局處的ニ解說センコトヲ要ス。

四、本書ハ教科書ノ傍ラ鍼灸術者研究上ノ參考ニ資スルノ目的ニ出ヅルヲ以テ挿圖ヲ多クシ電メテ理解シ易カラシムコトヲ期セリ。

五、經穴ノ如キ古來傳フルトコロハ其數徒ラニ多クシテ悉ク之ヲ記憶スルモ其効甚ダ鮮少シ、故ニ本書ニ於テハ專ラ其必要ト認ムル經穴ノミヲ擧ゲ且ツ之ニ解剖的部位ヲ附記シテ記憶並ニ應用ニ便セリ。

六、鍼灸術ノ勃興ト共ニ之ヲ修メントスルモノ多キニ至リ、從テ遠ク師ニ就ク能ハザルモノ、タメニ特ニ夏季講習ノ便ニ當ツ。然レドモ月々小冊子發行ハ讀者ニ却テ不便不經濟ニシテ且ツ紛失等ヲ慮リ(別ニ細則ヲ設ケ)茲ニ本書ヲ編製セリ。

七、本教科書ハ解剖學生理學消毒學鍼灸學ノ四編ニ分類セルガ本書ヲ學ブノ準序ハ先ヅ前編ノ骨學ヨリ始メ筋學全部ヲ充分修得セバ更ニ中編ノ解剖學ノ内臟學ヨリ血管神經編ニ及ボシ之レヲ修了セバ更ニ又前編ノ生理學鍼灸學ニ及ボシ續テ中編ノ生理學第二編カラ鍼灸學、後編ノ經穴學ト順ヲ追テ進メバ其理解蓋シ早ヤカルベシ、而シテ後編病理學ハ最後トスベシ。

鍼灸科沿革小史

抑も鍼科の治術的應用として遠く太古より行はれたるは「本草綱目」に古者以石爲鍼季世以鐵代石云々とあり、又我國に於ても「允恭天皇紀」に破身治病云々の記事あるを以て知るべし。而して所謂鍼術として認むべきは人皇二十九代欽明天皇二十三年支那より輸入されたるもの其主にして、同年秋八月吳の人知聰なる者藥書明堂圖等百六十卷を持して來朝す。是れ外國醫書殊に鍼科典籍の我國に入るの始めなり。以來此鍼術を考究する者多く、其後人皇四十二代文武天皇大寶年中に定められし大寶令にも宮内省典藥寮の醫師醫博士醫士醫生に對し鍼師・鍼博士・鍼生等を置き、鍼博士は鍼生を教育することを掌どり、鍼生は鍼を學ぶことを掌どるとありて、鍼科の専門茲に始めて基礎を置かれたり。「醫心方」の著者たる丹波康賴氏も亦た鍼博士にして、「醫心方」

欽明天皇御宇二十三年八月紀元一二二三年

の第一卷に醫學の大體を論じ、其第二卷に鍼灸の諸法を擧げ且つ用ゆる處の鍼に九種を區別し、又病理的に人身體の刺點即ち孔穴を明かにせり。灸法も亦た支那にありては古代より行はれたるものにして、鍼科と共に我が國に盛となり大寶令にも鍼灸の法として鍼科の中に入れ、孔穴主治略ほ同一に行はれたり。爾後鍼灸術は旺に發展し、平安朝時代にありては醫道の要部を占め、鍼博士は醫博士と相并びて其術の秀でたる人之に任ぜられしも、鎌倉時代より室町時代に至りては逐次醫官の廢類と共に鍼博士及び鍼師は名實共に消失し、鍼科に名門を出す能はず。之を以ても當時鍼家の振はざりしを察すべし。但し鍼灸の術は依然治方の一部として却つて内外醫家に應用されしは、諸家の著書に鍼治法の載せざるなきを以ても知らるべし。斯くして織田豊臣氏時代に及べり。此期に於て曲直瀨道三氏起りて醫學を中興するに當り、鍼灸集要の一書を著はして鍼

灸治法を唱道せり。但し丹波氏の如く、鍼科は醫の本道なりと認めず、治病上の一部として記載せられたるに過ぎず。又此期に應用せられたるは鈹鍼と毫鍼にして甲は主として外科に屬し乙は専ら鍼科用とせられ、稍や鍼灸科の復興せられたるに従ひ漸次鍼灸科専門の名家を出すに至れり。即ち入江頼明、吉田意休、匹地喜庵の諸氏及び京都に御蘭意齊氏起り金銀鍼を研究し、小槌の扁平なるものを以て打鍼的に刺鍼する等大に鍼術を以て名を成せり。

次で徳川氏初世に入りては、元和元年綱吉將軍令して鍼術の振興を圖られ、杉山和一氏起つて鍼治講習所を設け諸生を教授し大に努むる處ありし結果、門人三島安一氏に至り更に事業を擴張して講堂を諸州に増設し、病原的に經絡孔穴を究明し鍼の運用を論じ旺んに門弟を養ひ、所謂杉山流鍼科の發展を擧げたり。而して其當時は捻鍼、打鍼、管鍼の三法を用ひたるが如く、其捻鍼は支那傳來の術にして毫鍼を用ひ、打鍼

は御蘭意齊氏の創始にして主として腹部又は孔穴を論せず刺鍼せり。又管鍼は杉山和一氏の創始にして現今使用するもの即ち是れなり。故に管鍼・打鍼は日本獨特の發明にして支那より傳來せしものにあらざるなり。昔日支那より傳來せし支那流の鍼治法とは其趣きを異にし、我が國醫家の研究に因りて鍼術は著しく進歩改發するに至りしは明けし。斯くの如くして徳川氏中世に入り、益々鍼科の復興を計らんとして攝津の人菅沼周圭氏の如き「鍼灸則」「鍼灸摘要」「鍼灸治驗」等の書を著はし、盛に鍼科の改發を唱道せり。當時杉山氏吉田氏の各流の外、京都に御蘭中渠氏あり、父祖の傳を受け打鍼を専門とせり。次で徳川季世に及んで鍼灸科を以て専門とし後侍醫法眼に任せられたる甲府の人石阪宗哲氏出て、自家獨創の見を以て斯術を研究し「骨經」「內景備覽」を著はして人體解剖を論じ、更に「鍼灸說約」「鍼灸知要」等の書を著はして刺鍼の方法を説き、常に革新を唱へたれば、鍼科の面目大に一

新せられ、旺んに斯術の有効なるを唱道する等斯術の復古漸やく色めくに際し、維新の革命となり、時の將軍政權を奉還して大政は帝室に歸し、諸般の制度皆な其範を西洋に採るに至り、西歐の文物盛に輸入せられ爲めに我が醫界の制度方針も一大變遷を受け、三千年來の支那文化に伴ふ醫方は明治初年に於て、西洋醫學の勢力に拮抗する能はず。鍼灸科も皇漢醫道と共に逐次衰頽して明治十八年前後には殆んど識者の認むるものなく、遂に下賤者又は盲人の業となり漸次衰頽するに至れり。恐らくは鍼灸科沿革史上最も萎靡せし時代と見て可ならん乎。然りと雖も勢ひ極まりて轉ずるは自然の理にして、嘗て西歐技術の巧妙に心酔し本邦固有の文物を棄て、亦顧みざりしものも再び之を研究採擇するの念を生ずるに至り、殊に鍼灸術の如き永く我國固有の妙技として尊誦せられしものも二三盲啞學校に於て之を養成するの他何等活動を見ることなかりしが、醫學の進運と共に漸次指を此方面に

染むるものを生じ故大久保適齋氏の如き之を學理的に研究し、又醫學博士三浦謹之助氏の如き夙に之を研鑽して廣く歐洲に報ずるに至り、或は原田重雄、樫田十次郎の兩學士が其研究成績の發表を見、其他幾多斯道に關する著書出づるに至りて一般士民も亦之を要求するもの相踵ぎ従つて鍼灸術者は徒らに舊法を墨守して時勢の進歩と相反戻するの非なるを悟り學理を應用して之を實地に施すことの斯道進歩に益あるを察し、茲に再び蹶起するの時機到來して諸所に之が養成所を設立し數多新進の斯業者を出すに至りたるを以て、明治三十五年に大阪府を始めとし各府縣に於ても各々之が免許に一定の制度を設けて試験法を規定し、新學問の素養あるもののみ之を許可するの方針を執りたる結果は斯業者向上發展の基礎を成し、或は組合を設けて之を誘導し、或は學人會を設けて之が研究に従事するの機運に際會せしが、遂に明治四十四年に至り内務省は永く懸案たりし鍼灸術營業に關す

る取締規則を發布し兼て試験法を制定し同四十五年一月より實施せられたり。殊に該試験委員には民間の専門家を以てし、著者新梧の如きは第一回より大阪府、和歌山縣、奈良縣等の其委員に擧げられ從來區々なりしものも茲に始めて全國統一の基礎を確立するに至りたり。爾來廿七星霜幸に近時幾多學者の斯學に指を染められ時々其業績の發表せらるゝを見、一般刀圭家も大に注視し眞に斯學向上の曙光を窺ふの機運に際會するに至れり。

昭和十二年新編之季訂之

本日鍼灸學教科書(前編) 目次

第一編 解剖學

序論	一
第一 系統解剖學	二
第二 局部解剖學	二
第三 組織學	三
第四 胎生學	三
第五 比較解剖學	三
成形原素	四
細胞	五
組織	八
第一 上皮組織	九
第二 筋組織	九
第三 神經組織	一〇
神經細胞	一〇
神經纖維	一〇
第四 結締組織	一〇
結締組織	一〇
彈力組織	一一
第二章 骨學各論	一
第一 軀幹骨	三
第一 脂肪組織	三
第二 色素組織	三
第三 內皮組織	三
第四 軟骨組織	四
第五 軟骨組織	四
第六 骨組織	五
第七 骨組織	五
第一章 骨學總論	七
第一 骨 髓	七
第二 骨 膜	八
第三 骨の主成分	八
第四 骨の發生及び長育	九
第五 軟 骨	一〇
第六 骨の形狀	一〇
第七 骨數及び骨格等	一一

甲 脊椎骨	三
イ 眞椎	三
一 屈伸椎	三
二 廻旋椎	三
第一頸椎(載域)	三
第二頸椎(樞軸)	三
□ 假椎	三
一 薦骨	三
二 尾閥骨	三
乙 胸骨	三
丙 肋軟骨	三
胸廓	三
丁 舌骨	三
戊 頭蓋骨	三
イ 腦頭蓋	三
一 後頭骨	三
二 蝴蝶骨或は楔狀骨	三
三 篩骨	三
四 前頭骨	三
五 顛顛骨	三

六 顛頂骨	四
□ 顔面頭蓋	四
一 上顎骨	四
二 口蓋骨	四
三 涙骨	四
四 下甲介骨	四
五 鼻骨	四
六 顴骨	四
七 鋤骨	四
八 下顎骨	四
腦頭蓋の縫合及び百會	四
頭蓋頂と頭蓋底との區別	四
顔面頭蓋の腔窩	四
第二 四肢骨	六
甲 上肢骨	六
イ 上肢帶	六
一 鎖骨	六
二 肩胛骨	六
□ 固有上肢骨	六
一 上膊骨	六
二 前膊骨	六

三 尺骨	七
二 橈骨	七
一 腕骨	七
三 手骨	七
一 腕骨	七
二 掌骨	七
三 指骨	七
乙 下肢骨	七
イ 下肢帶	七
一 無名骨或は臑骨	七
一 腸骨	七
二 坐骨	七
三 耻骨	七
骨盤	八
白	八
盤	八
□ 固有下肢骨	八
一 大腿骨	八
二 下腿骨	八
一 膝蓋骨	八
二 脛骨	八
三 腓骨	八
三 足骨	八

第二 靱帶學

1 跗骨	八
2 蹠骨	八
3 趾骨	八
甲 不動關節	九
一 縫合	九
二 接合	九
乙 可動關節	九
一 全動關節	九
二 鞍狀關節	九
三 髌狀關節	九
四 蝶番關節	九
五 車軸關節	九
六 叢合關節	九
靱帶	九
一 囊狀靱帶	九
二 副靱帶	九
三 固有靱帶	九
第一 軀幹靱帶	九
第一 軀幹靱帶	九
第二 椎骨聯接	九

イ	椎骨體間の靱帯	一〇六
ロ	椎骨弓間の靱帯	一〇七
ハ	囊狀靱帯	一〇七
ニ	横突起間靱帯	一〇七
ホ	棘間靱帯	一〇七
ヘ	前縦靱帯	一〇九
ト	後縦靱帯	一〇九
乙	脊柱頭蓋蓋連接	一〇九
一	載域後頭連接	一〇九
二	載域樞軸連接	一〇九
運	動	一〇〇
丙	肋骨連接	一〇〇
一	肋骨椎骨連接	一〇〇
二	肋骨胸骨連接	一〇〇
三	肋骨間連接	一〇〇
丁	下顎關節	一〇二
イ	囊狀靱帯	一〇三
ロ	關節間軟骨	一〇三
ハ	内側靱帯	一〇三
ニ	外側靱帯	一〇四
ホ	莖狀顎靱帯	一〇四

第二	上肢靱帯	一〇四
甲	肩胛帶連接	一〇四
一	胸鎖關節	一〇四
イ	囊狀靱帯	一〇四
ロ	關節間軟骨	一〇五
ハ	胸鎖靱帯	一〇五
ニ	鎖骨間靱帯	一〇五
ホ	肋鎖靱帯	一〇五
二	肩峰鎖骨關節	一〇五
イ	囊狀靱帯	一〇六
ロ	肩峰鎖骨靱帯	一〇六
ハ	烏喙鎖骨靱帯	一〇六
乙	肩胛關節	一〇七
イ	關節唇	一〇七
ロ	囊狀靱帯	一〇七
ハ	烏喙膊靱帯	一〇七
ニ	結節間滑液囊	一〇七
丙	肘關節	一〇八
イ	囊狀靱帯	一〇八
ロ	内側靱帯	一〇八
ハ	外側靱帯	一〇八

二	橈骨輪狀靱帯	一〇八
丁	下橈尺關節	一〇九
イ	囊狀靱帯	一一〇
ロ	三角軟骨	一一〇
戊	手關節	一一〇
一	橈腕關節	一一一
二	腕骨間關節	一一一
三	腕掌關節	一一一
四	掌指關節	一一三
五	指關節	一一四
第三	下肢靱帯	一一四
甲	髌白關節	一一四
イ	臼唇	一一四
ロ	囊狀靱帯	一一四
ハ	腸骨大腿靱帯	一一五
ニ	耻骨大腿靱帯	一一五
ホ	坐骨大腿靱帯	一一六
ヘ	圓靱帯	一一六
乙	膝關節	一一六
イ	關節間軟骨	一一六
ロ	十字靱帯	一一七

第三	筋學	一一四
第一章	筋學總論	一一四
隨意筋	一一六
ハ	囊狀靱帯	一一八
ニ	膝蓋靱帯	一一八
ホ	膝膈斜靱帯	一一九
ヘ	膝膈弧形靱帯	一一九
ト	内側靱帯	一一九
チ	外側靱帯	一一九
丙	脛腓連接	一二〇
一	上脛腓關節	一二〇
二	下脛腓關節	一二〇
丁	足關節	一二二
一	足跗關節	一二二
二	距骨跟骨關節	一二三
三	距骨舟狀骨關節	一二三
四	跟骨骰子骨關節	一二四
五	舟狀骨楔狀骨關節	一二四
六	跗骨蹠骨關節	一二四
七	蹠趾關節	一二五
八	趾骨間關節	一二五

不隨意筋……………二七
筋の起始・停止及び形状……………二七
筋 膜……………二六
筋と神経との關係……………二六

第二章 筋學各論

第一 軀幹筋

甲 背 筋

イ 淺層諸筋……………二九
一 僧帽筋……………二九
二 濶背筋……………二九
三 菱形筋……………二九
四 後上鋸筋……………二九
五 後下鋸筋……………二九
六 夾板筋……………二九
□ 深層諸筋……………二九
長背筋……………二九
一 薦骨脊柱筋……………二九
二 棘 筋……………二九
三 横棘筋……………二九
短背筋……………二九
○ 屈伸椎に屬するもの……………二九

一 横突起間筋……………一三五
二 棘間筋……………一三五
三 肋骨舉筋……………一三五
○ 後頭骨及び廻旋椎に屬するもの……………一三五
一 後大直頭筋……………一三六
二 後小直頭筋……………一三六
三 下斜頭筋……………一三六
四 上斜頭筋……………一三七
五 側直頭筋……………一三七
腰背筋膜……………一三七

乙 腹 筋

イ 縱 筋

一 直腹筋……………一三八
二 三稜腹筋……………一三八
□ 横 筋……………一三八
一 外斜腹筋……………一三九
二 内斜腹筋……………一三九
三 横腹筋……………一四〇
プーバルト氏靱帶……………一四一
股輪……………一四一
鼠蹊管……………一四一

横隔膜……………一四二

丙 胸 筋

イ 淺 層……………一四二
一 大胸筋……………一四二
二 小胸筋……………一四二
三 鎖骨下筋……………一四二
四 前大鋸筋……………一四二
□ 深 層……………一四二
一 内及び外肋間筋……………一四五
二 前及び後横胸筋……………一四五
丁 頭 筋……………一四六
イ 淺層長筋……………一四六
一 濶頭筋……………一四六
二 胸鎖孔嘴筋……………一四七
三 二腹頸筋……………一四七
□ 淺層短筋(舌骨上筋)……………一四九
一 莖狀舌骨筋……………一四九
二 顎舌骨筋……………一四九
三 頤舌骨筋……………一五〇
ハ 淺層短筋(舌骨下筋)……………一五〇
一 胸骨舌骨筋……………一五〇

外 例

二 胸骨甲狀筋……………一五〇
三 甲狀舌骨筋……………一五一
四 肩胛舌骨筋……………一五一
二 深 層……………一五一
外 例……………一五一
一 前斜角筋……………一五一
二 中斜角筋……………一五一
三 後斜角筋……………一五一
四 肩隅舉筋……………一五一
内 例……………一五二
一 長頭筋……………一五三
二 前大直頭筋……………一五三
三 前小直頭筋……………一五三
戊 頭蓋筋……………一五四
イ 頭蓋頂筋……………一五四
一 前頭筋……………一五四
二 後頭筋……………一五四
三 耳前筋……………一五五
四 耳後筋……………一五五
五 耳上筋……………一五五
帽狀腱膜……………一五五

□ 顏面筋	一五五
眼輪筋	一五五
一 眼輪匠筋	一五五
口裂筋	一五六
第一層	
一 顴骨筋	一五五
二 笑筋	一五五
三 三角頤筋	一五七
四 方形上唇筋	一五七
第二層	
一 犬齒筋	一五八
二 方形頤筋	一五八
第三層	
一 頰筋	一五八
二 頤筋	一五八
口輪匠筋	一五九
鼻筋	一五九
一 鼻翼下掣筋	一五九
二 鼻壓縮筋	一五九
咀嚼筋	一六〇
一 顚顚筋	一六〇

二 咬筋	一六〇
三 外翼狀筋	一六〇
四 內翼狀筋	一六〇
顚顚筋膜	一六一
耳下腺咬筋膜	一六一
第二 四肢筋	
甲 上肢筋	
一 肩胛筋	一六一
一 三角筋	一六一
二 棘上筋	一六一
三 棘下筋	一六一
四 小圓筋	一六一
五 大圓筋	一六一
六 肩胛下筋	一六一
□ 上膊筋	一六四
前側	
一 二頭膊筋	一六四
二 烏喙膊筋	一六四
三 內膊筋	一六五
後側	
一 三頭膊筋	一六五

二 小肘筋 一六六

八 前膊筋 一六六

前側淺層

一 廻前圓筋 一六六

二 內橈骨筋 一六六

三 內尺骨筋 一六七

四 長掌筋 一六七

五 淺屈指筋 一六八

前側深層

一 深屈指筋 一六八

二 長屈指筋 一六八

三 廻前方筋 一六九

橈骨側

一 膊橈骨筋 一六九

二 長外橈骨筋 一七〇

三 短外橈骨筋 一七〇

後側淺層

一 總指伸筋 一七〇

二 固有小指伸筋 一七二

三 外尺骨筋 一七二

後側深層

一 廻後筋 一七二

二 長外轉拇筋 一七二

三 短伸拇筋 一七二

四 長伸拇筋 一七三

五 固有示指伸筋 一七三

二 手筋 一七四

拇指側

一 短外轉拇筋 一七五

二 短屈指筋 一七五

三 內轉拇筋 一七五

四 對小指拇筋 一七五

小指側

一 短掌筋 一七五

二 外轉小指筋 一七五

三 小指屈筋 一七五

四 對拇小指筋 一七五

中央部

一 蟲樣筋 一七六

二 骨間筋 一七六

乙 下肢筋 一七六

一 臑部筋 一七六

内臑部筋	一七〇
一 方形腰筋	一七〇
二 腸腰筋	一七〇
外臑部筋	一七一
一 大臀筋	一七一
二 中臀筋	一七一
三 小臀筋	一七一
四 梨子状筋	一七九
五 内鎖筋	一八〇
六 外鎖筋	一八〇
七 方形股筋	一八〇
□ 大腿筋	一八二
前側淺層	一八二
一 張股鞘筋	一八二
二 縫匠筋	一八二
前側深層	一八二
一 四頭股筋	一八二
後側	一八三
一 二頭股筋	一八三
二 半腱様筋	一八三
三 半膜様筋	一八三

内側	一八四
一 耻骨筋	一八四
二 長内轉股筋	一八四
三 薄股筋	一八五
四 短内轉股筋	一八五
五 大内轉股筋	一八六
八 下腿筋	一八六
前側	一八九
一 前脛骨筋	一八九
二 長伸躡筋	一八九
三 長總趾伸筋	一八九
腓骨側	一九〇
一 長腓骨筋	一九〇
二 短腓骨筋	一九〇
後側	一九一
一 腓腸筋	一九一
二 比目魚筋	一九一
三 長足躡筋	一九一
四 膝膈筋	一九二
五 長總趾屈筋	一九二
六 長屈躡筋	一九三

七 後脛骨筋	一九三
二 足筋	一九三
足背筋	一九四
一 短總趾伸筋	一九四
足躡筋	一九五
○ 躡趾側	一九五
一 外轉躡筋	一九五
二 短屈躡筋	一九五
三 内轉躡筋	一九五
○ 小趾側	一九五
一 外轉小趾筋	一九五
二 小趾屈筋	一九五
三 對躡小趾筋	一九五
○ 中部	一九五
一 短總趾屈筋	一九五
二 方形足躡筋	一九五
三 蟲様筋	一九五
四 骨間筋	一九五
筋に由つて構成せる回窩	一九六
一 顎下三角部	一九六
二 上頸三角部	一九六

三 下頸三角部	一九七
四 鎖骨上窩	一九七
五 胸骨上窩	一九七
六 大胸三角筋窩	一九七
七 腋窩	一九七
八 肘窩	一九八
九 腸耻窩(又鼠蹊下窩或は スカルバ氏三角)	一九八
十 膝膈窩	一九八
十一 卵圓窩	一九八
附	
一 全身筋肉着色の精圖	二葉
二 スバルテホルツ氏の精圖	二十二葉

第二編 生理學

目次

一三

緒論

生理學各論

第一章 血液生理

第一 血液

甲 血球

一 赤血球

二 白血球

三 血小板

乙 血漿

第二 血液凝固

第三 血液の量

第二章 血液循環生理

第一 心運動

第二 心尖搏動

第三 心音

第四 心臟の神經機能

心臟の制止神經

心臟の鼓舞神經

第五 血液運行の原因

第六 血液流通の速力

第七 血液一循環時間

第八 血壓

第九 脈搏

第十 血管の神經機能

第三章 淋巴生理

一 淋巴液

二 乳糜液

三 淋巴液の形成

四 淋巴の作用

五 淋巴腺

第四章 呼吸生理

附 脾臟の機能

第一 外呼吸

甲 肺臟呼吸

一 肺臟呼吸の化學的作用

一 瓦斯交換作用

二 瓦斯交換の多少	三六
三 血液瓦斯	三八
二 肺臟呼吸の機械的作用	三九
一 胸廓の一擴張一縮	四〇
二 呼吸氣交換の分量	四二
三 肺活量	四三
四 呼吸の法式	四四
五 呼吸の員數	四五
六 呼吸音	四六
乙 皮膚呼吸	四七
第二 内呼吸	四七
第三 肺の保護装置	四七
一 鼻腔	四七
二 咽頭	四八
三 喉頭	四八
四 氣管及氣管枝	四八
四 窒息	四九
第五 呼吸運動の變態	四九
咳嗽及び嘔咳	五〇
肝聲并ニ欠伸	五〇
第六 呼吸の神經機能	五一

目次

一三

甲 呼吸中樞	五一
一 直接興奮	五一
二 間接興奮	五二
乙 末梢神經	五四
第五章 消化生理	五四
第一 營養物	五四
甲 營養素	五四
一 無機性營養物質	五五
二 有機性營養物質	五五
三 副營養素	五六
乙 食品	五八
丙 嗜好品	五八
第二 消化液の分泌	五九
甲 唾液	五九
一 唾液腺の構造	五九
二 唾液の化學的成分	六〇
三 唾液の分泌神經主宰	六〇
四 分泌神經	六一
乙 胃液	六一
一 胃液の化學的成分	六一
二 胃腺の造構	六二

三 胃液分泌の神経主宰 六九

丙 脾液 七〇

一 脾液の化学的成份 七〇

二 脾液の分泌作用 七一

丁 胆汁 七二

一 胆汁の化学的成份 七二

二 胆汁の分泌 七三

三 胆汁の排泄 七四

戊 腸液 七五

一 小腸液の化学的成份 七五

第三 栄養物の消化 七六

甲 口腔の消化 七六

一 口腔の理學的消化 七六

二 口腔の化学的消化 七七

三 嚥下運動 七七

乙 胃の消化 七八

一 胃の理學的消化 七八

イ 胃の運動 七八

ロ 胃の運動の主宰神経 七九

ハ 胃の異常運動 七九

二 胃の化学的消化 八〇

イ 蛋白質に致す作用 八〇

ロ 蔗糖に致す作用 八二

ハ 乳汁に致す作用 八二

三 胃中は於ける食物滞留時間 八三

丙 小腸の消化 八三

一 理學的消化 八三

イ 小腸の運動 八三

ロ 小腸の神経主宰 八三

二 小腸の化学的消化 八四

イ 胆汁 八四

ロ 腸液 八五

ハ 腸液中 八六

三 腸中に於ける食物滞留時間 八六

丁 大腸の作用 八六

一 大腸の運動 八六

二 大腸の内容物排出時間 八七

三 大腸の神経主宰 八七

戊 消化の化学的作用の摘要 八七

一 口腔 八八

二 胃 八八

三 腸 八八

第六章 吸収及び同化生理

第四 腸中の醱酵及び腐敗分解 八九

第五 糞便の形成并に排泄 九〇

一 糞便の性状 九〇

二 脱糞機能 九二

第一 吸収及び同化 九三

吸収の原理 九三

第二 各消化器官に於ける吸収 九四

一 胃 九四

二 小腸 九四

三 大腸 九四

四 吸収後の輸送経路 九五

第三 各栄養素の吸収同化 九五

一 蛋白質 九六

二 脂肪 九六

三 含水炭素 九七

第四 消化管外よりの栄養物質輸入 九八

第五 新陳代謝の現象及び饑餓 九九

一 攝收不全 九九

二 攝收過剰 一〇二

三 動作の影響 一〇三

第七章 泌尿生理

四 體温放散の影響 一〇三

第一 腎臓の作用 一〇四

第二 尿の性状 一〇五

第三 腎臓の働作用即ち尿分泌營爲 一〇六

一 糸絛體の機能 一〇七

二 細尿管の機能 一〇七

三 尿の生成 一〇八

第四 腎臓の神経主宰 一〇八

一 副交感神経 一〇八

二 交感神経 一〇九

第五 尿の排泄 一〇九

第八章 皮膚生理 一一〇

第一 身體の擁護 一一一

第二 體温の調節 汗の生理的作用 一一二

第三 皮膚の吸収及呼吸 一一四

第四 皮膚の知覺 一一五

皮膚の分泌 一一五

一 皮脂 一一五

二 汗腺 一一六

三 マイボーム氏腺液 一一六

四	包皮垢脂	二六
第六	毛 髮	二六
第九章	内分泌生理	二七
一	甲狀腺	二九
二	上皮小體	三〇
三	胸 腺	三〇
四	腦下垂體	三二
五	松果腺	三二
六	副 腎	三三
七	睪 丸	三三
八	卵 巢	三四
九	胃 腸	三四
十	腸 膜	三五
十一	腸 膜	三五
十二	攝護腺	三五
十三	胎 盤	三五

第三編 鍼灸學

誘導論

一	第一章 鍼治學	六
一	第二章 鍼の材料	六
二	第三章 鍼の種類	七
三	第四章 鍼の區別及び名稱	九
四	第五章 鍼科の流派と鍼の構造	一〇
五	第六章 鍼の保存法	一五
一	第七章 刺鍼の方式	一七
一	一 押手及び施鍼部揉壓法	一八
二	二 捻鍼法	二〇
三	三 打鍼法	二二
四	四 管鍼法	二三
一	第八章 鍼治の目的	二六
一	一 制止法(又鎮靜法)	二六
二	二 興奮法	二九
三	三 誘導法	三一
一	第九章 鍼治の反射作用	三三
一	一 鍼術の手技	三六
一	一 單刺術	三七

二	二 旋捻術	三七
三	三 雀喙術	三七
四	四 置鍼術	三八
五	五 間歇術	三八
六	六 振顫術	三九
七	七 廻旋術	三九
一	第十章 補瀉迎隨の説	四〇
一	第十一章 刺鍼に於ける刺戟の強弱	四二
一	刺鍼刺戟の度	四二
二	通常の刺痛	四三
一	第十二章 刺戟の種類と刺鍼の刺戟	四四
一	一 器械的刺戟	四四
二	二 化學的刺戟	四四
三	三 電氣的刺戟	四七
四	四 温熱的刺戟	四七
一	一 刺鍼に由來する温熱的刺戟	四九
二	二 刺鍼に由來する電氣的刺戟	五〇
三	三 刺鍼に由來する器械的刺戟	五三
一	第十三章 刺鍼刺戟の筋の興奮性に及ぼす影響	五四

一 直達刺鍼法……………五
 二 介達刺鍼法……………五九
 第十四章 刺鍼刺戟の感覺即ち響と
 其遺感覺……………五七
 第十五章 鍼の細大長短……………六〇
 第十六章 施鍼時に於ける術者の注意……………六三
 補遺編
 鍼術手技諸法……………六六
 第一 素問十四鍼法……………六六
 第二 杉山流十八手術……………七〇
 第三 夢分流手技……………七七

第四編 消毒學

第一章 消毒方法……………一
 第一 理學的消毒法……………一
 甲 乾熱の應用……………二
 乙 濕熱の應用……………二
 第二 化學的消毒法……………四
 一 石炭酸水……………五
 二 クレゾール水……………六
 三 昇汞水……………七
 四 フォルマリン水……………八
 五 稀酒精……………九
 六 煨製石灰末及石灰乳……………一〇
 七 クロール石灰乳……………一〇
 附 瓦斯消毒法……………一〇
 第二章 鍼灸術に於ける消毒の必要……………一一
 第三章 鍼灸術に於ける消毒の方法……………一三
 一 鍼具の消毒……………一三
 二 手指の消毒……………一三
 三 施術部皮膚の消毒……………一四
 第四章 消毒の順序……………一四
 目次終

日本 鍼灸學教科書 前編 (增訂第十五版)

元内務省技師 醫學博士 上村行彰先生校閱
 從四位勳四等 關西鍼灸學院々長 山本新梧編



第一編 解剖學

解剖學は人體の構造を研究する學科にして、此目的に供する者は生體を構成する各器官にして、此各器官の構造を研究する爲めに其解剖を爲すものなり、即ち生體を構造する諸器官は其生體に於ける生存中の凡ての作用を起す根原にして、畢竟生體は此等の諸器官が合して一體と成れる者に外ならずして實に解剖學は此等の構造を知るの學なり、

今之を大別して動物解剖學及び植物解剖學とす。而して醫學並に鍼灸術に必要なるは動物解剖學中の人體解剖學にして、人體解剖學は更に亦た系統解剖學、局所解剖學、組織學、胎生學及び比較解剖學に區別す。

第一、系統解剖學(或は解剖各論)は生體を構成する各器官が相互に有せる構造の關係に就て、之を體部の類別即ち骨、靱帶、筋肉、内臓、感覺器、脈管、神經等の系統を逐ふて之を構究するものなり。

第二、局所解剖學とは系統解剖學中特に人體諸部に於ける諸種の臟器及び其局部を相并びて位置の關係等に就て研究し、之を實地上に應用せんことを學ぶものにして、此學は特に、諸般の外科的手術と親密なる關係を有するが故に、亦外科解剖學と名づくることあり。

第三、組織學(或は解剖總論)は生物體を作る各部分及び各臟器の微細なる組織及び成形原素を究明し、顯微鏡の力にて達し得る限りは、之を造る物體の性質を講究するの學なり。故に亦顯微鏡的解剖學とも云

局所解剖學別名
記載解剖學

胎生學別名發生學

ふ。

例令ば筋系統、心肺の臟器は之を系統解剖學に於て説き、筋組織、脂肪組織及び之等の組織を形成する細胞は之を組織學に於て論ずるが如し。

第四、胎生學各生物は初め其芽即ち唯一の卵子より漸次發育し、時期の移るに伴ふて絶へず變化し出來上りて種々の状態に達する迄の經路を研究する學にして、即ち胎生學は此發育の歴史なり。

第五、比較解剖學は人體及び種々の動物の構造を互に比較しつつ其異同を觀察し、以て各動物の間に於ける關係の親疎を研究するの學なり。

以上の諸學は各一科として講究すべきものにして、特に鍼灸病理解剖は最も必要なるべき學科なるべきも、今茲に講ぜんとするものは即ち人體の系統解剖學なり。而して之を學ぶに當りては豫め人體組織の

如何なるものなるやを知るの必要欠くべからざるが故に、系統解剖學に入るに先ちて其組織學の大要を説かんとす。

成形原素

凡て有機體の原基即ち原生動物は又原始動物、原生蟲、原始蟲等と稱せられ、動物分類上の一大部門をなし、最下級のものに屬すべき所謂細胞

と云へる小體より成立するものにして、恰も

個々の煉瓦石より一家の構造せらるゝが如

し、而して之を相互に連結せしむる「セメント」

の如き作用をなす物質あり、之を細胞間質と

云ふ。此細胞間質多量にして組織は主として之より形成せらるゝ時

は之を原質と云ふ。

其他尙ほ原纖維と云ふものありて、共に組織を構造す。細胞、細胞間質



及び原纖維を總稱して成形原素と云ふ、而して細胞は實に其祖にして他の二者は細胞より變生し來りたるものなり。

細胞

細胞は動植物體の基礎を爲すものにして、動植物體中に在り、素より顯微鏡下にあらざれば見得べからざる軟弱么微の最小の有形基素にして、原形質の塊より成り、其形圓く内容は原形質(プロトプラスマ)顆粒及び核を有し、成育すれば、更に周圍に膜を有す。又細胞は一個の最小なる單位性生物なるが故に、其内にも獨立して生活し得る装置となれるを以て、運動機能發育機能物質交換機能刺戟機能増殖機能等の諸機能を具有せるも、遂には老衰枯死すべし。

(イ)運動機能、細胞の運動は原形質(プロトプラスマ)突起に依りて起るものにして、即ち「アメーバ」様運動、或は「鞭毛運動」等の運動を營み、其「ア

第二圖 細胞ノ形状



メーバ様運動とは先づ第一に突起を出し、之に依りて下に在る者に固着し、次で體の其他の部分を其突起の方に引き寄するに在り、之に因て徐々に其形状及び位置を變化し、其状態恰かも「メーバ」

(最下等の小動物を云ふ)の運動するに似たるを以て、之を「メーバ」様運動と云へり。

又氈毛或は鞭毛運動とは細胞體の突起なる氈毛或は鞭毛に依りて爲さるる者にして、大體に於ては之を屈伸に比較するを得、即ち一方には強く其反對の方は弱く彎曲するが如し。

(口)發育機能、一旦分裂に依りて生じたる細胞は、著しく其大きさを増し球形を有し、只だ一定の方向にのみ爲すものもあり。或は種々の形状を生ずる者あり、其結果として圓形・多角形・柱狀・扁平・星狀・紡錘狀等

の形態を有せる細胞を生ずべし。

(ハ)物質交換細胞は體外より其體の榮養と爲るべき者を攝取して、其體を養ふと同時に體内に或る物質を造り之を體外に排泄するの作用を有す、而して細胞は一定の生活期限を有し、生體の生活せる間に死して他の新成細胞に依り補はるべきものなり。

(ニ)刺戟に應ずる機能、細胞は外來の力即ち機械的、化學的、熱電氣及び光線等の刺戟に反應する性あり。故に刺戟の強く且長きに由て細胞の生活現象に亢進及び麻痺を生じ、特に強きは遂に死に至らしむる者あり。

(ホ)増殖機能、細胞の増殖は以前は新生すべきもの、如く信ぜしが、ウイルヒョー氏の有名なる(凡ての細胞は細胞より生ず)と云しが如く、其後數多の觀察は自由細胞生成なる者はなし、細胞は必らず細胞より出來る者なることが明かになり、一般に細胞の分裂に依りて生じ、

其分裂に最も多く關係を有するは核にして核は一定の方法に依りて分裂し二個となり、次で原形質が二個に分裂し以て増殖するものとせり。

組 織

受精したる卵は先づ分割を繼續し細胞團となり其中空に液質を溜溜

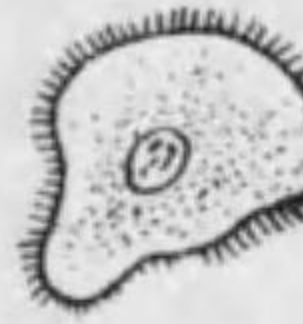
毳毛上皮



柱状上皮



扁平上皮



第三圖 上皮組織

して、囊胚に變じ、其囊胚は其一側より漸く翻展して外葉内葉となり更に其兩葉の間に兩側均しき小囊を生ず。之を中葉と名く、此三葉は實に諸組織發生の原起なり。而して各胚葉の細胞は發生の進歩に伴ひ、一定の變化を來すべし。此變化を細胞の分化と稱す。例令ば外葉より生ぜし其細胞は神經細胞に變じ、又五官上皮となり、中葉より爲せる細胞は横紋筋纖維と爲り、内葉の細胞は專

ら分泌細胞に變ずるが如く、同種の細胞固有の原素相集合して形成するものにして之を分ちて上皮組織筋組織神經組織及び結締質となす。
第一、上皮組織 は相密接して存在せる細胞即ち上皮細胞より成り、或は身體の外表を被ひ、或は體中に在りて外界と通ずる諸腔諸官(口腔、鼻腔、氣管等)の内面を被包し或は分泌及び吸收の作用を有し、或は又外界の一定の刺戟に應じて之を神經組織に傳ふる等の作用を有するものにして、其細胞の形狀に依りて扁平上皮、柱状上皮、毳毛上皮等に區別せり。
第二、筋組織 は筋纖維の集りて生ずるものにして、即ち筋組織は人體の肉の特有の赤色を有せる物體之れなり。其厚き層をなすときは著しく赤きも、薄き層にては透明膠様を爲す。而して此組織の特有なる點は其原形質が外來の刺戟に依りて著しく收縮することにして、其收縮の状態も他の諸細胞に異なりて只一定の方向にのみ行はれ、意思に隨つて收縮するものと思ひに隨はざるものとの二者あり。故に之を

隨意筋即ち横紋筋と不隨意筋即ち滑平筋との二種に區別す、筋學參照
凡て筋細胞は長く延長し其内に一個或は數個の核を有し細胞膜は之
を有する者と有せざるものとあり。形狀も異にせり。

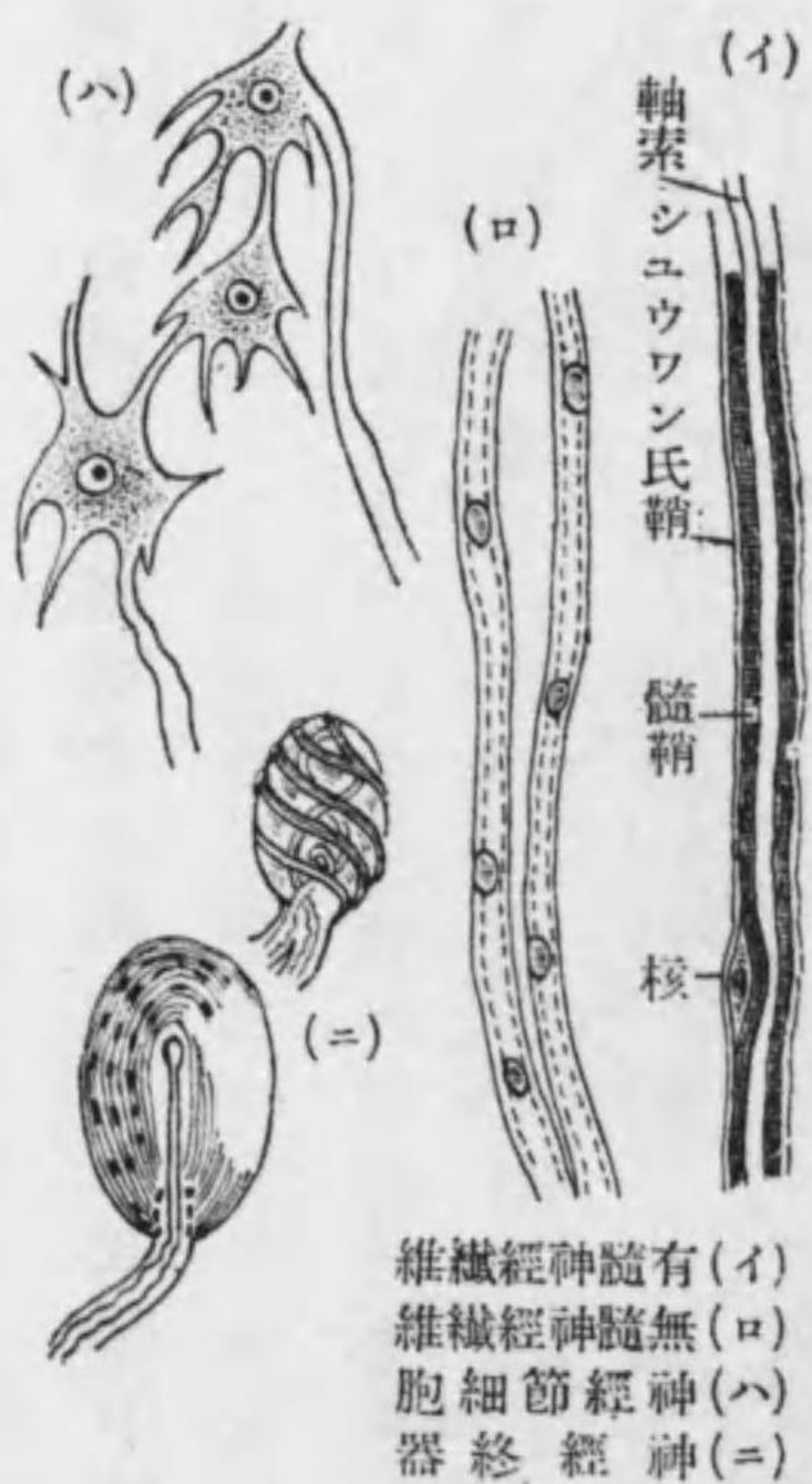
第三、神經組織の形態的原子は即ち神經細胞及び神經纖維より成り、
神經の中樞部及び末梢部を組織するものなり。

一、神經細胞は星狀、球形、梨子狀、紡錘狀、多角形の如き種々の形を有
し、其形は主として其突起の數に關す、又神經細胞の突起に二種あり、一
は軸索突起にして原形質の突起より早く發生して延長し神經中樞よ
り出て、末梢神經中に入り或は中樞を出てずして其中に分岐して終
るものあり。二は原形質突起にして後に發生し短かくして細胞を離
ると直に分岐して樹枝狀となる、故に之を樹狀突起とも稱せり、而し
て突起は刺戟の傳導器なり。

二、神經纖維は細胞の神經突起より延長したるものにして其中央に

神經細胞の直接の突起より成る部分を有す、之を軸索と云ひ被膜を以
て被はる。而して神經纖維には二種あり、即ち有髓神經纖維及び無髓

第四圖 神經纖維及細胞



神經纖維是れなり
(イ)有髓神經纖維
は中央に軸
り之を軸索と云
ひ、其周圍の最も
外層にあるをヘ
ンレイ氏鞘と云

ひ其下に菲薄透明なる膜あり之をシュワン氏鞘と云ひ其内層に脂
肪性の厚き膜あり之を髓鞘と云ふ

(ロ)無髓神經纖維は有髓神經纖維に反して全く髓鞘なく、即ち無髓
神經にして脊髓動物に於ては只交感神經の纖維にのみ見る處にし

て直ちにヘンレイ氏鞘及びシユワン氏鞘を以て被はるるものなり。
第四、結締質 とは結締組織・弾力組織・脂肪組織・色素組織・内皮組織・軟骨組織及び骨組織を云ふ。

一、結締組織 に三種あり、即ち膠様結締組織・纖維様結締組織及び網狀結締組織にして多少柔軟なる基質を有し、僅少の細胞其内に存在し、遍ねく體の諸部を充填する組織となり、體中殆んど存せざる處なし。

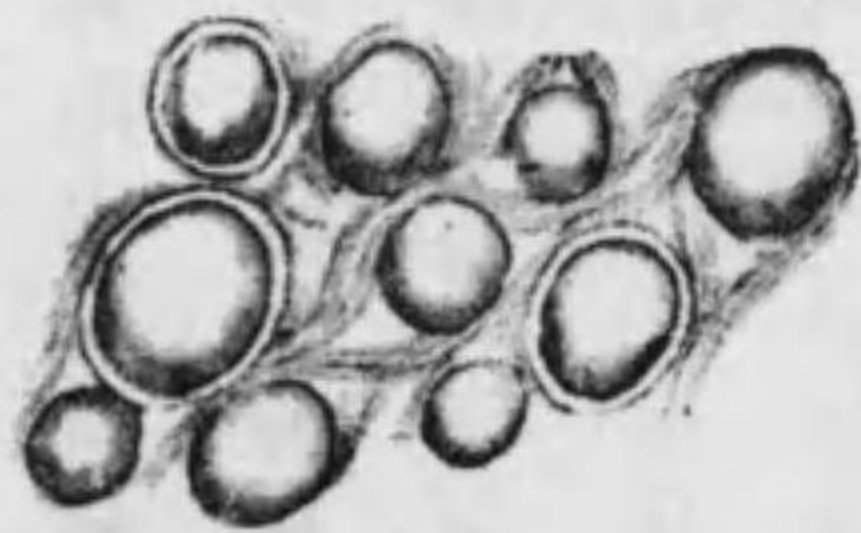
第五圖 結締質



結締組織



弾力組織



脂肪組織

二、弾力組織 は細胞なく唯だ纖維のみにして結締組織中に存在し、其大きは一様な

らず大小ありて常に個々に散在し數多集り束を生ずることなく、其特性は光線を反射する力及び非常に弾力に富み且種々の試薬に對し強き抵抗力を有するものにして、畢竟弾力纖維の數を著しく多量に有せる結締組織を弾力組織と云へり。

三、脂肪組織 は無膜圓形の細胞より成り即ち脂肪細胞と爲るべきものなり、恒に脂肪を作り之を貯へ動物の代謝機能に重要なる關係を有するものにして細胞内は脂肪を以て充滿せられ、次第に集合して、葡萄狀の塊をなし結締組織中には到る處として存在せざる處なきなり。

四、色素組織 は原形質内に色素を含有する細胞の結締組織及び上皮組織中にあるものにして、此の種の細胞は芒星狀若くは六角形を有し人間には僅に眞皮蜘蛛膜及び脈絡膜等の小部分に來るものなり。
五、内皮組織 は上皮組織と極めて相似たる状態を有するものにし

圖六第 色素組織及內皮組織



て、其細胞は主として相結合密接し、形狀は扁平且つ菲薄なり、而して、此の組織は上皮組織の如く體の表面に露出せるか、又は元と體の表面と

連続したりし腔の表面を被はず、即ち心臟・血管・淋巴管・關節腔等の内面を包裹せるものなり。

六、軟骨組織

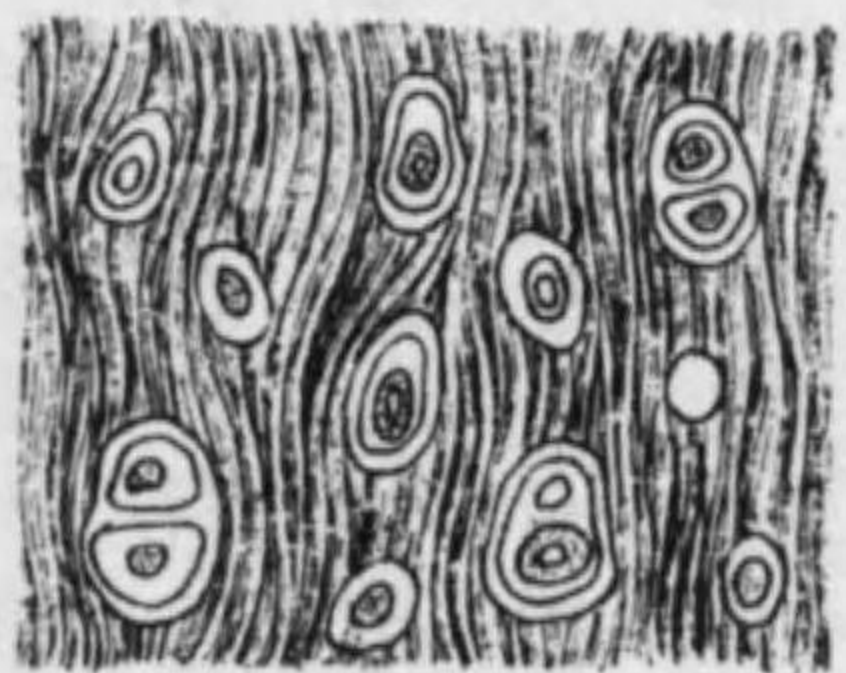
は軟骨細胞より成り球形或は卵圓形を呈し、多くは群

硝子様軟骨

圖七第 軟骨組織



纖維様軟骨



網狀軟骨



を成して存在し通常軟骨内を充實す。其性質は強固にして弾力性に

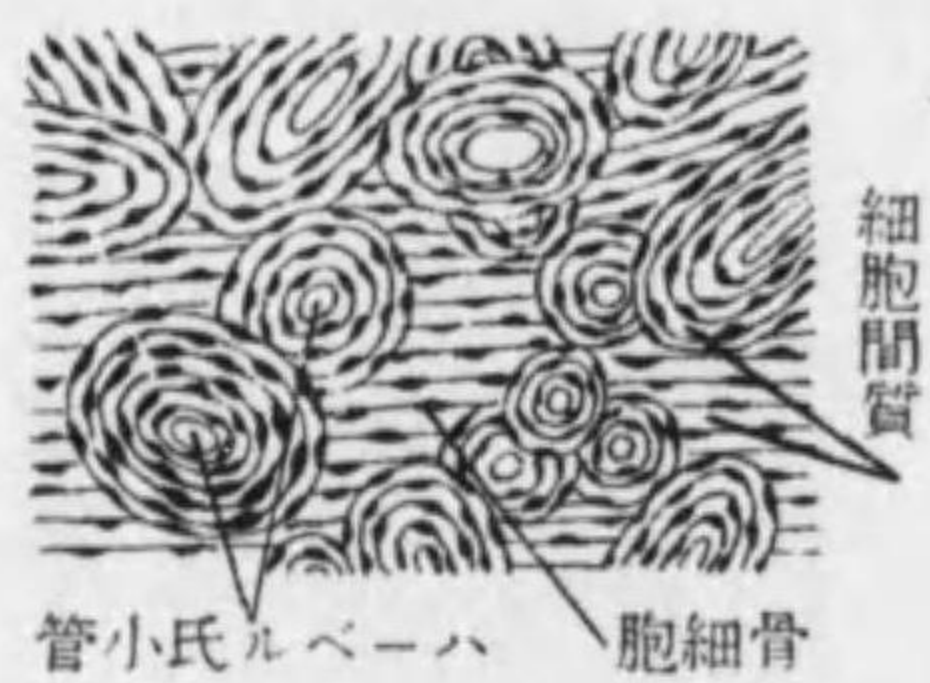
富み乳白色或は帶黃白色を有し、其表面は膜を以て被はる。之を軟骨膜と云ふ。軟骨膜は血管を有し軟骨の榮養を司れるも敢て骨質を發生することなし、又軟骨を分ちて硝子様軟骨・網狀軟骨及び纖維様軟骨の三種とす。

七、骨組織

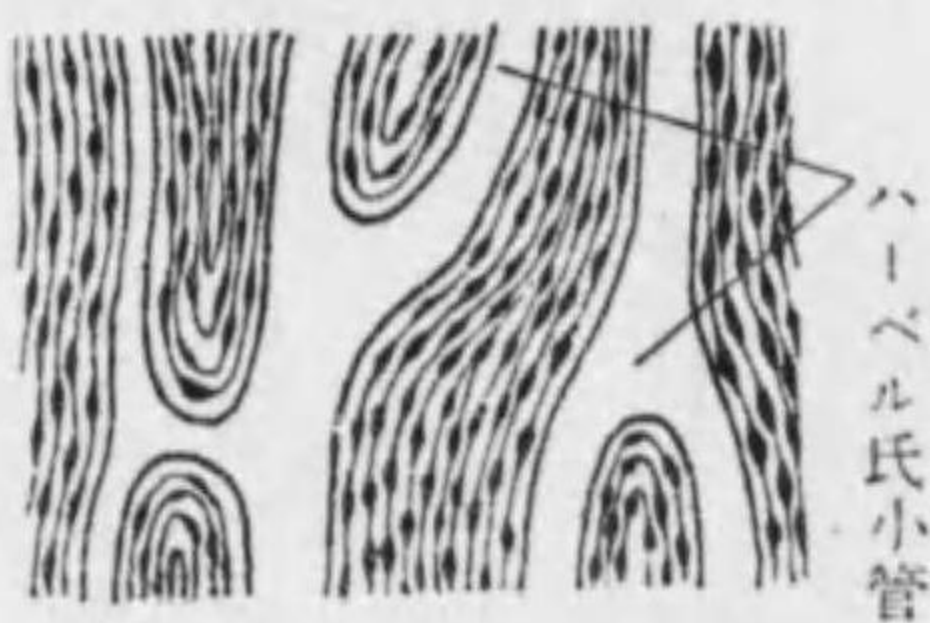
は骨細胞・ハール氏小管及び細胞間質より成り、其發育

は眞の成熟期に達する迄は軟骨線に於て長育し、又骨膜によりて厚育を行はるれども、再生に至りては外傷性の骨折後に於てのみ經驗

圖八第 骨組織 (面斷横)



圖九第 骨組織 (面斷縱)



髓腔に交通す。

ハール氏小管は硬固質を穿通する無數の小管に

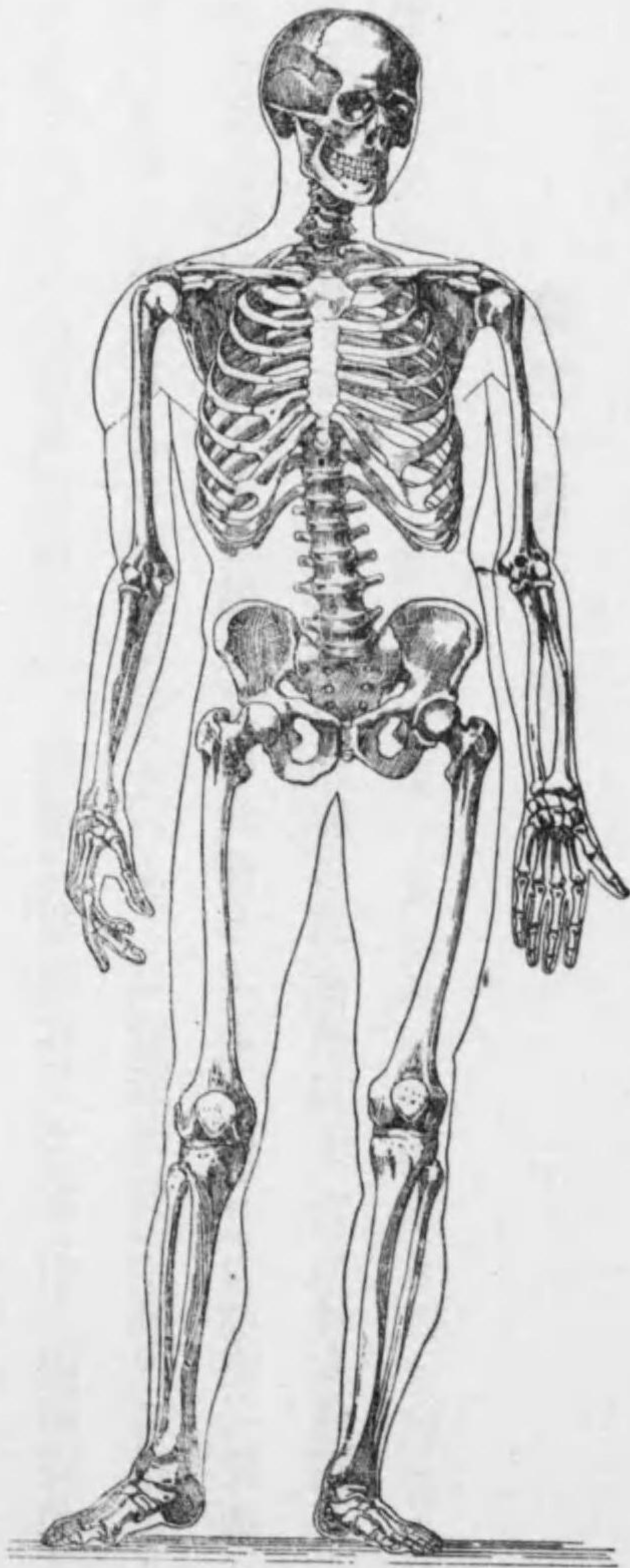
して血管を通じ骨の表面或は髓腔に開口し、經過間に在りては横管を以て互に交通す。又細胞間質は透明無組織の物質にしてハーペル氏小管或は骨の表面或は髓腔面等を各々鞘状に圍擁して數層を爲すものなり。

第一 骨 學

第一章 骨 學 總 論

骨は身體の基礎を構成するものにして、其性質極めて堅く且つ彈力を有し、不朽の性を具へ、黄白色を帶ぶ。外圍は緻密なる骨質の一層を有

第十圖 骨 骸



頭蓋骨に於ける
海綿様質は板障
とも稱せらる

し、之を皮質又は緻密質と云ふ。内部は粗糙にして恰かも海綿の如く大小無数の腔あり、之を海綿様質と云ふ。又管状の骨に在りては中心に大なる腔洞を存す、之を髓腔又は髓管と云ふ。而して其未だ乾晒せざるものに在りては表面に白色強靱の膜を被包すべし、之を骨膜と云ふ。

第一 骨 髓

骨髄は柔軟なる物質にして其色に依り赤色骨髄及び黄色骨髄の二種に區別し、大人に在りては赤色骨髄は長骨の骨端、肋骨及び頭蓋骨の海綿様質中に存し、黄色骨髄は長骨の髓腔内を充填し、皆な血管、神経に富む。

第二 骨 膜

骨髄は血球の産生所として極めて重要なものにして管状骨の中腔海綿様質の網内と大なるハ1 ヴェル氏管の内部とを充實、幼児には赤色骨髄を充せるものが小兒期に成ると脂肪が増生して中心に進むが故に黄色骨髄に變ず

骨膜は強靱なる結締組織維よりなり、外膜及内膜を區別す。外膜は血管に富み、腱や筋膜との連接をなす。内膜は血管に乏しく、弾力纖維と結締組織細胞に富む。

無機物としての主なるものは磷酸石灰及び炭酸石灰なり。

骨膜は關節面のみを除きて骨の表面を被包せる白色強靱の纖維膜にして血管、神経に富み、骨の栄養、再生及び再生に關し最も緊要なる關係を有するものにして、骨が損傷を受け、或は疾患に罹りし際、治癒するは皆な此骨膜の作用に因るなり。

第十圖 骨質



第三 骨の主成分

骨の主成分は有機及び無機の二成分より成り、有機成分即ち膠質は骨に弾力、腐敗及び燃燒の性を與へ、無機成分即ち石灰質は骨に硬固、不朽及び不溶解の性を與ふるものなり。而して老人の骨は硬固にして彈力に乏しく、挫折し易きは有機成分の減少に因り、小兒の骨は軟弱にして彈力に富み、容易に挫折せず、且つ骨折の癒着し易きは有機成分の多

きに因るが故なり。

第四 骨の發生及び長育

骨は始め軟骨及び結締組織より發生し、身體の發育と共に軟骨の一部消滅して骨質之に代り、漸次に硬固となる。此變化を名けて化骨作用と云ひ、其硬固を始むる處を化骨點と云ふ。而して短骨に於ては通常一個なるも、扁骨及び長骨に於ては數個の化骨點を有するものなり。然れども骨端の關節面は永久に化骨せざるものなり。

第五 軟骨

軟骨は帶黃白色にして、大に彈力に富み、鼻翼、耳殼、眼瞼、喉頭、氣管、肋骨端其他總ての關節間に存在し、常に骨端の衝突を防ぎ且つ關節の運動を補助するものなり。

長骨は別名管狀骨

其の他に混合骨とは扁平骨と短骨との集合より成れるが如きものを云ふ。例令肩胛骨の如し故に別名集合骨の稱あり。含氣骨とは其の内部に空氣を含有せる腔洞を有する骨を云ふ。例令上顎骨の如し。

第二十圖 骨ノ形状



第六 骨の形状

骨の形状は種々ありと雖も先づ之を長骨・短骨・扁骨の三種に大別す。

長骨とは其縦徑は横徑より長くして管狀を爲すものを云ふ。即ち四肢骨の如きは之に屬し、一體兩端を有す。

短骨とは圓形又は不等なる多くの面を有せるものを云ふ。脊椎・手根足根等に存する諸骨は皆な之に屬す。

扁骨とは板狀にして二面を有するものを云ふ。頭蓋諸骨の如き即ち之に屬す。

第七 骨數及び骨格等

骨の人體にあるものは其數通例二百餘個なり。其互に連接して一體となりたるもの之を骨格と云ひ、其相連りて動く處を關節と名け又頭蓋骨の如く其相合して動かざる處を縫合と云ひ、椎骨の如く軟骨によりて以て連接し、僅かに動くを軟骨接合と云ふ。

第二章 骨學各論

全身の骨格を軀幹骨及び四肢骨に大別す。

第一 軀幹骨

軀幹骨を更に分ちて脊椎骨・胸骨・肋骨・舌骨及び頭蓋骨とす。

骨格を軀幹骨頭蓋骨四肢骨の三種に別ち更に舌骨を頭蓋骨部に入れる者あり

三十二乃至三十五個の椎骨の相重なるものと云ふ説あり、之れは幼時尾閥骨が三乃至六個の椎骨より成る事に基く

甲、脊椎骨

脊椎骨は軀幹の後壁にして三十三個の椎骨相重疊して其基柱をなし、一定の運動をなすものにして、之を眞椎及び假椎に分つ。

イ 眞椎

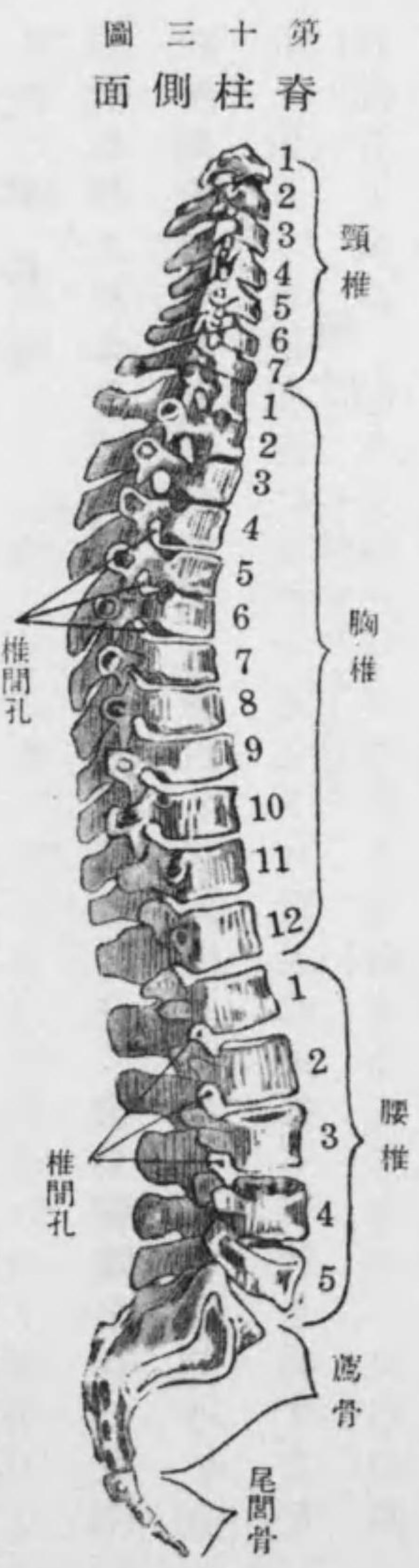
眞椎は各個に分離すべきものを云ひ、其數二十四個にして上位の七個を頸椎とし、次の十二個を背椎又は胸椎とし、下方の五個を腰椎と云ふ。亦運動に依り更に分ちて第一及び第二頸椎を廻旋椎と稱へ、第三頸椎以下第五腰椎に至るを屈伸椎と總稱す。

一、屈伸椎

椎骨は體と弓より成り、體は弓の前大部にありて稍や扁圓なり。弓は後半部を形づくり、體の後側に癒着し、其間に大なる一孔を呈す、之を椎孔と云ふ。各椎相互に重疊するときは此孔は連接して管を爲す、之を脊髓管と云ふ。即ち脊髓及び其被膜を包藏するものなり。又弓の體

椎孔の形狀は頸椎に於ては等邊三角形、胸椎にては圓形に近く、腰椎に至りては不正三角形を示す

歳はセツと發音するを正しとす
 上椎間截痕は下椎間截痕より淺し
 頸椎棘狀突起は短小にして尖端二分する事多し
 上位のものありては殆ど地平に近く下部に至るに従ひ漸次下方に傾き且つ延長す第七頸椎に至り最長となるも其の尖端二分する事なし著しく突出し容易に皮膚上より觸知



に癒着する部は弓根にして上下ともに截痕をなす、上を上椎間截痕と云ひ、下を下椎間截痕と稱し、椎骨の互に疊積するに由りて下椎間截痕は、下位にある椎骨の上椎間截痕と合して各椎間孔を形成す、是れ脊髄神經及び脊髄動靜脈の通ずる處なり。弓より出づる突起は其數七個ありて、中央の癒合部より後方に突出する一個を棘狀突起とし、弓根より左右に突出する二個を横突起とし、更に又弓根の上方及び下方に向つて上下各一對の突起を出す其上なるものを上關節突起と云ひ、下なるものも下關節突起と云ふ。此突起は上位の下關節突起と下位の上

し得らるる故に該突起を項結節と稱せられ該椎骨を突隆椎骨或は尖椎或は大椎と稱せられ椎骨計算の基準として經穴學上重要視せらる
 胸椎棘狀突起は尖長にして斜めに下方に向つて屋瓦狀に相重なれども上下位に存するものは頸椎或は腰椎の形狀に近けり
 腰椎棘狀突起は強大なれども短く左右に扁平にして水平に後方に向ふ
 頸椎横突起の尖端には前後に各々一結節あり之れを前及後結節と稱す

關節突起と相關節し、上記の椎間截痕に依りて椎間孔をなす。而して眞椎各部の特徴は上七個の頸椎にありては横突起に横突起孔と名くる一孔を有して血管の通路をなし、其尖端は分岐す。胸椎に在りては體の兩側に肋骨と關節する肋骨窩を具有し、尙ほ横突起の尖端に横突起窩を現はす。又腰椎に在りては横突起根の後側に副突起及び上關節突起の外側に乳嘴突起を有すべし。

但し肋骨窩は第二乃至第九胸椎に在りては上下に各半個づゝあり。又第一胸椎は中央の肋骨窩以外に下に半個の肋骨窩を有し、第十胸椎は上端に半個の肋骨窩のみを現はす。尙ほ横突起窩は第十一・第十二胸椎に於ては之を缺く。

二、廻旋椎

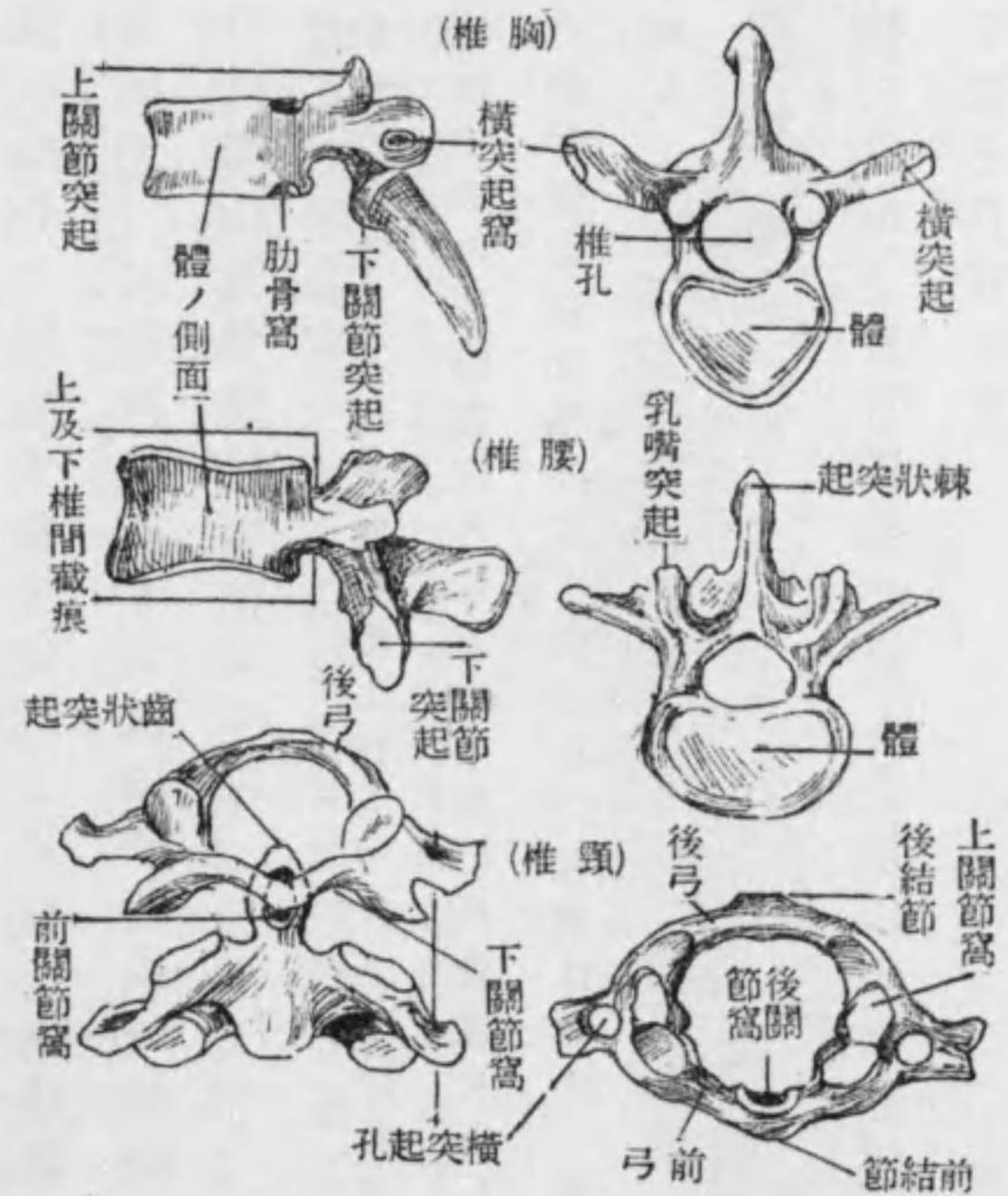
第一頸椎(又載域)は脊椎骨の最も上位にありて他の椎骨と異なり、輪狀にして體を具有せず。

但し第七頸椎の横突起に在りては前結節を缺如すれども此の部を通じて第六頸椎の横突起孔に椎骨動脈が進む

後關節窩は又齒高と稱す

上關節突起と體との間には上椎間截痕あり

第十四圖 廻旋及屈伸各椎部有固態



中央の後面に結節あり、之を後結節と云ひ、當に棘狀突起の痕跡を露はすものなり。側部は前後二弓の會合部にして横突起を出し、上下に關節面あり、之を上及び下關節窩と名く。而して上關節窩は凹くして後

輪の前半を形成する部を前弓と云ひ、後半を形成する部を後弓と云ふ。前弓の前面中央の結節を前結節と名け、同内面中央の凹關節面を後關節窩と名く。後弓は

云

頭骨の髁狀突起と關節し、下關節窩は平坦にして第二頸椎の上關節窩と關節す。

第二頸椎(又樞軸)は其第二片にして一體を有し、體より上方に向ひて圓き突起を出す、之を齒狀突起と名け、第一頸椎の後關節窩と關節し、第一頸椎をして頭蓋と共に右顧左聘の自由を得せしむ。是れ廻旋椎の名ある所以なり。

口 假 椎

假椎は幼時に在りては其數九個にして、上の五個を薦骨椎と名け、下の四個を尾閭骨椎と稱し、成長の後は互に相癒着して薦骨・尾閭骨の各一骨となり、各々骨盤の後壁をなす。

一、薦 骨

薦骨は脊柱の下部第五腰椎の下に位して骨盤の後壁にあり。形ちは三角にして恰かも鋏狀の如し。薦骨の上端を基底と云ひ、關節面を具

第五十圖 薦骨



へて 第五 腰椎 と 關節 其兩 側は

前薦骨孔は薦骨神經の出づる所なり後薦骨孔は該神經後枝の其

外方に擴がりて三角をなす、之を薦骨翼と云ふ。又關節面の後方に三角形の大孔を有す、是れ薦骨管の上孔なり。其兩側の上方に突出する突起は上關節突起と名け、第五腰椎の下關節突起と關節す。尖端は小なる關節面を具へて尾間骨に接す。前面は陷凹し其面滑かにして四對の孔を有す、之を前薦骨孔と云ひ、各薦骨管と交通す。又中部に四個の横線を現はし五骨の癒着したる痕

の中を通じて後方に出づるものなり

跡を證せり。

後面は穹隆にして其面不等なり。後面にも亦た四對の孔あり、後薦骨孔と稱す。其中央に縦徑に走る不等の線を假棘狀突起と云ひ、此兩側の不等の縦線を假關節突起と名く。此假關節突起の下端は角狀を爲して下方に向ひ、薦骨管裂孔を左右より境す、之を薦骨角と云ふ。又後薦骨孔の側部は肥大して相癒着す、之を假横突起と云ひ、凹凸不等なり。而して假棘狀突起下端の一裂孔を薦骨管裂孔と云ひ、靱帶を以て覆はる。側部は其面粗糙にして上部は厚く下部に至るに従ひ狹少となる。此面の上方は耳狀を呈せるを以て耳狀面と名け、腸骨の耳狀面と相關節す。

二、尾間骨

尾間骨は脊柱の最下端に在る上大下小なる一小骨にして、素と四個の

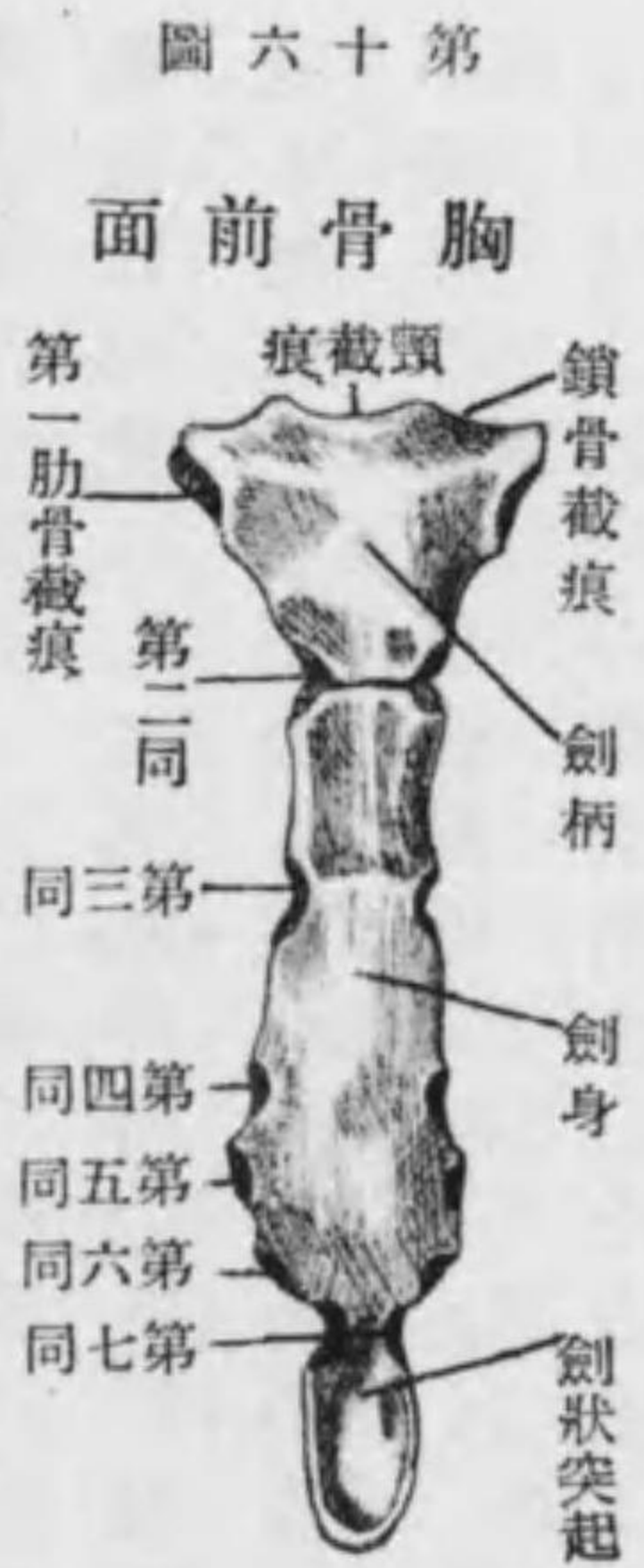
尾間骨一名尾椎骨或は尾骨

尾閭骨椎の癒着したるものなり。第一椎の上面は薦骨の尖端と接続し、上方に一對の突起を出す、之を尾閭骨角と名く。又第一椎の兩側は横突起の痕跡を呈す。

乙、胸骨

胸骨は胸廓前壁の中央に位し、上は第二胸椎、下は第十胸椎の高さにあり。形状は長方形にして上端は厚く且つ廣く、下端は狭少して恰かも羅馬古代の劍に似たり。之を區別して三とし、其上強部を劍柄(又手柄)中大部を體(又劍身)下小部を劍狀突起(又劍尖)と云ひ、此三部は皆な軟骨

體に於ける兩側肋骨截痕の間に四個の横線を視る。是即ち胸骨は數個の軟骨相結合して生ぜざるを示すものなり。



に由りて各々相癒着す。而して劍狀突起は鈍圓或は鋭尖に分れ、稀に孔を有するものあり。联接は七個の肋軟骨と鎖骨にして前後の二面と側縁を有す。

頸截痕は皮膚上より觸知し得

肋骨截痕の部位は第一は劍柄にて鎖骨截痕の下部第二は劍柄と體との間第三乃至第六は體の兩側縁第七は體と劍尖との間に相當する

上部は擴張して三個の截痕あり、中央のものを頸截痕と云ひ、其兩側の大なるものを鎖骨截痕と云ふ。是れ鎖骨の内端相關節する處なり。側縁は不等にして左右各々七個の截痕あり、之を肋骨截痕と名け第一肋軟骨より第七肋軟骨に至る各軟骨の前端と相接合す。

丙、肋骨

肋骨は胸骨と全胸椎とに連なり、胸の周側を圍みて胸廓壁を爲すものにして、其數左右各々十二個あり、上のものを第一肋骨と云ひ、以下順次に之を數ふ。各個の形状は細長扁平にして弓形に彎曲し、各片共に一體・兩端を有す。

上七對の肋骨は各肋軟骨を以て前端胸骨に連なれども、次位の三對は肋軟骨を以て共に第七肋軟骨に連繫す。而して其胸骨に達する七對を眞肋骨と云ひ、以下五對を假肋骨と稱すれども、最下の第十一對、第十二對は最も短かくして其前端は全然遊離す。故に假肋骨中特に此二

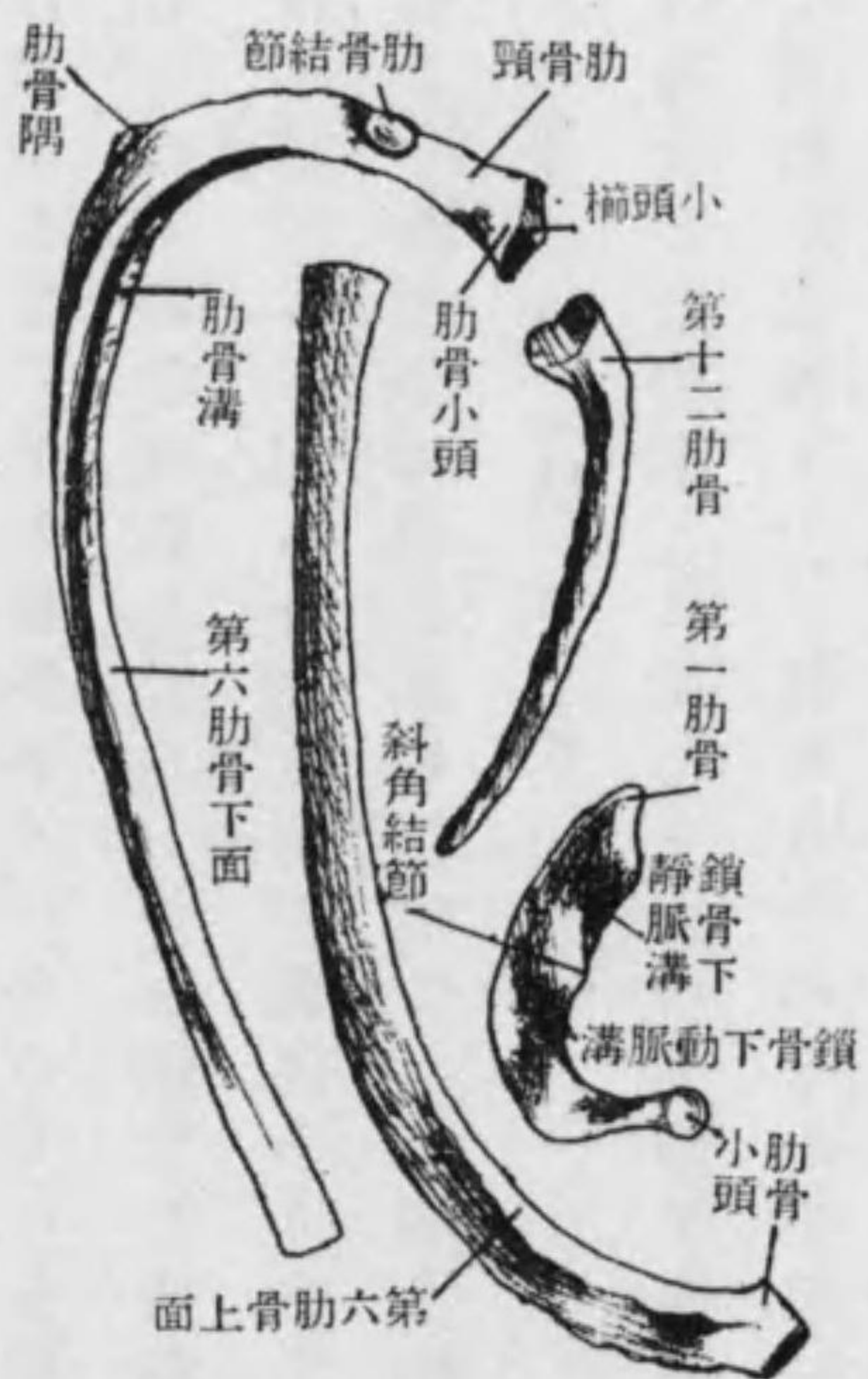
肋骨小頭と肋骨
結節との間に稍
々細く成れる部
あり之れを肋骨
頭と稱す

肋骨小頭は關節
面を有し第一第
十一第十二の三
肋骨を除くの外
は小頭櫛に依り
て該關節面は上
下二部に分たる

對を浮肋骨と云へり。

前端は體の續きにして少しく廣く且つ扁平なり、肋軟骨と結合す。後
端は小頭と云ひ少しく膨大す、此末端を以て各胸椎體兩側の肋骨窩と
關節す。呼吸の際に胸廓の運動するは此關節に於て動くものなり。
體は細長にして扁平なり。弓の如く彎曲し後端に近き處著しく屈曲
す、之を肋骨隅となす。小頭より僅か距たりて一の小結節あり、肋骨結
節と云ひ、胸椎の横
突起窩に關節す。
又體の内面には一
溝あり、之を肋骨溝
と云ひ、肋間動靜脈
及び肋間神経を通
ずるものなり。(但

第七十圖
肋骨



節と云ひ、胸椎の横
突起窩に關節す。
又體の内面には一
溝あり、之を肋骨溝
と云ひ、肋間動靜脈
及び肋間神経を通
ずるものなり。(但

し終末の二肋骨は肋骨結節及び肋骨溝を缺く)

獨り第一肋骨は鎌狀にして幅廣く體の上面中央に淺溝を呈す、鎖骨下
動脈溝と云ふ。是れ鎖骨下動脈の通ずる處にして、其前方上縁に近く
一結節あり、斜角結節と名づけ、前斜角筋の附着部にして其前側の淺溝
を鎖骨下靜脈溝と名づけ、鎖骨下靜脈を通ずる處なり。

肋軟骨

肋軟骨は肋骨と同じく長扁平にして彈力に富み、第一より第七に至る
までは漸次其長さを増加し、以下第十二肋骨まで再び短縮す。而して
胸骨と共に胸廓の前壁をなし、肋骨の前端と接續し以て肋骨と胸骨と
の結合の媒介をなす。

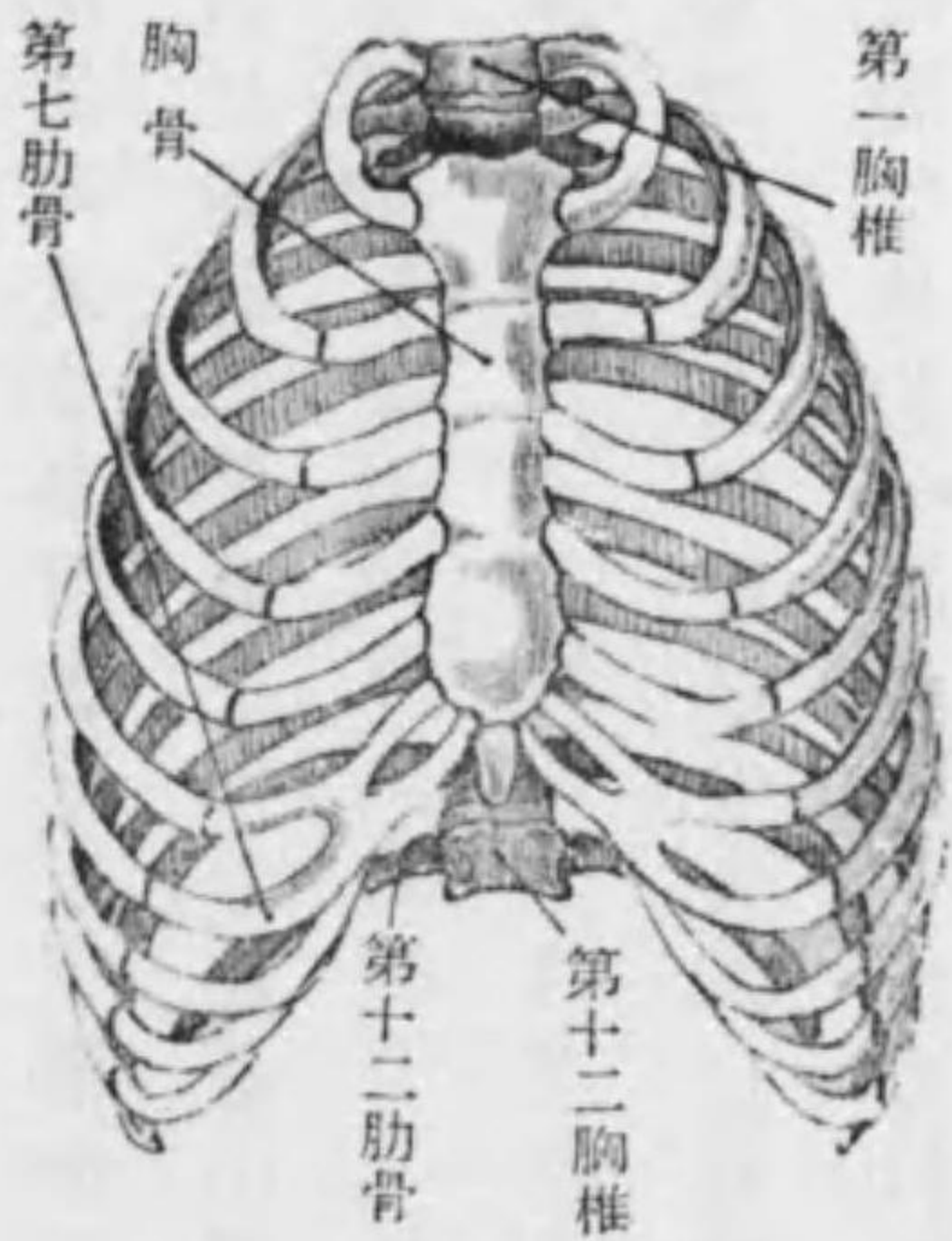
胸廓

胸廓は頸部の下際、軀幹の中央にして、形狀は略ぼ西洋の樽に類し、脊柱
の兩側に於ては肋骨隅の強く後方に彎曲せるが故に各一溝を造る、之

各肋骨間の間隙
を肋間腔と稱し

内外肋間筋及び肋間靭帯を存す第七、第八肋間腔が最も長くして廣し

圖八十第 側前廓胸



別す。

前壁は胸骨・肋軟骨及び肋骨前端より成り、其長さは後壁及び側壁よりも遙かに短かく、後壁は全胸椎及び肋骨後端より成り、側壁よりも少しく短かし。側壁は肋骨の體部より成り、強く側方に穹隆して最も長し。但し後壁とは肋骨隅を以て境界とす。上口は狭くして横卵圓形なり。第一胸椎左右の第一肋骨・同第一肋軟骨及び胸骨の上端より圍繞せられ、下口は廣くして其形狀は不齊なり。

を肺溝と稱し肺臟の一部を容る。而して其構造は胸骨全胸椎全肋骨及び肋軟骨の相結合關節したる骨腔にして而かも著明なる境界を存せずと雖も通常之を前壁・後壁・兩側壁に區

第十二胸椎左右の第十二肋骨左右の第七及び假肋骨に屬する肋軟骨并に胸骨の劍狀突起より圍繞せらる。而して此下口は横隔膜を以て是れを閉ざし腹腔と隔絶す。

但し胸廓下縁の肋軟骨部は弓狀を呈するを以て肋骨弓と名づけ、左右の肋骨弓は胸骨下端に於て互に會合し三角形を爲す、之を胸骨下角と云ふ。

丁、舌骨

圖九十第 舌骨前面



舌骨は前頸部喉頭の上方にして舌根にあり。馬蹄鐵形に彎曲したる小骨にして之を體・大角及び小角に分つ。體は中央の稍や大なる部に於て大角は體の兩端より後方に突出し、小角は圓錐形の小軟骨にして體と大角との間より出て顚顚骨に連なるものなり。

體、大角、小角の三部は幼時は軟骨に依る結合なれども大人に至りては化骨す。小角の後端が莖狀舌骨靭帯に依り顚顚骨に於ける莖狀突起と聯接す。



戊、頭蓋骨

頭蓋骨は軀幹の最も上部にあり。神経系の上端部即ち脳髓及び感覺器并に消化器の初部の在る處にして、數多の骨片の縫合に因りて脳髓を擁護する骨囊を構成する部分を腦頭蓋と云ひ、其前下方に於て感覺器及び消化器の初部を容るべき腔窩の存する部分を顔面頭蓋と云ふ。共に樞要のものなり。

イ 腦頭蓋

腦頭蓋を構成するものは八個の頭蓋骨にして、後頭骨一個、蝴蝶骨一個、篩骨一個、前頭骨一個、顛顛骨二個、顛頂骨二個にして之を頭蓋頂及び頭蓋底の二部に分ち、其骨多くは扁平にして内面は凹陷、外面は凸隆す。

一 後頭骨

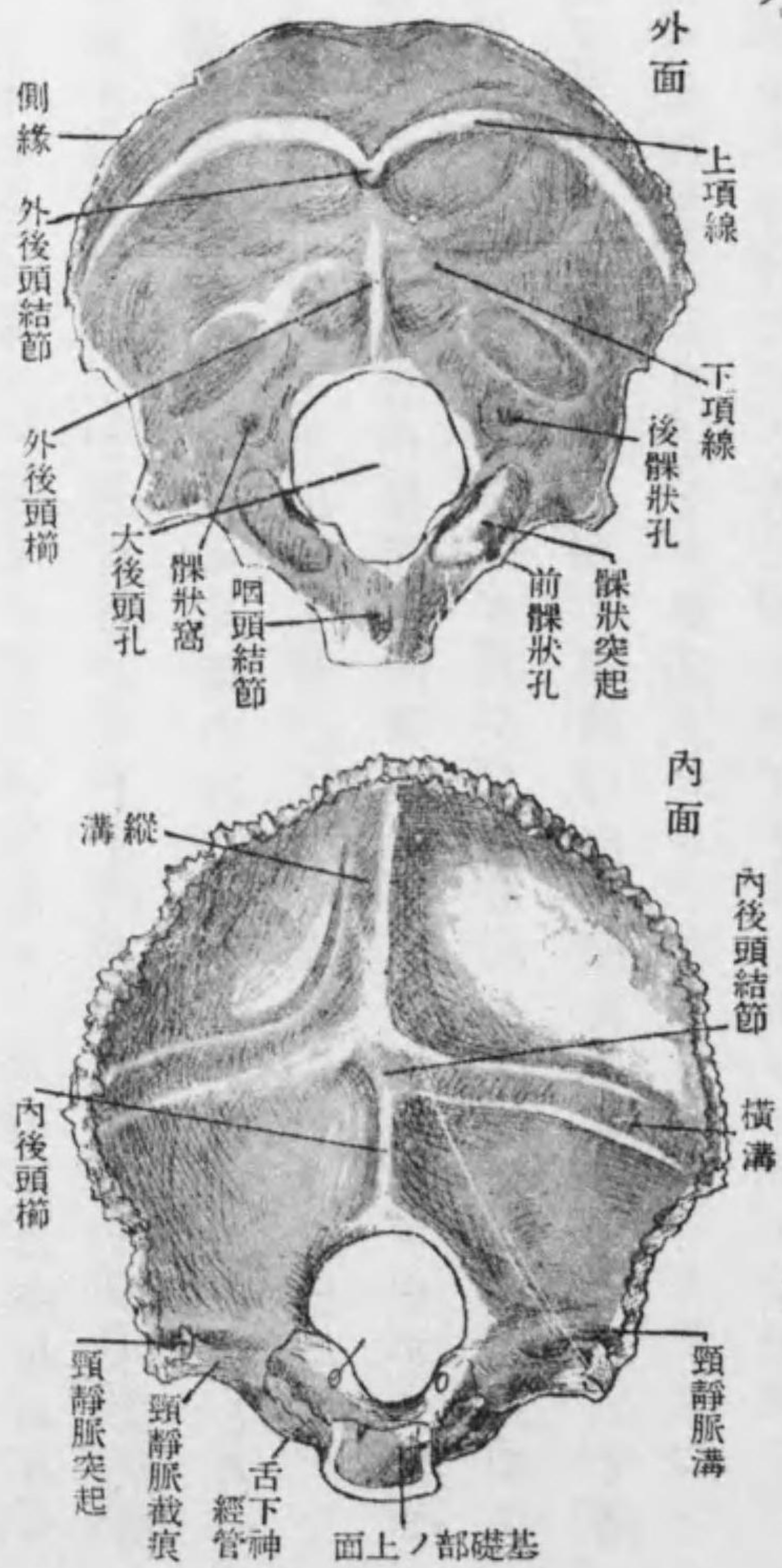
後頭骨は頭蓋の後下部を形成し、頭蓋と脊柱とを結合するものにして形ち稍や柏葉に似たり。其联接は顛顛骨、顛頂骨、蝴蝶骨及び第一頸椎

後頭骨は青年期に到る迄は其の

前方に在る蝴蝶骨と軟骨に依りて結合すれども漸次骨化するが故に骨質に依りて固く結合する事多し

なり。之を鱗狀部基礎部及び左右の關節部の三部に區別す。而して此骨の前下部に大なる一孔あり、大後頭孔と云ふ。此孔は頭蓋腔と脊髄管との交通孔にして、延髓、動脈、靜脈及び神経等を交通せしむ。鱗狀部は後部の大部を占め鱗狀にして、外凸隆、内凹陷の二面及び側縁を有す。

第十二圖 後頭骨



上項線の上部に之と並行して走る一線あり之を最上項線と稱す

後頭窩別名上後頭窩とも稱せられ大脳半球後頭葉を受容する所に於て大脳表に存在する廻轉溝に一致する隆起及陷凹と硬腦膜動脈に依りて生ぜる溝とを有す
軟骨を以て蝴蝶骨體に接合する

外面の上半部は滑澤にして下半部は不等なり。其中央に隆起あり、外後頭結節と稱す。而して此結節より下方に走れる縦線あり、外後頭櫛又は中項線と云ふ。又外後頭結節の左右に在る横線は上項線と名づけ、此下部に當り殆んど上項線と並行に走る線あり、下項線と云ふ。内面は滑澤にして中央の結節を内後頭結節と稱し夫より上下左右に向つて走れる隆線又は溝を見る、其左右に走れるは横溝にして、上部の縦溝は之を矢狀溝と稱し、下部の縦線は内後頭櫛と名づく。而して横溝の上を後頭窩と云ひ、下を小脳窩と云ふ。側縁は不等の弓形にして上大部は顛頂骨の後縁と接合し、其狀鋸齒の相吻合したるが如きを以て鋸齒狀縫合と云ふ。下小部は鈍縁にして顛顛骨の乳様部に接合す。基礎部は方形にして大後頭孔の前部なり。尖端は稍や方形にして軟骨を以て蝴蝶骨の體に接合し斜臺をなす。下面は不等にして其中央

は二十歳以下にして成人となれば骨性癒合をなす

咽頭結節は上咽頭收縮筋の附着部なり

に一結節あり咽頭結節と云ふ。

兩側の關節部は不齊形にして大後頭孔の左右にあり、上下の二面及び側縁を有し、上面は側縁に近く一の截痕を現はす、之を頸靜脈截痕と云ひ顛顛骨岩様部の頸靜脈窩と共に一孔を作る、之を頸靜脈孔と云ひ、舌咽神經迷走神經副神經及び内頸靜脈を通ず。而して頸靜脈截痕の外端には小突起ありて上方に向ふ、之を頸靜脈突起と云ふ。又下面は大後頭孔の前側部に突起あり、髁狀突起と云ひ第一頸椎と關節す。此突起の後方にある凹窩は髁狀窩と稱し、屢々小孔を見る、之を後髁狀孔と云ふ。又髁狀突起の前外方に一孔あり、前髁狀孔と名づく、是れ舌下神經管の前端なり。

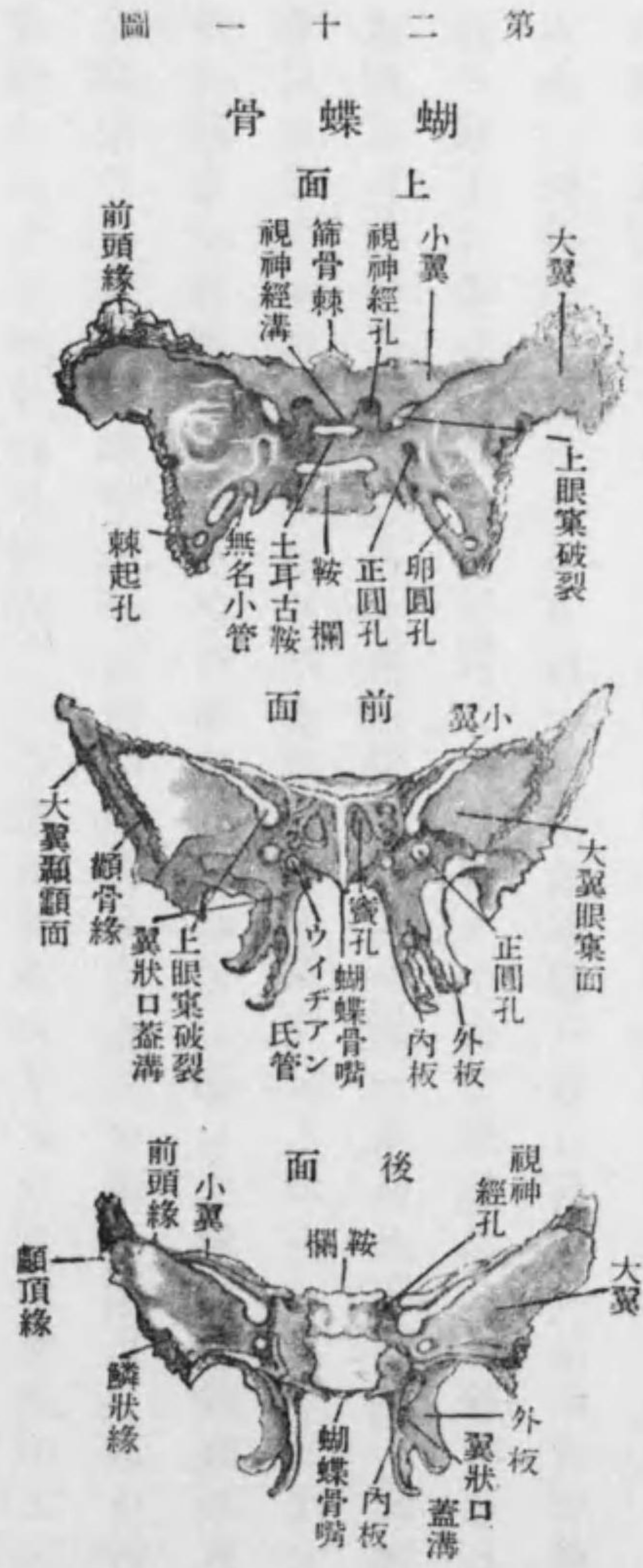
二 蝴蝶骨 或は楔狀骨

蝴蝶骨は頭蓋底の中央にありて其形狀蝴蝶の翅を張るに似たり。其联接は全頭蓋骨と顛骨・口蓋骨・上顎骨及び鋤骨の四顔面骨とにして、頭

蝴蝶骨體の前部は内部に一大合氣腔を有す之を蝴蝶竇と稱す

蓋の基底を作る。之を一體大小の二翼及び翼狀突起の四部に區別す。體は中央部にして骰子形なり、即ち上下前後及び左右の六面を有す。上面は中央凹陷し恰かも鞍狀に似たるを以て之を土耳其鞍と名づけ、

斜臺は前上方より斜めに後下方に向ひ延髄及ワロル氏橋を受容す



鞍の後方を境する横隆を鞍欄と名づく。其後面は後頭骨の基礎部と連なり斜臺を爲す。下面は狹小して櫛狀の突起を有す、之を蝴蝶骨嘴

體の上面即ち腦面は中央部に於て少しく陥凹す之を腦下垂體高と稱し腦下垂體を受容する所なり

と云ひ、鋤骨翼に箝入すべし。大翼は體の側面より外方に向つて左右へ突出す。上面即ち腦面は凹陷部にして三孔を有す、正圓孔、卵圓孔、棘起孔是れなり。甲は三叉神經第二枝を、乙は同第三枝を、丙は中硬腦膜動脈を通ず。又卵圓孔の内側に屢々無名小管と名づくる小孔を見ることあり。而して大翼の前上縁は小翼に相對して上眼窠破裂をなし、前下縁は上顎骨の眼窠面に相對して下眼窠破裂をなし、後縁は顛顛骨岩様部の前縁に相對して蝴蝶岩様破裂をなす。

小翼は體の前上部より二根を以て起り其根間に一孔を現はす、之を視神經孔と名づけ眼窠に通ず。上面は前頭蓋窩の一小部を營み、下面は大翼に向ひ専ら眼窩の天蓋をなす。前端は前に向て前頭骨眼窩部の後縁に附着し、後縁は遊離して前及び中頭蓋窩の界をなす。翼狀突起は體と大翼根との間より下垂して内外の二板より成り、前側に一縱溝

あり、翼狀口蓋溝と云ふ。此溝は上顎骨の體及び口蓋骨と合して翼狀口蓋管を造り、翼狀口蓋動靜脈及び口蓋神經を通ず。又、翼狀突起の起根には一小管あり、ウイヂアン氏管と云ひウイヂアン氏動靜脈并に淺大及び深大岩様部神經を通ず。

三 篩骨

篩骨は蝴蝶骨の前部に於て前頭蓋底并に左右兩眼窩の間に位し、前頭骨・蝴蝶骨・上顎骨・鼻骨・淚骨・鋤骨・口蓋骨及び下甲介骨と相联接す。形状は骰子形にして之を地平板・鉛直板及左右の側部に區別す。地平板又は篩板は長方形にして前頭骨の眼窩部と蝴蝶骨體との間に箱入して數多の小孔を有し、恰かも篩狀を爲す、故に之を篩孔と名づく、即ち嗅神經の通ずる處なり。又板の中央に櫛狀の突起あり、鷄冠と云ふ。其前方前頭骨に接する部に於て一小孔あり、盲孔と稱し鼻腔に通ず。鉛直板は地平板の下面より鼻腔に下垂して鼻中隔の前上部を爲し、之

地平板は薄き骨板にして左右の篩骨回廓を結合せしむ

篩孔は通常内外二列をなし外列には鼻腔側壁に分布する神經纖維を通じ内列は鼻中隔に至る神經纖維之を通ず
鷄冠は大脳鎌狀膜の前縁之に附着す

第二十二圖 篩骨



に由り鼻腔を左右の二腔に分ち、鼻骨・蝴蝶骨及び鋤骨と联接す。側部又は篩骨回廓は地平板の兩側に懸り内外の二壁より成り、其間に多數の小腔を有す、之を篩骨蜂窩と云ひ、其外壁は眼窩内壁の大部をなし、又内壁は鼻腔の外壁をなす。而して茲に上下二個の膨隆を呈す、其上を上甲介と云ひ、其下を中甲介と云ふ。

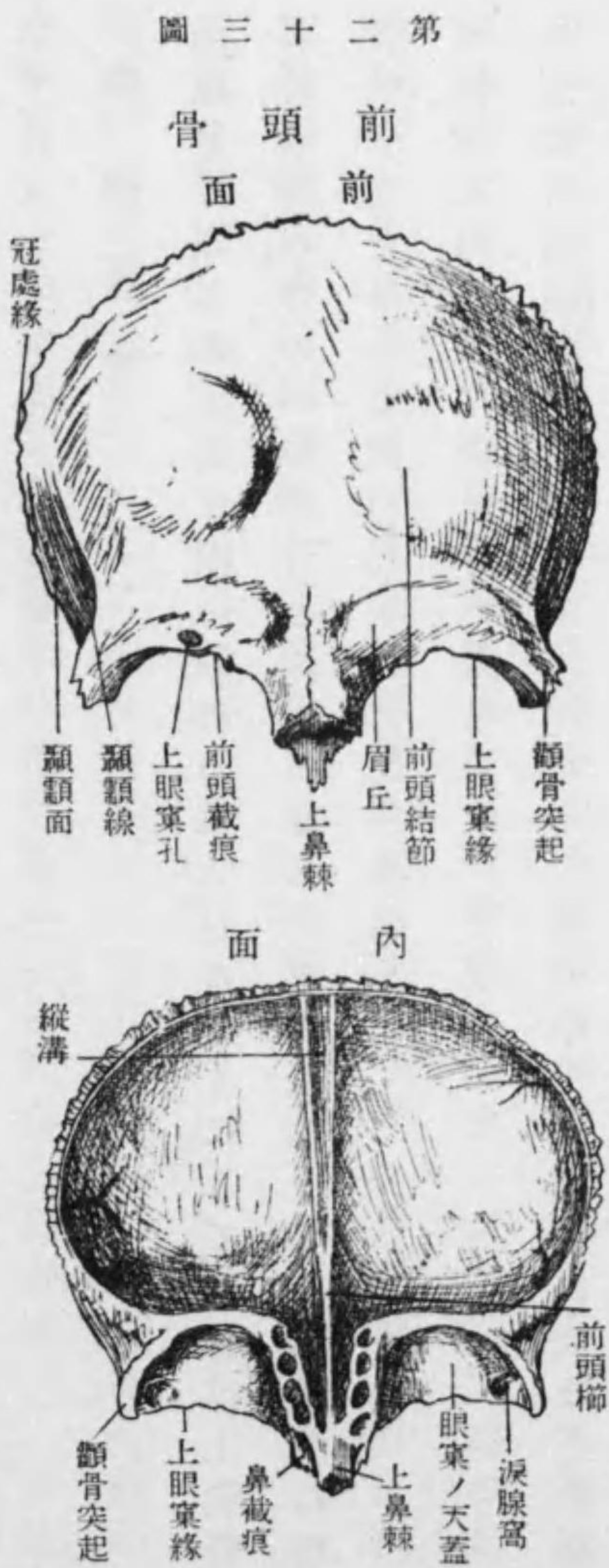
四、前頭骨

前頭骨は頭蓋の前面を圍み、其形ち帆立貝の如くにして前縁は上顎骨・鼻骨・淚骨・顱骨の四顔面骨と、後縁は顱頂骨・蝴蝶骨・篩骨の三頭蓋骨に联接す。之を分ちて前額部・眼窩部及び鼻部とす。前額部は内外の二面及び一縁を有す。外面即ち前面は凸隆にして滑澤なり。稍や中央の兩側に大なる結節

篩骨蜂窩は即ち含氣腔にして人によりて其の數異なるれども凡そ十個なり而して薄き骨板を以て相互に隔離し凡て鼻腔中に開孔す

篩骨回廓の前方には下部に於て下後方に走れる一突起あり之を鈎狀突起と云ふ

兩側眉弓の間には平坦なる部あり之を眉間と云ふ



あり、前頭結節と名け、其下際に半月形の鈍隆起あり、眉弓と名く。眉弓の下際に眼窩部と境界せらるゝ縁あり、之を上眼窩縁と云ふ。其部に二個の截痕或は孔あり、其外方にあるを上眼窩孔或は截痕と名け、内方の浅きものを前頭截痕と名く。前者は上眼窩動靜脈及び上眼窩神経を通じ、後者は鼻前頭動脈及び前頭神経を通ず。

内面即ち腦面は凹陷にして指狀壓痕及び腦隆起を現はし、又中央を矢

眼窩部下面の内側部にも亦小陷凹部あり之を滑車窩と稱し、上眼窩筋の屈曲する處なり

顳は音セウ今尙セツと發音セリ

狀徑に走る隆線を前頭櫛と云ふ。

縁は上部は弓形の鋸齒狀を呈して顳頂骨と冠處縫合を形造り、下部は蝴蝶骨の大翼と縫合す。上眼窩縁の外側にして顳骨と縫合する處を顳骨突起と云ふ。

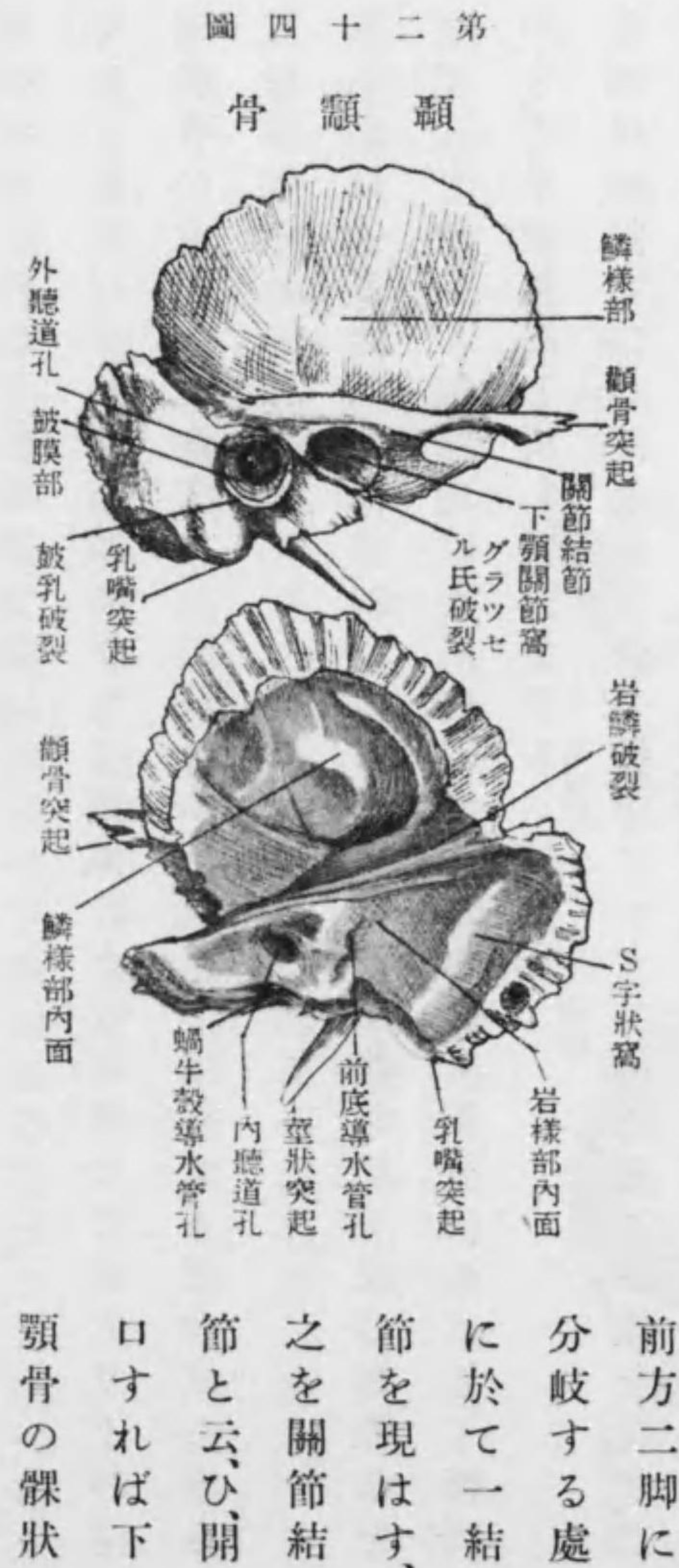
眼窩部は甚だ薄く、上面は腦面にして著明なる指狀壓痕及び腦隆起を呈す。下面即ち眼窩面は凹陷にして滑澤なり。顳骨突起に近く淺窩あり、之を淚腺窩と稱し、淚腺を容るゝ處なり。

鼻部は兩眼窩部の間及び鼻骨の後方にして其端鋸齒狀の縁をなす、之を鼻截痕と云ひ、其後部より一突起を出す之を上鼻棘と云ふ。

五、顳類骨

顳類骨は頭蓋の外下壁にして、形狀は不齊なり。其联接は蝴蝶骨、顳頂骨、後頭骨、顳骨及び下顎骨の五骨なり。之を分ちて鱗様部、岩様部及び乳様部の三部とす。

鱗様部は其形ち魚鱗の如く扁平にして外面は滑澤なり。前下部より前方に向つて長突起を出す、之を顚骨突起と稱し、其端は顚骨の顚顚突起と聯接して弓形を成す、之を顚骨弓と云ふ。其起根部は二脚に分れ其脚間に一窩を造る、之を下顎關節窩と稱し、下顎骨の髁狀突起と關節す。而して其一脚は外聽道孔の上際に、他の一脚は内下方に走り、窩の



突起は此上に乗る。

鱗様部の乳様部に連る處に一大截痕あり之を顚顚截痕と稱し顚顚骨の後下隅と縫合する部なり
乳嘴突起は胸鎖乳嘴筋の停止部なり
乳嘴截痕は二腹頸筋の附着部なり

内面は凹陷して指狀壓痕、腦隆起及び硬腦膜動脈を通ずる溝を現はす。乳様部は稍や圓錐形にして鱗様部の後下部にあり。外面は不等にして下方に乳狀の突起あり、之を乳嘴突起と名づく。其内側に深溝あり、乳嘴截痕と云ひ、其内方の淺溝を後頭動脈溝と云ふ。又乳嘴突起の實質は海綿狀にして大小不同の數腔に分る、之を乳嘴蜂窠と稱し、鼓室に交通すべし。

内面は凹くして深溝あり、S字狀窩と稱す。縁の上部は顚顚骨の後下隅と縫合を營み、下部は又後頭骨と縫合すべし。岩様部は本骨中最も複雑なる處にして聽器を藏し、其形ち三角錐體に似たり。分ちて基底、尖端、三面、三縁とす。基底は顚骨突起と乳嘴突起との間にして外聽道孔所謂外耳門のある

處なり、深く内聽道に通ず。而して外聽道の最下壁をなすを名けて鼓膜部と稱す。即ち後方は乳嘴突起、前下方は下顎關節窩と境し、茲に破裂を現はす、甲を鼓乳破裂と云ひ、乙をグラツセル氏破裂と云ふ。共に

グラツセル氏破裂

鼓室に交通すべし。

尖端は内方蝴蝶骨體と相對し一の孔を現はす、是れ内頸動脈管の内孔なり。

後面は鉛直にして中央に大孔あり、之れ

内耳門にして内聽道孔と名け、内聽道に

通じ聽神經、顔面神經及び血管を通ず。

其後外方に前庭導水管孔と稱する裂孔

あり内耳の前庭導水管の通路なり。

前面は其面、前上外方に傾き上縁に由つて後面と境し、前下部の鱗様部

内面に移る處に小破裂あり、岩鱗破裂と云ふ。又尖端に近く凹窩あり、

第二十五圖 顛顛骨ノ下面



三叉神經節壓痕と云ひ、三叉神經半月狀節の乗る處なり。

下面は不等にして中央に大なる一孔あり、内頸動脈管の外孔なり、内頸

動脈管の内孔と通ず。此後外方に細長の突起あり、莖狀突起と云ふ。

其後外側の一孔を莖乳孔と名け、顔面神經の出づる處なり。又内頸動

脈管外孔の後側に大なる深窩あり、頸靜脈窩と云ひ、後頭骨關節部の頸

靜脈截痕と合して頸靜脈孔を造る。而して頸靜脈窩の内前方に亦小

陥部あり、之を蝸牛殼導水管孔と云ふ。

六、顛頂骨

顛頂骨は前頭骨と後頭骨との間にありて頭蓋の上側壁を形成す。其

形ち扁平方形にして前頭骨後頭骨顛顛骨及び蝴蝶骨の四頭蓋骨と聯

接す。之を區別して内外の二面及び四縁四隅とす。

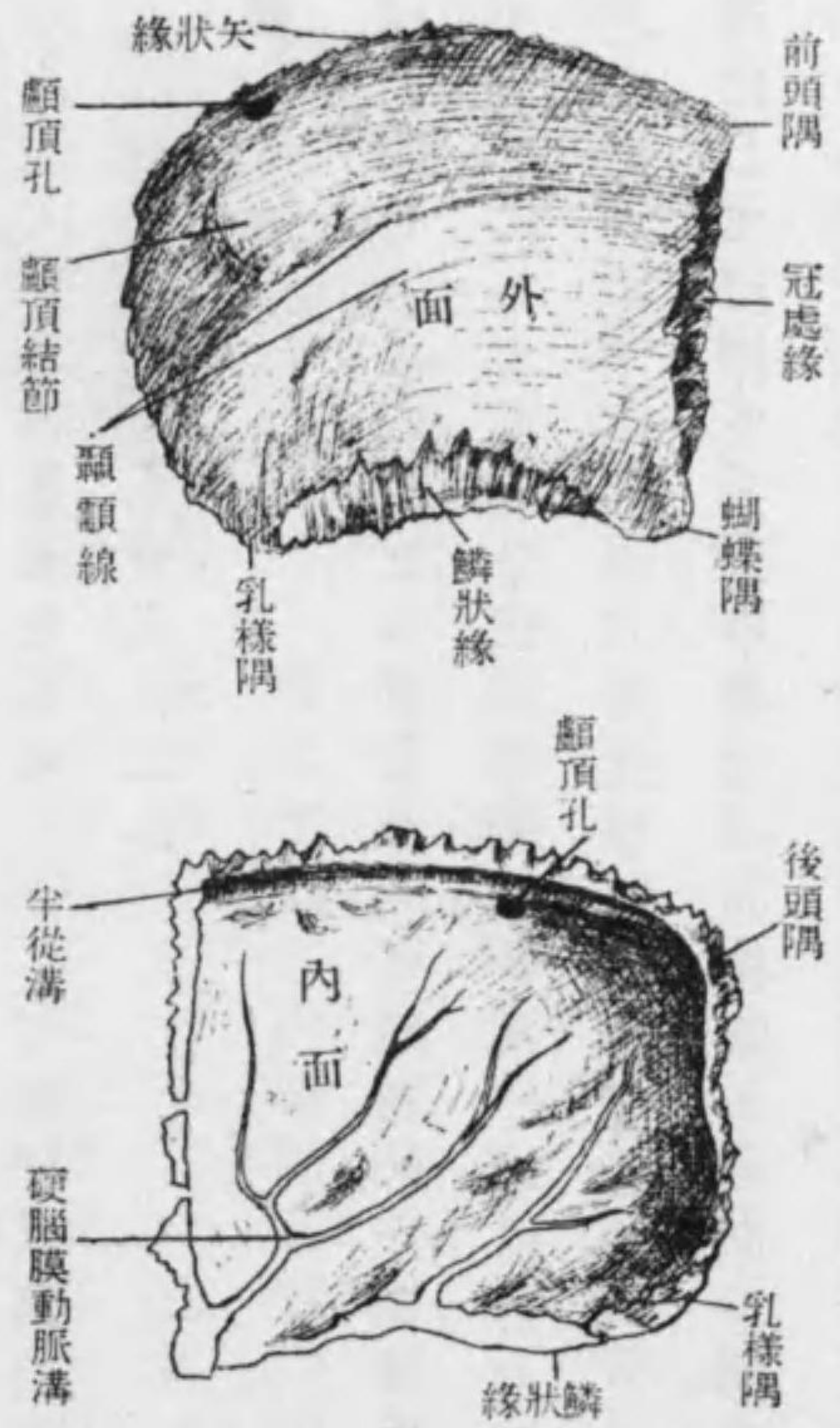
外面は凸にして滑澤なり。中央に一の豐隆あり、之を顛頂結節と云ふ。

此結節は若年には殊に著明にして即ち化骨點を徴するものなり。其

顛顛骨莖狀突起は長さ不定にして一乃至五割を算す

上頰線は頰筋膜附着部の上縁に當る
下頰線は頰筋膜附着部の上縁に當る

第 二 十 六 圖
右 頰 頂 骨



下部に弓状を爲せる幽微の二線あり、上及び下頰線と云ひ、又上縁に近く小孔あり、頰頂孔と

云ふ。
内面は凹にして亦滑澤なり。指狀壓痕、腦隆起及び硬腦膜動脈溝あり。又上縁に沿ふて浅き半縦溝ありて走る、此半縦溝は左右の頰頂骨相合して一の縦溝を構成す、之を矢狀溝と云ふ。此矢狀溝は長くして頰頂骨を外れ、尚ほ前後に延長して前は前頭骨、後は後頭骨に移行す。

上縁は左右相吻合して鋸齒狀縫合をなす、之を矢狀縫合と云ふ。下縁は薄くして廣く顳骨の鱗様部と鱗狀縫合を營む。前縁は前頭骨の上縁と鋸齒狀縫合をなす、之を冠處縫合と云ふ。後縁は後頭骨の顳頂縁と三角縫合をなす、之を後頭縫合と云ふ。而して隅は前頭隅即ち前上隅、蝴蝶隅即ち前下隅、後頭隅即ち後上隅、乳様隅即ち後下隅なり。

口 顔面頭蓋

顔面頭蓋は上顎骨二個、口蓋骨二個、淚骨二個、下甲介骨二個、鼻骨二個、顴骨二個、鋤骨一個、下顎骨一個の十四骨より成り、種々の腔竅を構成するものなり。

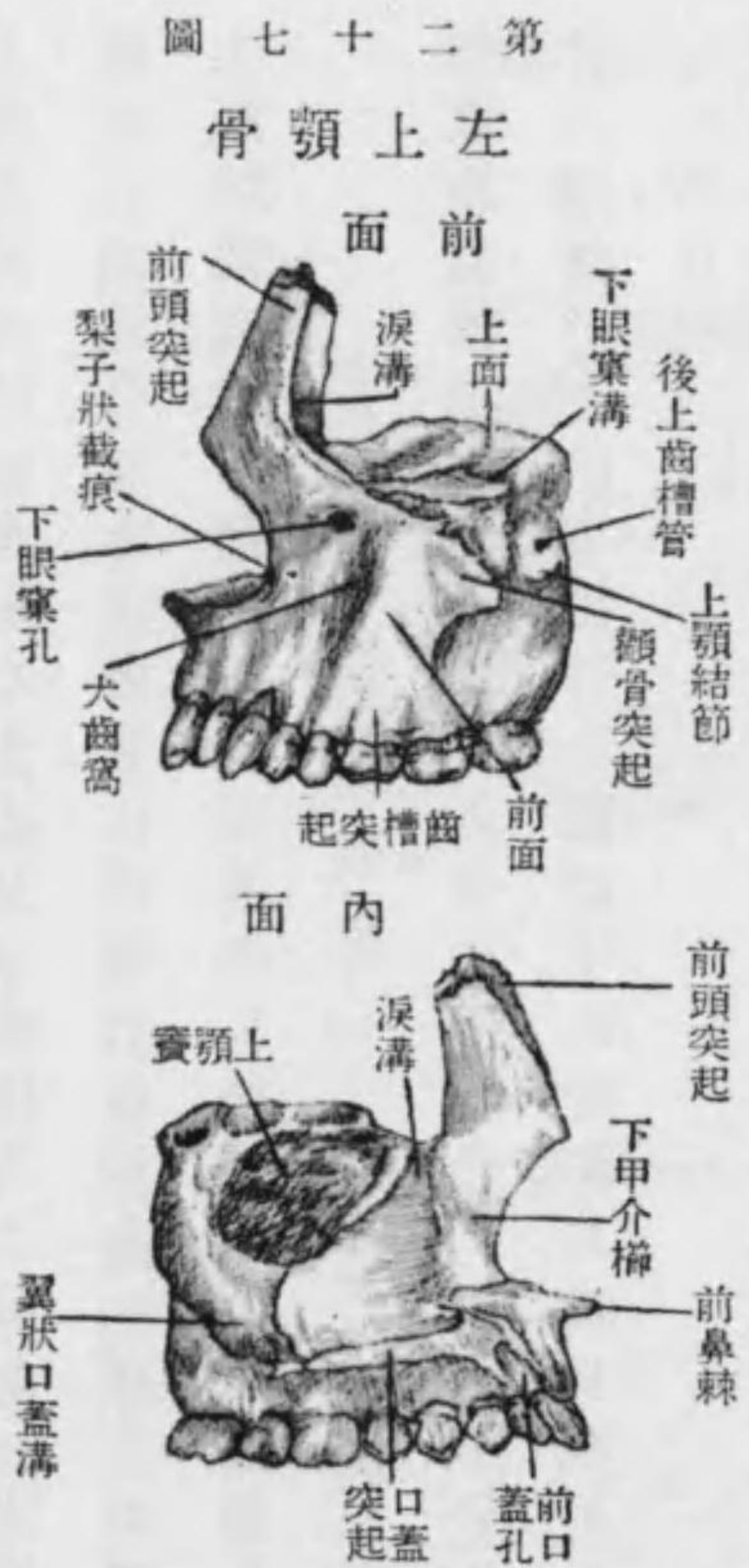
一、上顎骨

上顎骨は顔面の中央にありて左右相接合す。形状は不齊にして其聯接は蝴蝶骨、前頭骨及び篩骨の三頭蓋骨と鼻骨、顴骨、淚骨、鋤骨、口蓋骨及び下甲介骨の六顔面骨なり。之を一體及び前頭骨、齒槽、口蓋の四突

起に區別す。體は楔狀にして四壁を有する處の空洞骨なり。其壁薄く此空洞を上顎竇又はハイモル氏洞と云ふ。

前面は穹隆にして上縁を下眼窠縁と云ひ、此縁の下方に小孔あり、下眼窠孔と云ひ眼窠に通ず。此孔の直下に凹窩あり、犬齒窩と云ふ。又前面には其内縁に鋭利なる截痕あり、梨子狀截痕と名け前鼻孔の側縁をなすものなり。後面は少しく穹隆し中央に粗糙なる部あり、之を上顎結節と名く。茲

下眼窠孔部は下眼窠縁の下方凡そ〇、五—一程の處なり



圖七十二第 骨顎上左前

痕と名け前鼻孔の側縁をなすものなり。後面は少しく穹隆し中央に粗糙なる部あり、之を上顎結節と名く。茲

に二三の小孔あり、後上齒槽孔と云ふ。此孔は管となりて骨中に穿入し下りて齒槽に達し、後上齒槽神經及び血管を通ず。内面即ち鼻腔面は其後上部に一大孔あり、之を上顎竇孔と云ふ。此孔の前方に深溝あり、涙溝と云ひ、下甲介骨及び涙骨との联接により鼻涙管を構成す。又上顎竇の後下方に縦徑の淺溝あり、翼狀口蓋溝と云ひ蝴蝶骨の翼狀突起及び口蓋骨と合して翼狀口蓋管を造る。而して其下口を後口蓋孔と云ふ。

圖八十二第 面下骨顎上



口蓋突起ノ下面 上面即ち眼窠面は滑澤にして不齊三角形をなし、其中央に一溝あり、下眼窠溝と云ふ。此溝の前端は骨質中に穿入して下眼窠管を作り下眼窠孔に終る。管中更に一二の小管を生ず、之を前上齒槽管と稱し骨中を穿ちて齒槽に達し、前上齒槽神經及び血管を通ず。前頭突起は長扁

平にして體の上内隅より突出し、上端は前頭骨の鼻部に接す。
 顴骨突起は短にして體の上外方に突出し顴骨と联接す。
 齒槽突起は體の下部より下方に向て突出し、八個の齒根を受容す。口蓋突起は體の内面の下部より内方に向て水平に突出し、上面は鼻腔底となり、下面は硬口蓋の前大部を爲し口腔の上壁をなす。内縁は對側の同名縁と縫合し、前方齒槽に近く一孔を現はす、之を前口蓋孔と云ふ。而して其後縁は口蓋骨の地平部と接合す。

二、口蓋骨

口蓋骨は鼻腔の後側壁に位し、口腔の天蓋を爲す。其形狀はr字形にして联接は蝴蝶骨、篩骨の二頭蓋骨と上顎骨、下甲介骨及び鋤骨の三顔面骨にして、之を地平部及び鉛直部に分つ。然れども離解したる骨に非らざれば充分其形を檢し難し。
 地平部は方形板にして硬口蓋の後部を形成し、上面は鼻腔底の後部を

なし、下面は口蓋の後部を爲す。而して前縁は上顎骨口蓋突起の後縁と接合し、後縁は遊離して硬口蓋の後縁をなし、内縁は左右互に縫合す。又地平部と鉛直部との間より出づる錐體突起は三角形にして、後下方に向ひ蝴蝶骨翼狀突起の兩板間に嵌入す。其前側に一孔あり、後口蓋孔又は翼狀口蓋孔と稱す。



鉛直部は扁平長方形にして内面は鼻腔の後側壁をなし、此面に二個の並行に走る隆起あり、上ものを篩骨と云ひ、下ものを下甲介骨と云ふ。外面は後方に一縱溝あり翼狀口蓋溝と稱し、蝴蝶骨翼狀突起及び上顎骨體

と合して翼狀口蓋管を構成す。又前縁は薄くして上顎骨鼻腔面の後部に联接し後縁は翼狀突起の前縁に接合す。上縁は分れて前後の二突起となる、即ち前方を眼窩突起と云ひ、後方を蝴蝶突起と云ふ。而し

て二突起の間は截痕を呈す、之を口蓋截痕と云ふ。

三、涙骨

涙骨は眼窠内壁の前部に位し甚だ菲薄なり。形状は扁平方形にして頗る爪甲に類す。

外面は眼窠に面して眼窠内壁前部の一部をなし茲に深溝を現はす、之を淚溝と名づく。内面は粗糙にして篩骨蜂巢の前部を掩ふ。

前縁は上顎骨前頭突起の後縁と聯り、後縁は篩骨篩板の前縁と聯接す。上縁は前頭骨眼窠部内縁の前部と聯り、下縁は

即ち下端にして下甲介骨に聯接す。

四、下甲介骨



第三十圖

下甲介骨は鼻腔の外側壁より鼻腔内に懸垂し形状は貝殻に似たる小骨なり。

内面は凸隆して鼻中隔に相對し、外面は凹陷にして鼻腔の側壁に向ふ。中央部は上顎骨淚骨及び篩骨の三突起に由りて上顎骨淚骨及び篩骨に聯接す。

五、鼻骨

鼻骨は顔面上中央部にして左右上顎骨前頭突起の間に位し形状は略ほ扁平方形なり。然れども上部は狭厚にして、下部は廣薄なり。其聯接は前頭骨上顎骨及び篩骨にして、内縁は對側の同名骨と相合す。

六、顴骨

顴骨は上顎骨の上外側に位し、形状は稍や菱形に近し。而して前頭骨蝴蝶骨、顴骨及び上顎骨に聯接し、三面三突起を有す。

眼窠面は陥凹にして滑澤なり、半月形をなして眼窠の外壁及び底の一

部を爲し、前縁即ち下眼窠縁を以て顔面と境す。此面に一個の小孔あり(時として二個なることあり)。顴骨眼窠孔と云ひ、顴骨管となりて骨中に入り、二枝に分れて一は顴骨顴管に開き、他の一は顴骨顔面管に開く。而して前者は眼窠神経の顴枝を通じ、後者は眼窠神経の顔面枝を通ず。



顴管は深く陥凹して顴窩に向ひ、此面の小孔を顴骨顴管と云ふ。顔面は豊隆にして頬の高部をなす。此面の小孔を顴骨顔面管と云ふ。前頭骨突起は上隅より突出し、粗縷縁を以て前頭骨の顴骨突起及び蝶骨の大翼に接合す。顴骨突起は後隅より突出し、顴骨突起と聯りて共に顴骨弓を構成す。

上顎突起は内方に向ひ三角形の鋸齒状面を以て上顎骨の顴骨突起に接合すべし。

七、鋤骨

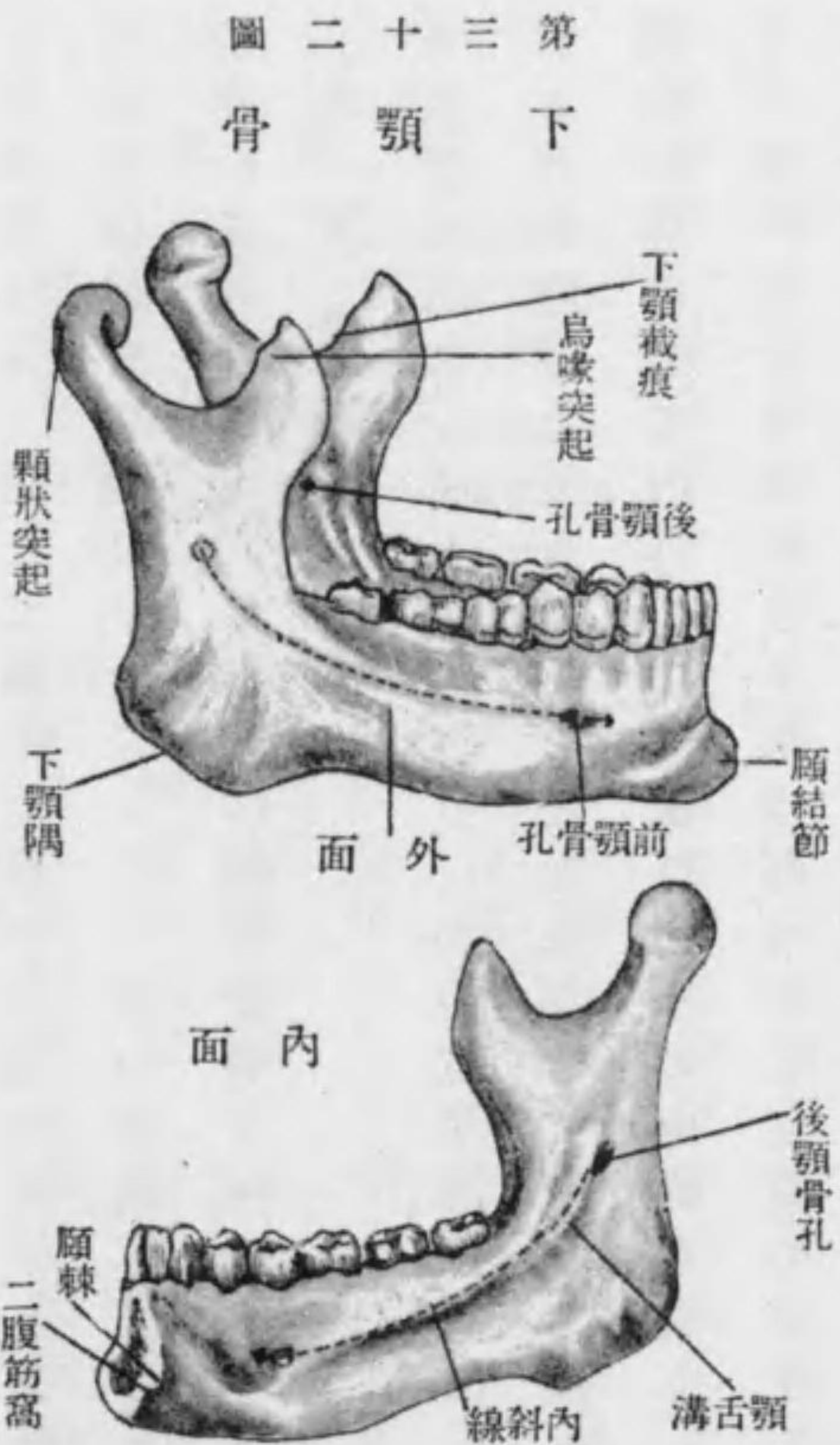
鋤骨は鉛直に鼻腔の中央にありて其中隔をなす。形状は稍や菱形にして菲薄なり。而して蝴蝶骨篩骨口蓋骨及び上顎骨の四骨と接合す。又其左右側面は稍や平滑にして不齊の溝状を呈し、上縁は左右の二部に分れて鋤骨翼を成し、其間に蝴蝶骨嘴を挟む。

八、下顎骨

下顎骨は顔面の最下部にあり。形ちは馬蹄鐵状にして其联接は顴骨と可動關節を營むのみ。之を區別して一體二枝とす。體は弓形にして内外の二面及び上下の兩縁を具ふ。而して上縁には十六個の齒牙を保有し、下縁は圓滑にして直ちに皮下にあり。外面は豊隆にして中央に結節あり、頤結節と云ふ。其外側の第二小臼齒の下部に一孔あり、前顎骨孔又は頤孔と名づく。是れ齒槽管に通ず。

下顎骨は左右二個の骨相癒合して一骨と成れるものなり

るものなり。孔の下部より後外方に走る線あり、外斜線と云ふ。内面は陥凹にして中央に一の棘状の突起あり、之を頤棘と名づく。其



兩側に指壓したるが如き浅窩あり、之を二腹筋窩と稱し、二腹筋の停止部なり。此部より後上方に走る鋭線あり、内斜線と云ふ。

又此下際に浅溝あり、顎舌溝と云ふ。

下顎枝は其形ち方形板にして體の後上部にあり、二面三縁を具ふ。内面は中央に斜孔あり、後顎骨孔又は下顎孔と云ふ。是れ齒槽管を經

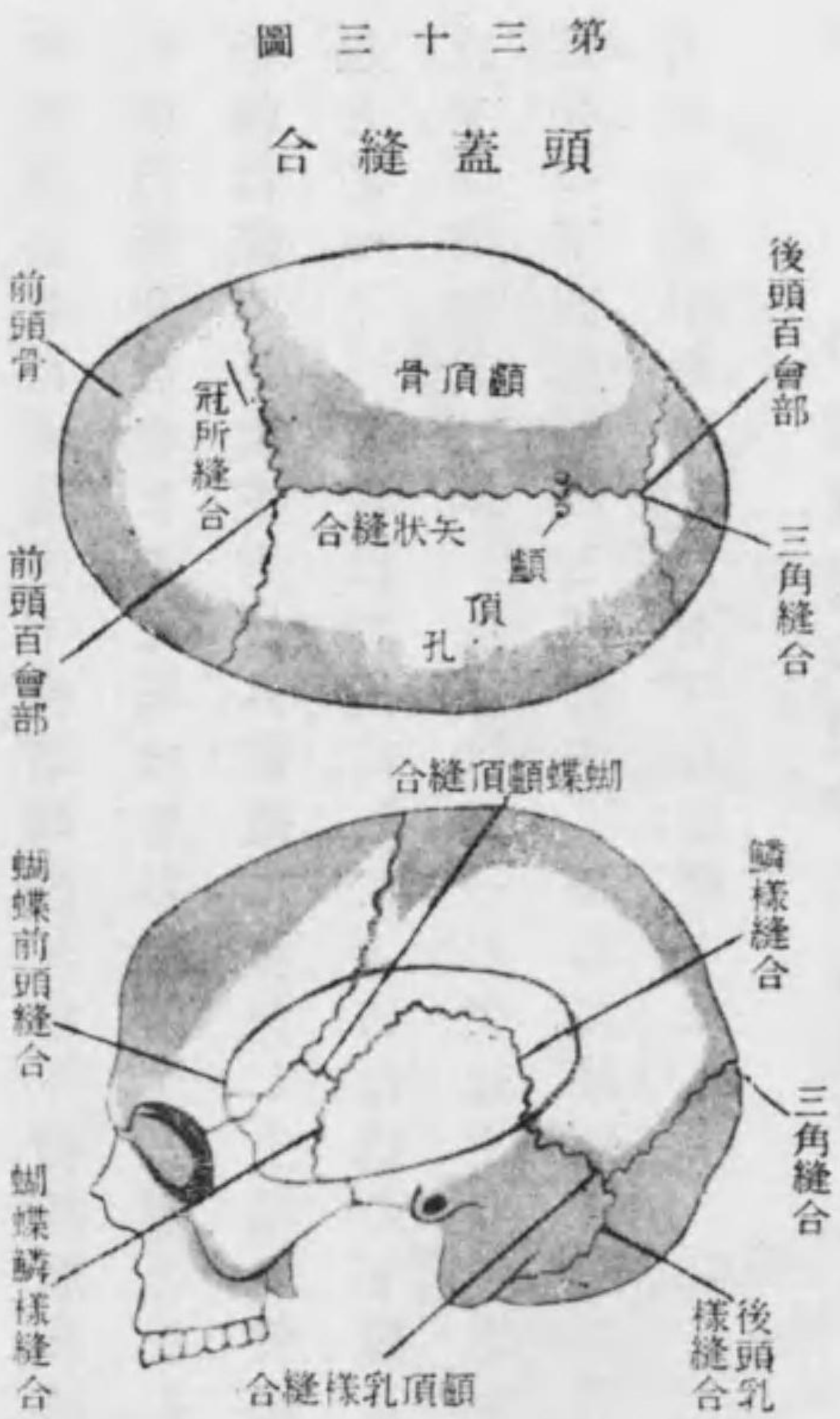
て前顎骨孔に交通し、下齒槽神經及び下齒槽動靜脈を通ずるものなり。外面は稍や粗糙にして咀嚼筋の附着する處となる。前縁は短くして下方は外斜線に移行し、上端は突起をなす、之を鳥喙突起と名づく。後縁は圓滑にして下方は體の下縁と會して鈍角をなす、之を下顎隅と云ふ。上端は又一の突起をなす、之を髁状突起と稱し、顛骨の下顎關節窩と關節す。而して此兩突起の間には一の大なる半月状の截痕を呈す、之を下顎截痕と云ふ。

◇ 腦頭蓋の縫合 及び 百會

此條下に於ては頭蓋諸骨の相互の關係を明かにし、且つ許多の骨縁が各其一部を以て構成せる處の緊要なる部位を講ぜんとす。素より重複する處あるべきが故に前後對照すべし。

縫合

凡ての頭蓋骨は下顎骨を除くの外は皆な鋸齒狀、又は鱗狀の縁により相互に結合するものにして、之を縫合と云ふ。
 前頭骨上縁と兩顛頂骨前縁との接合を冠處縫合と云ふ。
 兩顛頂骨上縁相互の接合を矢狀縫合と云ふ。
 後頭骨と兩顛頂骨後縁との接合を三角縫合又は△狀縫合と云ふ。



顛頂骨外縁と顛骨鱗樣部との接合を鱗狀縫合と云ふ。
 後頭骨と顛骨乳樣部との接合を後頭乳樣縫合と云ふ。

第三十三圖 頭蓋縫合

顛頂骨と顛骨乳樣部との接合を顛頂乳樣縫合と云ふ。
 其他蝴蝶骨大翼と顛頂骨との接合を蝴蝶顛頂縫合と云ひ、大翼と顛骨鱗樣部との接合を蝴蝶鱗樣縫合と云ひ、大翼と前頭骨との接合を蝴蝶前頭縫合と云ふ。

百會 或は 顛門

初生兒に在りては骨の發育未だ完備せざるを以て顛頂骨の四隅と他骨との接合すべき處に空隙を存し、單に柔軟なる結締組織のみに由りて被はれ、内部にある大脳動脈枝の脈波を視、或は觸るゝことを得べし。之を名づけて百會又は顛門と稱す。其漸次發育するに従ひ次第に狭少し遂に閉鎖するに至る。
 後頭骨と兩顛頂骨との間に存する小なるものを、後頭百會又は小顛門と云ふ。

前頭骨と兩顛頂骨との間に存する大なるものを、前頭百會又は大顛門

前頭百會は生後一年餘りにして閉鎖す

と云ふ。
顱頂骨の前下隅に存するものを蝴蝶百會と云ふ。
顱頂骨の後下隅に存するものを乳様百會と云ふ。

◇ 頭蓋頂と頭蓋底との區別

頭蓋頂は前頭骨・顱頂骨及び後頭骨より成り、内外の二面をなす。外面は數多の縫合を有すれども穹隆滑澤なり。而して前部を前額と名づけ、上眼窠縁を以て顔面と境し、後部を後頭と云ひ、其左右の上項線を以て下境となし、頭蓋底とを境界せり。側部を顱顛面

第三十四圖
頭蓋底



と稱し顱顛線に由りて上界をなし、最高部を顱頂と云ふ。

内面は凹陷して略ぼ滑澤なり。此面を以て頭蓋腔に向ひ、腦の上部を掩ふ。

頭蓋底は前頭骨後頭骨蝴蝶骨篩骨及び顱顛骨より成り、亦内外の二面をなす。

内面には多數の指狀隆起、腦隆起及動靜脈に依りて生ぜる溝あり

内面即ち上面は陥凹にして腦の基底を支ふ、故に腦髓下面の形狀に従ひ階段狀をなし、前・中・後の三窩を呈す。而して最高位の窩を前頭蓋窩と云ひて、大腦の前葉を受容し、交通孔數個あり。中央を中頭蓋窩と云ひて、大腦の顱顛葉を受容し、又交通孔數個を有す。最底位の深大なる窩は後頭蓋窩にして、其中央の一大孔を大後頭孔と名け、其他に交通孔數個を存す。

外面は凹凸不等甚だしく、且つ複雑なり。而して前部は顔面頭蓋の所領となる。

◇ 顔面頭蓋の腔窩

眼窠は顔面の上部、鼻根の兩側に位し、形ちは四側錐體にして一大深窩を呈す。其構造は前頭骨・上顎骨・顳骨・淚骨・蝴蝶骨・篩骨及び口蓋骨の七骨より成り、視器を藏する處となる。

鼻腔は顔面の中央にして兩眼窠の下方、口腔の上方にある一大深洞なり。上部は嗅官器を藏し、下部は呼吸器の一部となる。而して鼻軟骨は骨格の鼻部を補ひ以て外鼻を形成す。

口腔は鼻腔の直下において、其形狀は下顎骨の運動に依りて變化す。而して内に味官器を藏し、又消化器の一部をなす。

顳顬窩は頭蓋兩側部の淺窩にして顳顬筋の起始部なり。其下部を下顳顬窩と云ふ。

翼狀口蓋窩は上顎骨の後部と蝴蝶骨翼狀突起と口蓋骨鉛直部との間

にある狹隘なる不齊の小窩にして下眼窠破裂に由りて眼窠と交通すべし。

第二 四肢骨

甲、上肢骨

四肢骨は固有の四肢骨と、之を軀幹に連鎖する四肢帶とに區別す。

上肢骨は上肢帶及び固有上肢骨を云ふ。

イ 上肢帶

上肢帶或は肩胛帶は鎖骨及び肩胛骨の二骨より成る。

一、鎖骨

鎖骨は胸廓前側の上部にありて地平の位置を取り、前頸部の下境をなす處の管狀骨にして、形狀はS字狀に彎曲し肩胛骨と胸骨との連鎖をなす。之を區別して一體兩端とす。

固有四肢骨は遊離上肢骨とも稱す

鎖骨は一端を肩峰端と稱す
鎖骨結節には肋鎖帶附着す
外端の下面には粗嚙部あり之を烏喙結節と云ひ烏喙鎖骨靱帶の附着部なり



體は圓柱形にして上面は直ちに皮下にあり。下面は第一肋骨と相對し一淺溝を有す、鎖骨下筋の附着部にして之を鎖骨下溝と云ふ。
内端は肥厚して關節面を具へ、胸骨の鎖骨截痕と關節す。而して其下面の小結節を肋骨結節と云ふ。

外端は扁平にして上下の二面をなし、末端の關節面と肩胛骨の肩峰突起の末端と相關節す。

二、肩胛骨

肩胛骨は胸廓後上方の兩側にあり。而して上は第二肋骨、下は第七肋骨の高さに位し、形狀は不等邊三角形にして扁平廣濶なり。鎖骨及び上膊骨と联接す。之を區別して二面三縁三隅とす。

前面は陷凹にして肋骨に向ふ、之を肩胛下窩と云ふ。



後面は上部に横徑の隆起あり、肩胛棘と名づけ、之に由りて上下の二窩に分たる、即ち

前面は肋骨面とも稱せらる
肩胛下窩は同名筋附着す
後面即ち背面なり
棘上窩及棘下窩は共に同名筋の起始する所なり
肩胛截痕は血管神經が此處を通じて此の骨の後面に至るものにして大半月形を示し靱帶に依りて小孔となれり
外縁は腋窩縁とも稱し大小兩圓筋の起始部なり

上小部を棘上窩と云ひ、下大部を棘下窩と云ふ。而して肩胛棘端は上方に突出す之を肩峰突起と稱し、鎖骨の外端に联接す。上縁は最短にして薄く、外端は強厚の突起あり、之を烏喙突起と云ひ、其内側の截痕を肩胛截痕と云ふ。外縁は内縁よりも短くして肥厚し、内縁は基底と稱し、最も長くして稍や弓形をなせり。
上外隅は外方に向つて卵圓形の關節面あり、關節窩と稱し、上膊骨と關

内縁は又脊椎縁と稱せらる
高上結節は二頭筋長頭の起始部
高下結節は三頭筋長頭の起始部

節する處にして、此窩の上下縁に結節あり、高上結節及び高下結節と稱し、筋の起始部なり。又關節窩と肩峰突起との間に一截痕あり、之を頸截痕と云ふ。

口、固有上肢骨

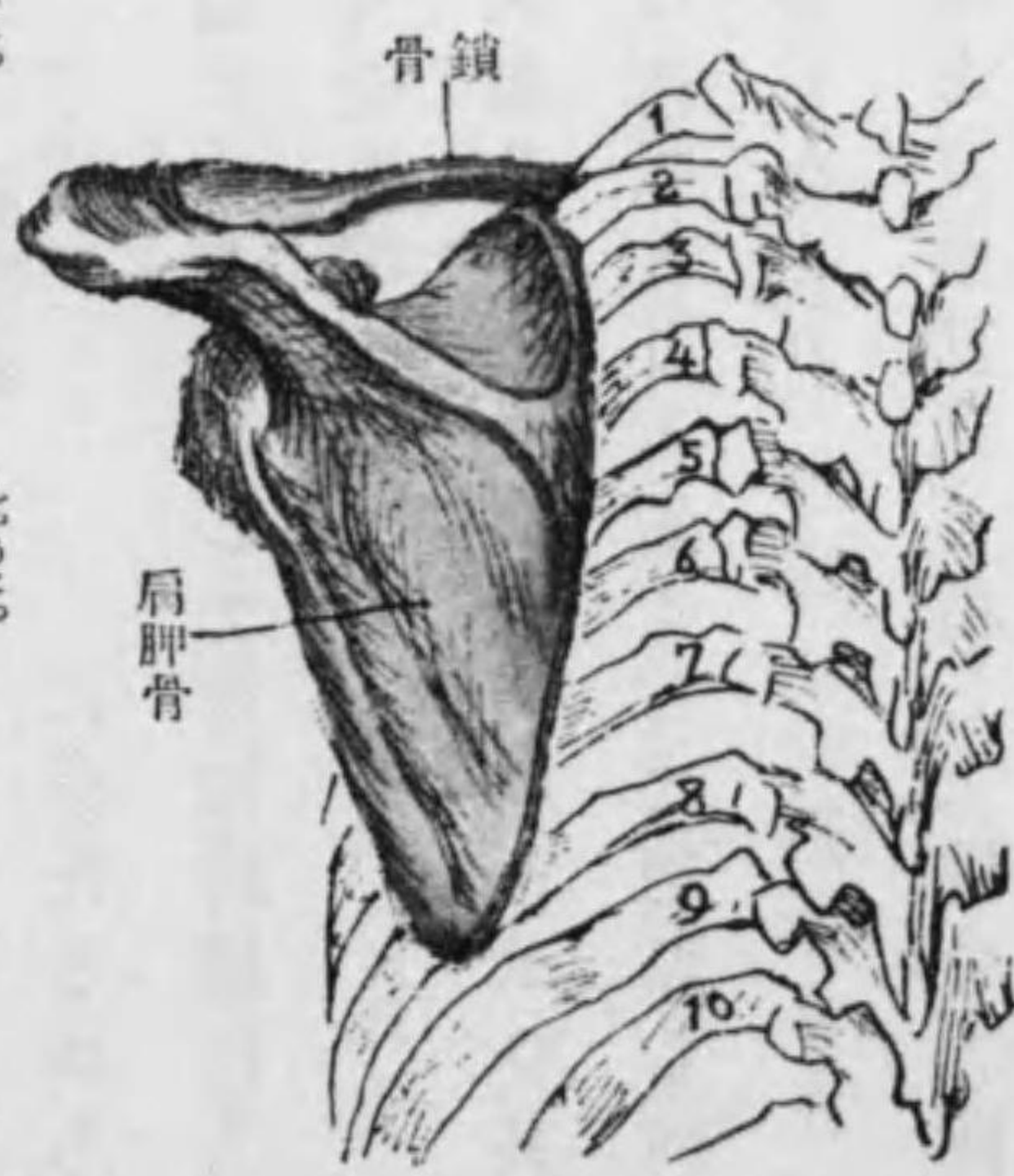
固有上肢骨は上膊骨、前膊骨(尺骨及び橈骨)、手骨、腕骨、掌骨及び指骨とす。

一、上膊骨

上膊骨は胸廓の側部にして、肩胛骨と前膊骨との間にある管狀の長骨なり。之を區別して一體、兩端とす。

上端は膨大して半球形をなし、上内方に向ひて肩胛骨の關節窩と關節す、之を上膊頭と云ふ。頭の周圍は少しく狹隘す、之を解剖頸と名づく。

圖七十三第 帶胛肩ルタ見リヨ方後

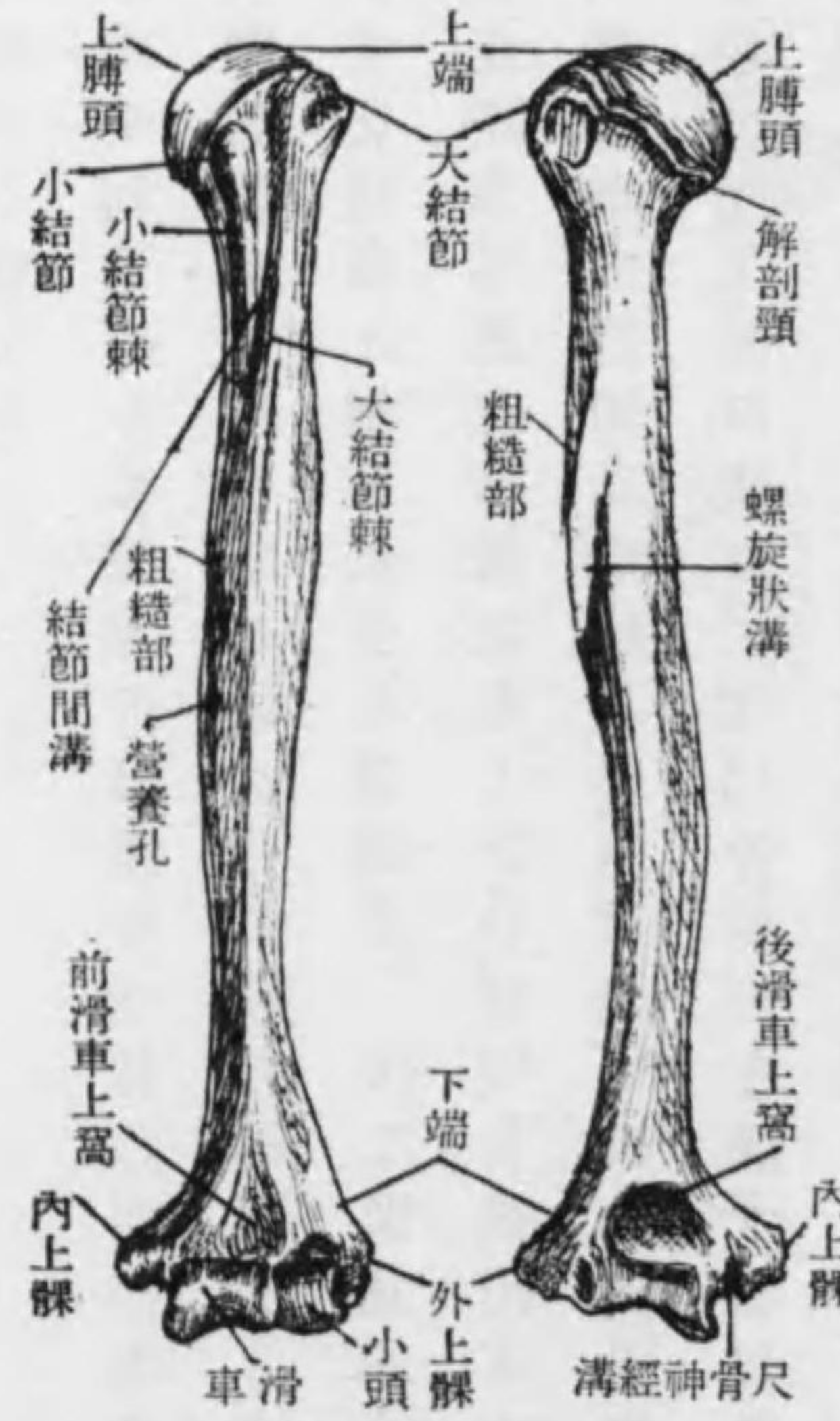


解剖頸は囊狀靱帶の附着部なり

又頭の前内方の結節を小結節、前外方の結節を大結節と稱し、共に筋の停止部にして、此兩結節の間は溝をなす、之を結節間溝と云ひ、二頭筋長頭の腱を通ず。

體は上部稍や圓柱なれども、下部に至るに従ひ次第に三角形をなす。而して上部は大及び小結節棘あり。又外面は中央の上部に著しき粗

圖八十三第 骨膊上左



糙面を呈す、之を上膊結節と云ひ、後面の中央には螺旋狀に外下方に向つて走る淺き大溝あり、螺旋狀溝、或は橈骨神經溝と稱し、橈骨

上膊結節一名三角筋結節

神經の通ずる處なり。

下端は稍や扁平にして側方に擴張し内外二個の突起あり、即ち外方にありて頭狀をなすを小頭と名づけて橈骨と關節し、内方にありて滑車形をなすを滑車と稱し尺骨と關節す。而して滑車の前後に深窩あり、前窩を前滑車上窩又は冠狀窩と云ひ、後窩を後滑車上窩又は鶯嘴窩と云ふ。又滑車の兩側に結節あり、内方のものを内上髁外方のものを外上髁と名け、内上髁の後面には尺骨神經を通ずる尺骨神經溝あり。

二、前膊骨

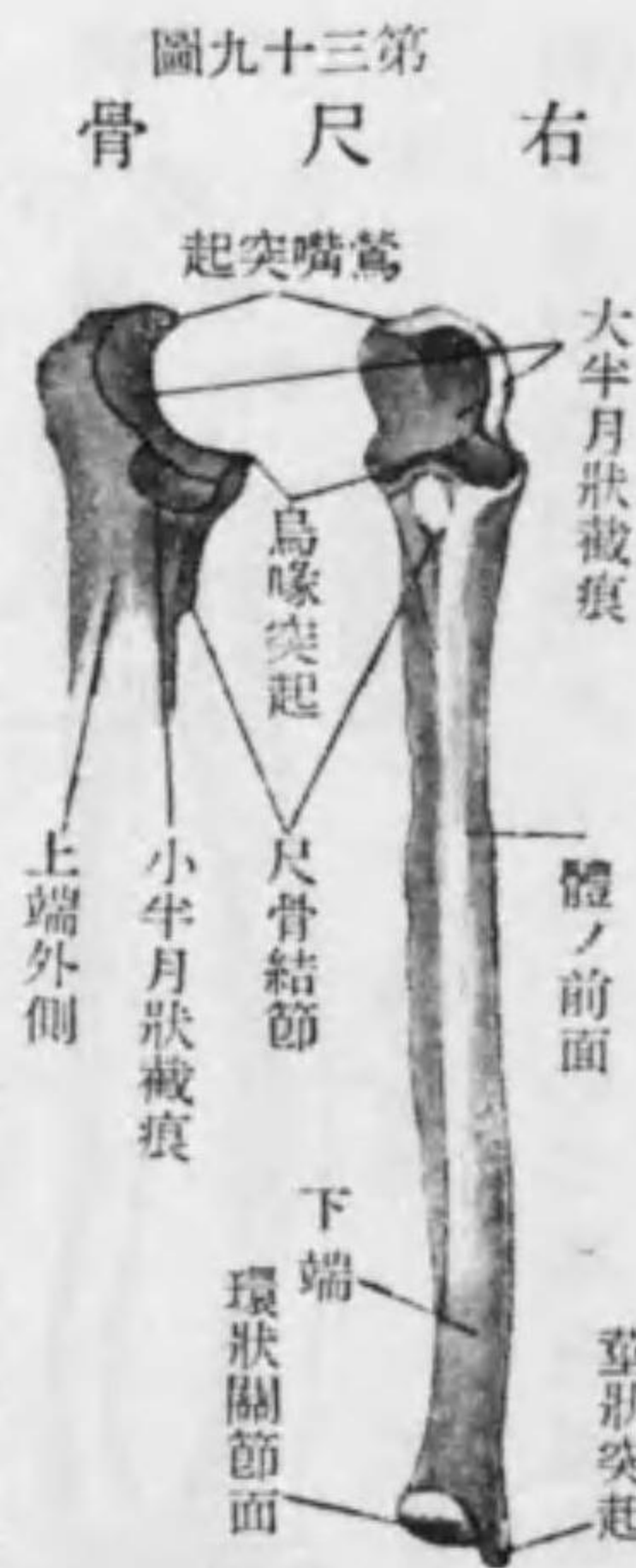
前膊骨は二個の長骨より成り、其内側に在るを尺骨と云ひ、外側に在るを橈骨と云ふ。

1 尺骨

尺骨は前膊の小指側に位し、其形狀は管狀にして長し。而して上膊骨、橈骨及び腕骨と联接す。之を區別して一體兩端とす。

冠狀窩は鳥喙窩とも稱せられ、肘關節屈曲時に尺骨の鳥喙突起が嵌入する處なり

上端は肥厚して前面に大なる截痕あり、之を大半月狀截痕と名づく、即ち上膊骨の滑車と關節する處にして、上下二個の突起を出す、其上方のものを鶯嘴突起と名づけ、下方のものを鳥喙突起と名づく。而して其下際に一粗糙部あり、尺骨結節と云ふ。又鳥喙突起の外側に截痕を呈す、之を小半月狀截痕と稱し、橈骨小頭と關節す。



體は三角形にして下端に赴くに從ひ狭少となり、僅かに前面に彎曲し、前面の上方に榮養孔を現はす。下端は少しく膨大す、之を小頭と云ふ。其下面は三角軟骨に依りて間接に腕骨と關節し、其外側の關節面は環狀關節面と名け、橈骨下端と關節す。又小頭より下方に向つて短少の突起を出せり、之を莖狀突起と稱す。

體の外縁は銳線にして骨間槽と稱す

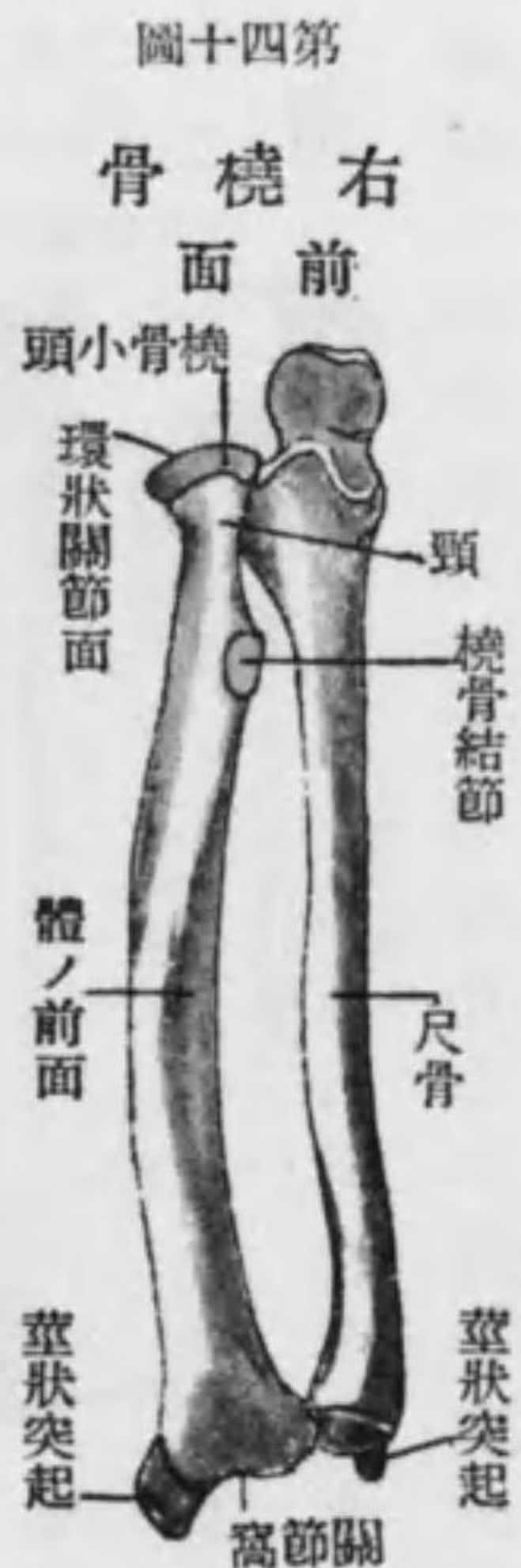
莖狀突起は橈骨莖狀突起より大なり

桡は昔ダウなるも從來ギヤウ又ダウと發音せり血管神經名も又同じ

2 桡骨

桡骨は前膊の拇指側に位し、其形状は管状にして長く、少しく弓状を呈し、上膊骨、尺骨及び腕骨と联接す。之を一體、兩端に區別す。

上端は少しく膨大す、之を桡骨小頭と名づけ、末端の圓形陷凹なる關節面を以て上膊骨下端の小頭と關節し、其周縁にある輪狀の關節面を環



狀關節面と稱し、尺骨の小半月狀截痕と關節す。又小頭下部にある結節は之を桡骨結節と名づく。

體は其横断面稍や三角にして其内隅殊に銳利なり、之を骨間櫛と云ふ。前面には榮養孔あり。

下端は強く膨大し、末端に陷凹なる三角形の關節面あり、之を關節窩と稱し、腕骨の舟狀骨と半月骨とに關節す。其内側の截痕を半月狀截痕

と云ひ、尺骨下端の環狀關節面と關節する處にして、更に其下方に突出せる突起を莖狀突起と稱す。

三、手骨

手骨は手根を形成せる八個の腕骨と、手掌を成せる五個の掌骨と細長なる十四個の指骨より成る。

1 腕骨

腕骨は前膊の下端に位し、八個の短骨上下二列に排列し以て手根を形成す。而して各骨共に其形ちは骰子形を呈し、联接は八個相互と前膊骨と掌骨となり。之を上下の二列に區別す。

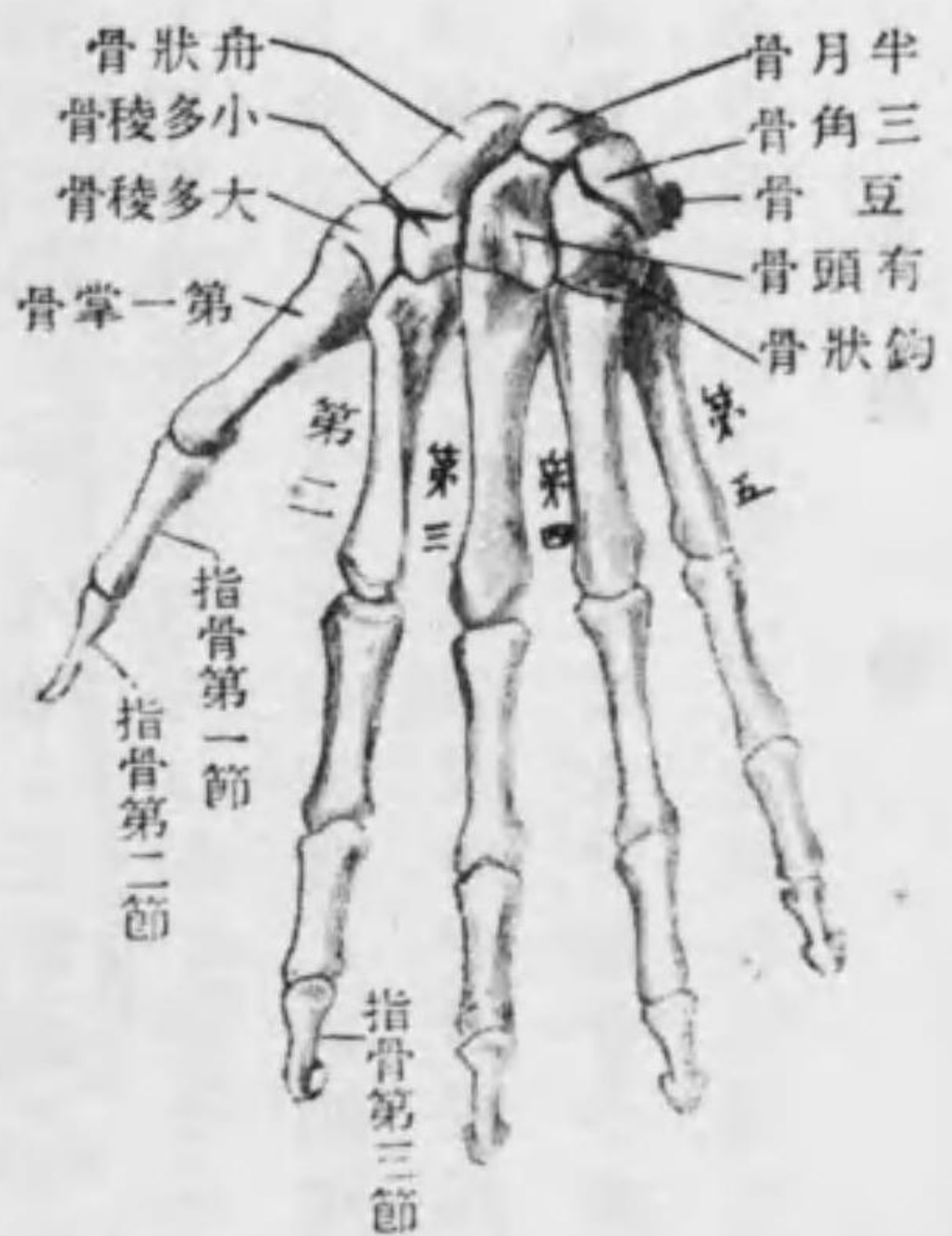
上列を拇指側より數ふれば舟狀骨、半月骨、三角骨、及び豆骨にして、下列も同じく拇指側より數ふれば大多稜骨、小多稜骨、有頭骨及び鈎狀骨なり。



掌骨一名中手骨

2 掌骨

第十四圖
左手骨



掌骨は手掌を形成せる小なる長骨にして、其數五個あり。联接は腕骨の下列と指骨の基底とにして之を區別して一體・兩端とす。

大し、上端は腕骨の下列と關節し、下端は指骨の基底と關節す。又骨幹は細小となり各骨幹間に間隙を生ず、之を骨間腔と云ふ。而して之を稱するには拇指側より小指側に向つて次第に第一掌骨、第二掌骨、第三掌骨、第四掌骨、第五掌骨と數ふ。又第一掌骨下端の兩側には種子骨を有せり。

3 指骨

指骨は掌骨の下部にして、即ち指節をなすものなり。其數十四個あり。而して特り拇指は二節なれども、他の四指は各三節を有す。各指を名づけて拇指(大指)、食指(示指)、中指、無名指(環指)及び小指と稱す。

乙、下肢骨

下肢骨は下肢帶及び固有下肢骨を云ふ。

イ 下肢帶

下肢帶或は骨盤帶は左右の無名骨より成る。

一、無名骨 或は 臑骨

無名骨は軀幹の下部にありて薦骨の左右に位し、骨盤の大部を形成す。形狀は扁平不齊にして、其联接は薦骨、大腿骨及び左右同名骨相互の接合なり。之を區別して腸骨、坐骨及び耻骨の三骨とす。而して三骨相結合する處、外側に深大なる窩をなす、之を髌臼と云ふ。大腿骨頭を受容するの窩なり。

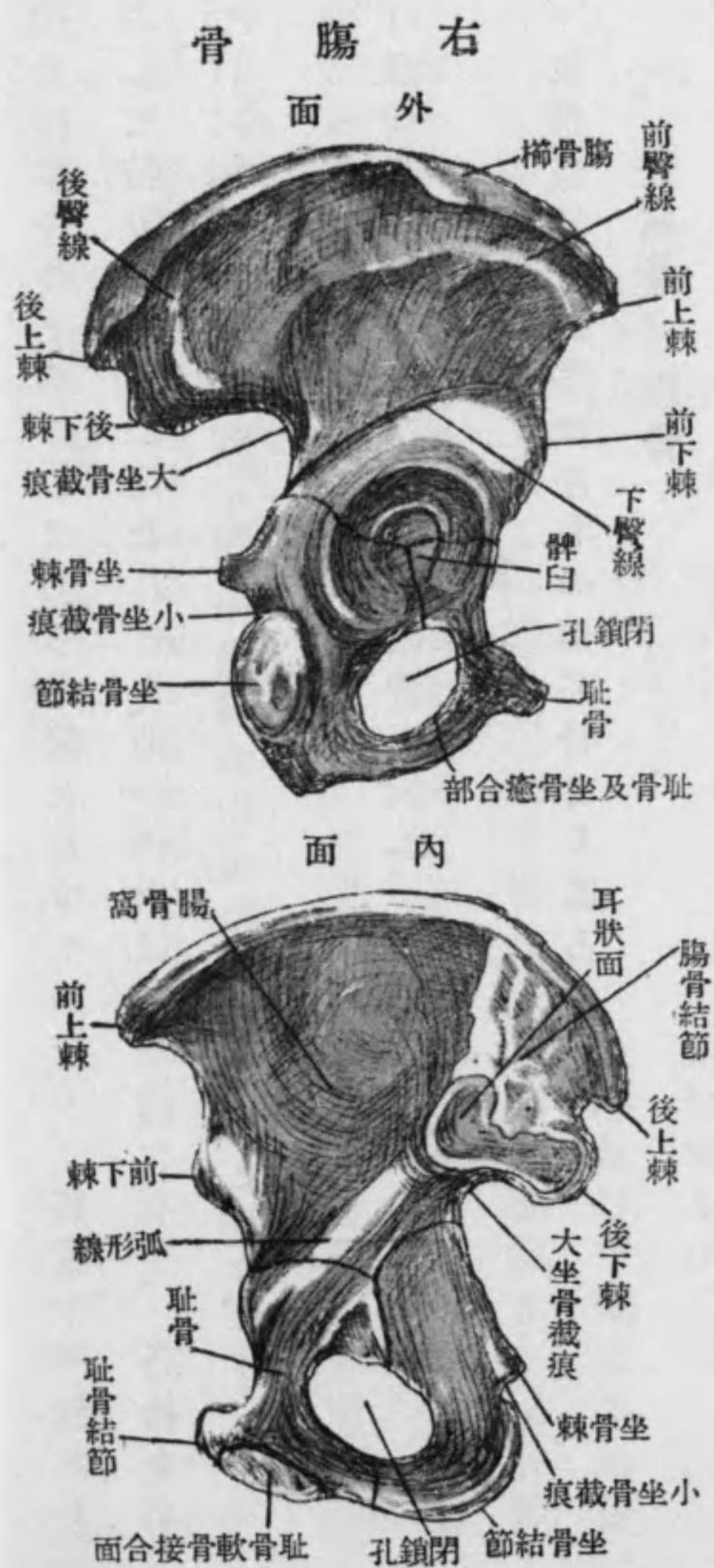
固有下肢骨は遊離下肢骨とも稱す

無名骨は一名臑骨と云ふ

1 腸骨

腸骨は無名骨の大部を占め最も擴張す之を一體一翼とす。體は頗る強厚にして髌臼の上部を助成す。翼は體より後上部に出でたる扁平なる部にして二面三縁を有す。内

第四十二圖



面は前上部凹陷にして滑澤なり、之を腸骨窩と云ひ、其後部に大なる關節面あり、耳狀面と名づけ薦骨の耳狀面と關節す。外面は稍や凹凸して二個の粗線を現はす、即ち前髌線、後髌線と稱へ筋の起始部なり。上縁は弓形にして長く且つ肥厚す、之を腸骨櫛と云ふ。前縁は短且つ不等にして二個の鈍突起を呈す、其上を腸骨前上棘、下を腸骨前下棘と云ふ。後縁も亦二個の鈍突起を呈す、其上を腸骨後上棘、下を腸骨後下棘と名づく。

2 坐骨

坐骨は無名骨の後下部にして肥厚せる部を體と稱し、二枝を具ふ。體は髌臼の後下部を成し。其後縁は腸骨後縁の一系にして下部は一の棘に終る、之を坐骨棘と云ひ、坐骨棘の上下に各一個の截痕あり、甲を大坐骨截痕、乙を小坐骨截痕と名づく。而して體の後下方に連れるは上枝にして其下端に大なる粗糞部あり、之を坐骨結節と云ひ、此坐骨結

節より前方に向ふを下枝と名づけ、耻骨の下枝と癒合す。

3 耻骨

耻骨は無名骨の前下部を占めて最小部を構成し、一體二枝を具ふ。體は強厚にして髌臼の前下部を成す。上枝は體の前方に連れる部に於て前端に近く一結節あり、耻骨結節と云ひ、其前端は對側の耻骨と合して耻骨軟骨接合或は耻骨縫隙を構成する處の接合面を有し、下枝は之より後下方に走りて坐骨の下枝と癒合す。

又無名骨には閉鎖孔と名づくる三角形の一大孔あり、耻骨坐骨の上、下兩枝に由りて構成せられ、閉鎖膜を以て閉鎖せらる。

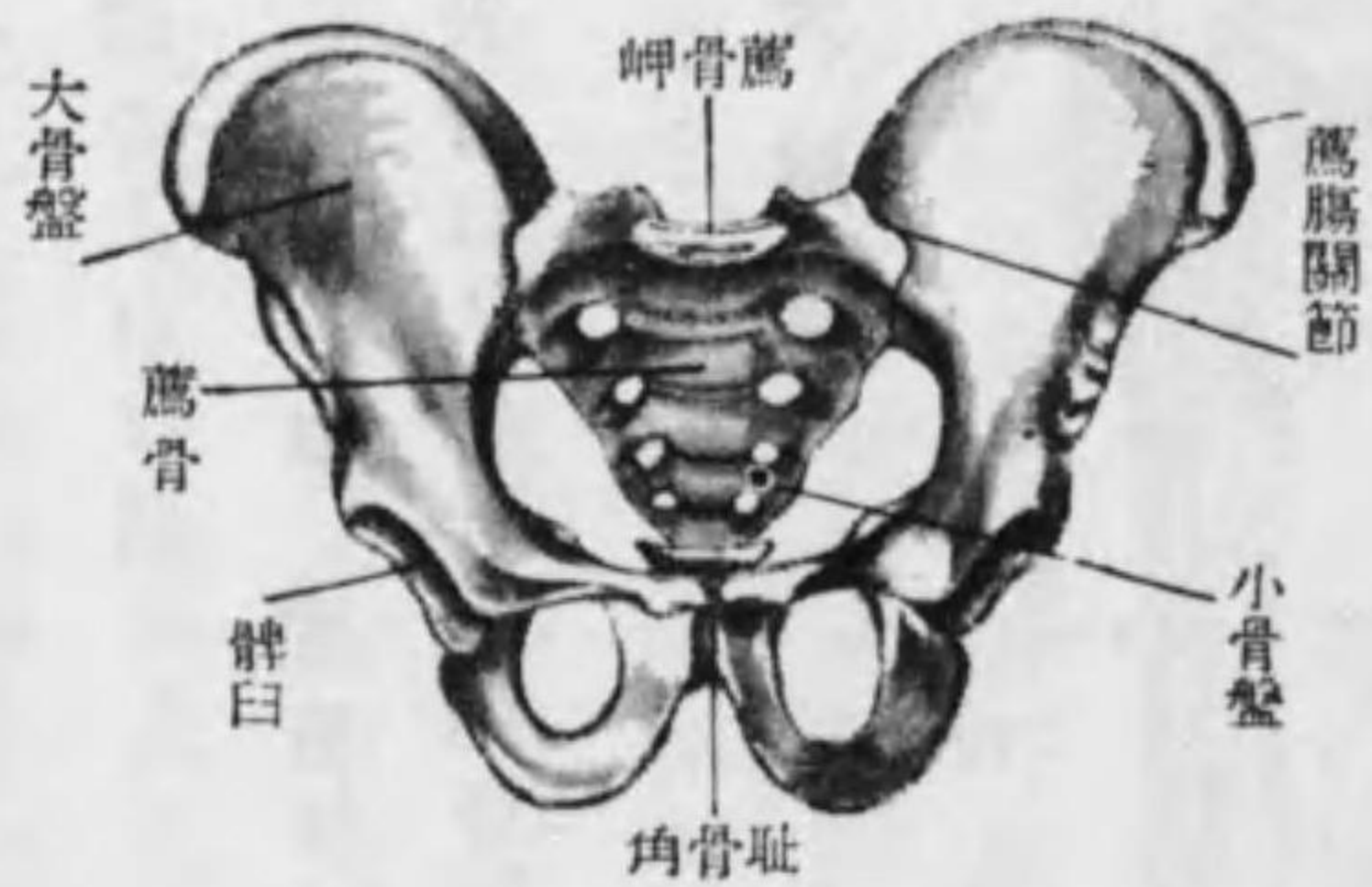
◇ 髌臼

髌臼は無名骨の外面に於ける半球形の深窩にして、腸骨坐骨及び耻骨の癒合に由りて構成せられ、其周縁は隆起せり、之を髌臼縁と云ひ、下部

は僅かに缺如す、之を髌臼截痕と云ふ而して髌臼の中心は著しく陥凹す。之を臼窩と名づく。

◇ 骨盤

第四十三圖 男骨盤前面



骨盤は軀幹の最下部にして左右の無名骨第五腰椎薦骨及び尾閼骨の相結合したる骨腔の一装置にして、形狀は稍や漏斗狀なり。之を區別して大骨盤及び小骨盤とす。

大骨盤は後壁は第五腰椎薦骨翼にして側壁は左右の腸骨窩なり前壁は開放す。小骨盤は其内を骨盤腔と云ひ、後壁は薦骨尾閼骨にして、側壁は坐骨及び腸骨の

骨盤は男女其形を異にし男子は狭長にして耻骨軟骨接合の下縁は鋭角をなし耻骨角といひ骨盤腔狭小なり女子は廣潤にして軟骨接合の下縁は鈍角をなすを以て耻骨弓といひ骨盤腔廣く且下口横楕圓形を呈して廣し

一小部なり。前壁は耻骨及び耻骨軟骨接合にして頗る短かし。而して小骨盤の上口は圓くして大なれども、下口は不齊形にして小なり。

口 固有下肢骨

固有下肢骨は大腿骨・下腿骨(脛骨・腓骨)及び膝蓋骨(足骨)・跗骨・蹠骨及び趾骨とす。

一 大腿骨

大腿骨は別名股骨と稱す

第四十四圖 右大腿骨



大腿骨は身體中最大なる管狀骨にして大腿部にあり。其联接は無名骨脛骨及び

膝蓋骨なり。之を區別して一體兩端とす。

上端は斜めに内上方に向つて突出せる圓形の關節頭あり之を大腿骨頭と云ひ、髌臼に嵌入す。其頭の下際に狭き部あり、之を頸と云ふ。此外側に上方へ向へる大突起あり、大轉子と名づけ、同内部の陥凹部を轉子窩と云ふ。又頸の下部に鈍突起ありて内後方に向ふ、之を小轉子と名づく。而して大轉子と小轉子との間は前後共に一の隆線に由りて互に結合せらる、之を前及び後轉子間線と稱す。

體は前方に向つて少しく弓形を成し、後隅は粗糙の櫛を露はす、之を大腿骨櫛と稱し、之を内外の兩唇に分つ、即ち外唇は大轉子の續きにして其下端は外上髌に連り、内唇は小轉子の續きにして其下端は内上髌に連る。而して體は後面の中央に一の營養孔を有す。

下端は頗る膨大して扁平四方形を呈し、兩側に滑澤なる突起を生ず。其内側にあるを内關節髌と云ひ、外側にあるを外關節髌と稱す。前方

は内外關節髌相结合して淺窩を呈す、之を膝蓋窩と名づけ、膝蓋骨と關節す。又後面にも深大なる窩あり、之を膝膕窩或は髌間窩と名づく。而して關節髌の兩側に於て各一個の結節を現はす、其内側のものを内上髌と云ひ、外側のものを外上髌と云ふ、共に筋の起始部なり。

二、下腿骨

下腿骨は大腿骨の下端に連続せる二個の長骨及び一個の扁骨より成る。

1 膝蓋骨

膝蓋骨は膝關節の前側に於て、四頭股筋の腱中にある扁平栗子狀の一の種子骨と看做すべきものにして、前面は豐隆粗糙なり。後面は滑澤にして内外の小凹關節面を以て、大腿骨下端の膝蓋窩と相應容して關節す。

2 脛骨

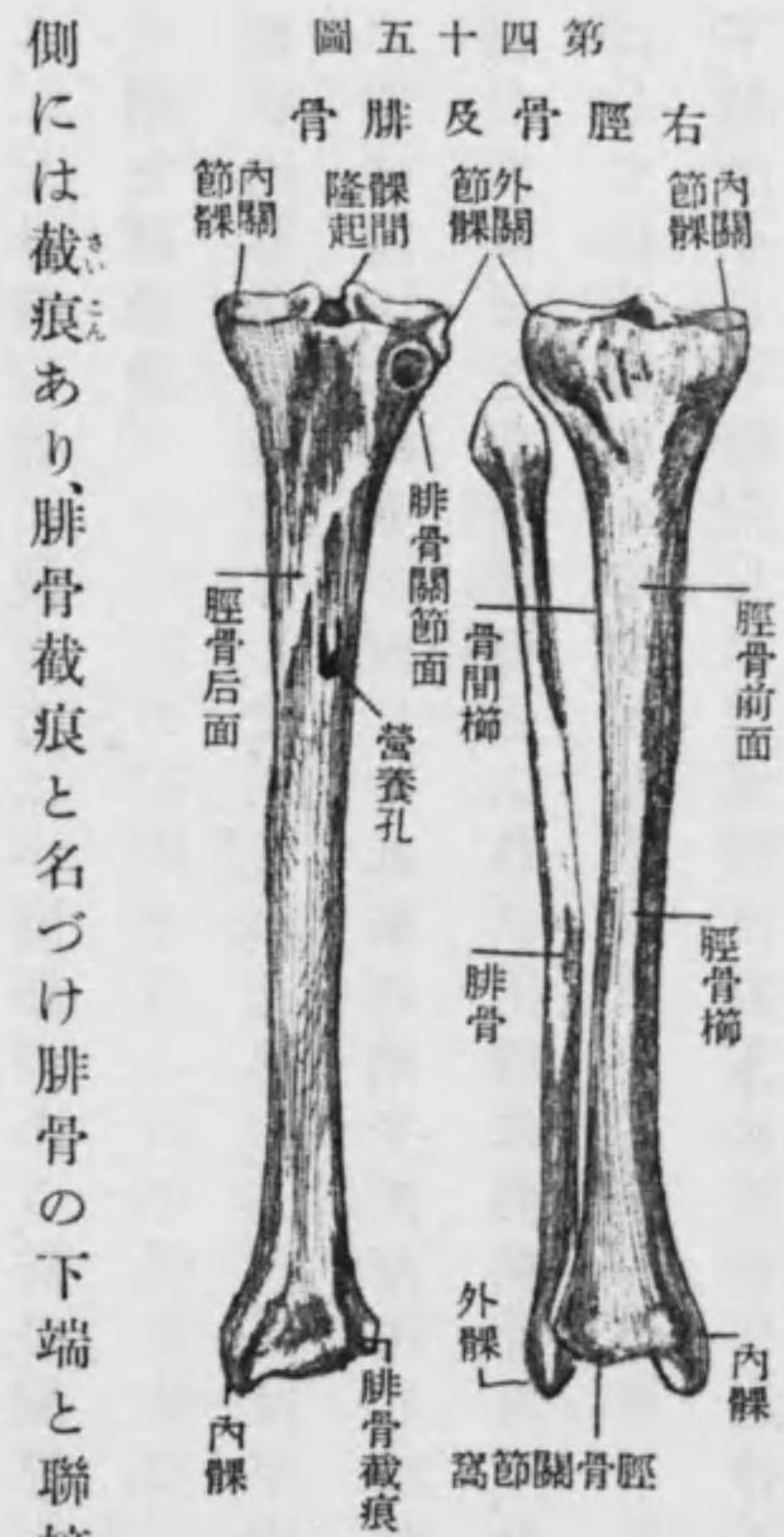
脛骨は腓骨に比すれば長さ殆ど同一なるも著しく太し

脛骨は下脚の内側にあり、腓骨と相並び以て下脚を形成す。其形狀は稍や三角柱形にして、大腿骨の下端と腓骨及び距骨とに联接す。之を區別して一體兩端とす。

上端は粗糙にして甚だ膨大し殊に側方に擴張して其末端に二個の關節面を現はす、之を内及び外關節髌と名づけ、大腿骨の内及び外關節髌と關節す。而して内及び外關節髌の間にある小隆起を髌間隆起と云ふ。又外關節髌の後下方に小關節面あり、腓骨關節面と名づけ、腓骨の上端と關節す。

體は内外後の三側に於て三稜形を呈し、其内面は平滑にして前隅と共に直に皮下にあり。而して外面は稍や凹滑にして、後面は凸滑なり。但し前隅は之を脛骨櫛と云ひ、其上端に鈍結節あり、是れ即ち脛骨結節にして膝蓋靱帶の附着部なり。

下端は少しく膨大して其末端に關節面を有し距骨と關節す、之を脛骨



第四十四圖 右脛骨及腓骨 脛骨前面、脛骨後面、腓骨前面、腓骨後面、骨間櫛、腓骨關節面、營養孔、外髌、内髌、脛骨關節窩、腓骨關節窩、腓骨隆起、腓骨關節、脛骨關節、内髌關節、外髌關節

關節窩と云ふ。其内側の下方に突起あり、之を内髌と稱し、直ちに皮下にあり。又脛骨關節窩の外

3 腓骨

腓骨は下脚の外側に在りて脛骨と相併ぶ處の三角柱狀の極めて細長なる骨にして、脛骨及び距骨に联接す。之を一體、兩端に區別す。上端は腓骨小頭と稱し、稍や膨大す。其末端の關節面は脛骨關節面と名づけ脛骨の腓骨關節面と接合す。體は三角稜柱形にして、殊に内面脛骨に向ふ處長くして銳利なる一線

腓はヒなるも從來ハイと發音す

跗骨一名足根骨

跟骨の後部に粗礎面あり之を跟骨結節と稱す

を現はす、之を骨間櫛と云ふ。下端も亦稍や肥大す、之を外髌と稱し、少しく下方に延長し直ちに皮下にあり。内側は關節面を備へて距骨と關節す。

三、足骨

1 跗骨

跗骨は下腿の前下部にして、七個の短骨を以て足根を形成す。其形状は不齊短小にして概ね骰子形なり。联接は七個相互に接合し、下腿骨及び蹠骨と關節す。之を區別して前後の二列となす。後列は跟骨及び距骨なり。前列は五個にして、之を躡趾側より數ふれば舟狀骨第一楔狀骨、第二楔狀骨、第三楔狀骨及び骰子骨なり。而して其前端は各蹠骨の後端と聯

接す。

2 蹠骨

蹠はセキが正骨なり
蹠骨一名中足骨

第十四圖 右足骨



蹠骨は跗骨と趾骨との間に位せる五個の小管狀骨にして少しく弓形を帯び、手の掌骨よりも堅く接合す。之を稱するには跗趾側より第一蹠骨、第二蹠骨、第三蹠骨、第四

蹠骨、第五蹠骨と云ひ、其前端は各趾骨と接合し、後端は第一乃至第三楔狀骨及び骰子骨と联接し、各々骨間腔を現はす。

第一蹠骨には其前端の下際に、二個の種子骨を有す。

3 趾骨

趾骨は蹠骨の前部にありて指骨と同じく第一乃至第五趾骨と稱す。

其數十四個にして各一小長骨なり。且つ指骨の如く關節すれども各節甚だ短かくして跗趾は二節より成り、他は皆三節より成る。後端は蹠骨と關節し、前端は次節と關節す。而して其末端は粗糙なる縁を以て終る。

第二 靱帶學

靱帶學とは主に關節の構成に必要な靱帶に就て論ずるものにして先づ始めに關節の種別を知らざる可からず。

甲 不動關節

不動關節は之を分ちて縫合及び接合の二とす。

一、縫合 とは鋸齒狀縫合又は鱗狀縫合等の如く幽微の軟骨質を以て不等の骨縁互に結合し、少しも移動すること能はざるものを云ふ。例へば頭蓋諸骨に於ける縫合の如し。

二、接合 とは他組織の骨間に介在するに由りて成るものにして、其著しきものを軟骨接合とす。彼の耻骨軟骨接合の如き、若くば脊柱の如き、骨間に厚き軟骨を存し、平等の骨面互に接合して少しく移動する

を得るもの即ち是れなり。

乙 可動關節

可動關節は之を造るに與かる骨の數に依り、二骨より成るもの即ち單關節及び三骨以上より成るもの即ち複關節に區別し、其運動する軸の數に依り、又一軸性關節、二軸性關節及び三軸性關節に區別す。更に又其形狀に依り左の六種に區別す。而して關節を造る骨端は通常一方は凸面を呈し、他方は凹面を呈するものにして、前者を關節頭と云ひ、後者を關節窩と云ふ。共に關節軟骨に由り被はるるものなり。

一、全動關節 とは關節頭は球狀、關節窩は球窩を爲し上下左右廻轉等何れの方にも自由に運動を営み得べき肩胛關節、又は股關節の如きを云ふ。故に運動軸の數より云へば三軸性關節に屬す。

二、鞍狀關節 とは關節を爲せる兩骨端の鞍背狀をなすものにして、

兩骨端が恰かも鞍背と鞍背とを交叉して相接したるが如き状をなし、第一掌骨と腕骨との關節の如く屈伸及び内外兩轉の作用をなすものを云ふ。故に運動軸の數より云へば二軸性關節に屬す。

三、髁狀關節 とは鞍狀關節の作用と稍や同一なるも關節の形狀大に異り、關節頭は橢圓狀を爲し、關節窩は之に一致して陷凹せる下顎關節又は後頭載域關節の如きを云ふ。故に運動軸の數より云へば同じく二軸性關節に屬す。

四、蝶番關節 とは關節頭は其骨の縱軸と直角を爲せる圓柱の一部をなし、關節窩は之に一致して陷凹し、唯だ屈伸のみの用を司どる處の肘關節又は指關節の如きを云ふ。故に運動軸の數より云へば一軸性關節に屬す。

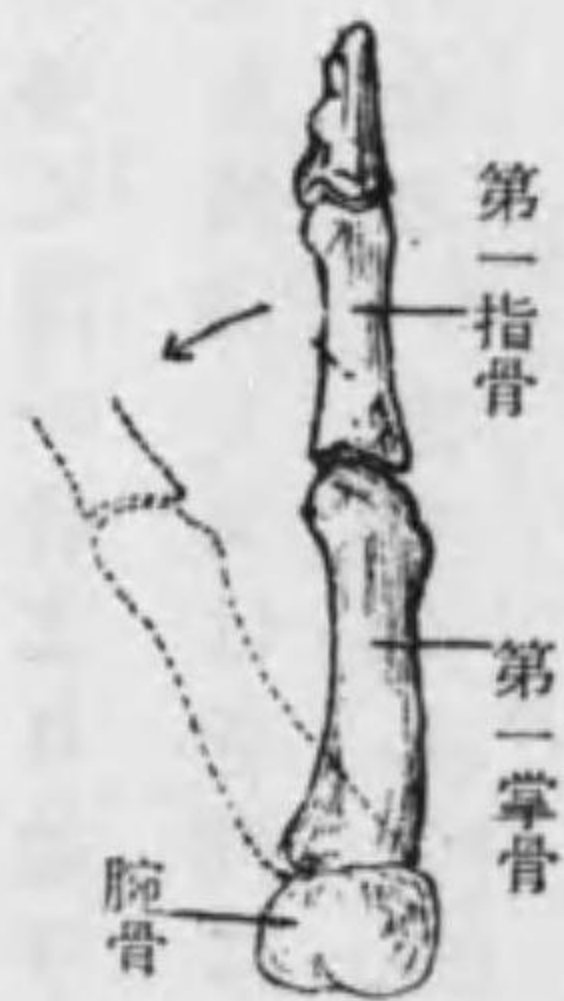
五、車軸關節 とは圓柱狀を爲せる關節頭と同じく圓柱狀なる關節窩の相關節せる、第二頸椎の齒狀突起と第一頸椎との關節、又は橈骨と

圖七十四第 可動關節

全動關節



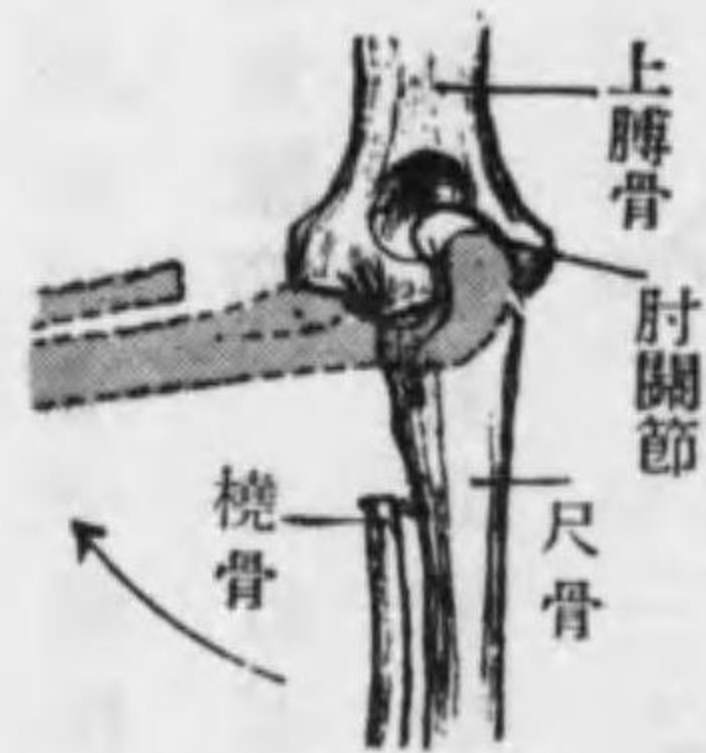
鞍狀關節



髁狀關節



蝶番關節



車軸關節



叢合關節



尺骨との關節の如く、一軸に沿ふて廻旋するものを云ふ。故に運動軸の數より云へば一軸性關節に屬す。

六、**叢合關節** とは其關節面の平坦又は平坦に近き腕骨跗骨の如き微弱の運動を營むものを云ふ。

◇ 靱 帶

靱帶は其質強靱の纖維様結締組織より成る處の膜質にして、白色の光輝を有し、最も弾力に富む。多くは一骨より起り他骨に跨りて、兩骨の連繫を維持し兼ねて其滑脱を豫防し、又は骨間に緊張して血管、神経を通ずる孔裂を形成するものなり。之を分ちて三種とす。

一、**囊狀靱帶** は可動關節に於て一骨の骨膜より直に他骨の骨膜に延展し、關節をして一の囊腔(關節腔)となすものにして、内面の滑液膜を被ひ此膜より常に黄色を帯びたる僅少の濃厚液を分泌す、之を滑液と

圖八十四第 帶靱及節關動可



稱し、關節面を滑か
ならしめ相互の摩
擦を防ぎ、恰かも運
轉せる機械に油を
注ぐが如し。而し

て滑液膜の内面には絨毛或は皺襞を有するものなり。

二、**副靱帶** は囊狀靱帶の外面或は内面に在りて一骨より他骨に亘り、囊狀靱帶を補助し益々關節を固定するものを云ふ。

三、**固有靱帶** は一骨の孔或は截痕に緊張して茲に裂孔を形成するものにして、多く血管、神経の通路となり、敢へて他骨に跨らざるものを云ふ。

總て骨格のある處必ず靱帶ありて骨格の聯結をなし、茲に人體の基礎を構成す。

靱帶學各論

第一 軀幹靱帶

甲 椎骨联接

椎骨联接の靱帶を分ちて各椎間の靱帶、脊柱全部に渉る靱帶の二種とす。

椎骨間の靱帶を更に分ちて椎骨體間の靱帶、椎骨弓間の靱帶、椎骨突起間の靱帶となす。

イ、椎骨體間の靱帶 は扁圓にして弾力を有し各椎體間に存す、之を椎間靱帶(椎間軟骨)と云ひ纖維様軟骨より成り、其大小は各椎體の大きさに準じ、外部は強固にして之を纖維輪と云ひ、内部は柔軟の膠様核より成る、而して薦骨尾閭骨間に在りては、椎骨軟骨を有すれども膠

圖九十四第
弓椎同及體椎脊
帶靱ノ間起突



様核を有せざるものとす。但し後頭載域間及び載域樞軸間は之を缺ぐ。

ロ、椎骨弓間の靱帶 は弾力纖維に富み黄色を呈す、故に黄色靱帶と云ひ棘狀突起の兩側に在りて各椎弓間に存在す。

ハ、囊狀靱帶 は菲薄にして椎骨の關節突起を被包するものにして、運動量の多き部分は寛く緊張すべし。

ニ、横突起間靱帶 は横突起の間にある菲薄膜狀の靱帶なり。
ホ、棘間靱帶 は棘狀突起の間に緊張する靱帶にして、頸部に在りて

は非常に發育し、全頸椎の棘間靭帯は合して三角形の膜となり、外後頭櫛及び外後頭結節に渉る之を項靭帯と云ふ。

へ、前縦靭帯 は第一頸椎の前結節より脊椎の前面に沿ふて下行し薦骨の前面に移行する強き靭帯なり。

ト、後縦靭帯 は脊柱管内に在り、第二頸椎體の後面より薦骨體の後面に達す。

脊柱の運動 は前額軸による屈伸、矢状軸による側方屈伸、鉛直軸による廻旋運動の三種とす。

乙 脊柱頭蓋联接

之を區別して載域後頭联接、載域樞軸联接となす。

一、載域後頭联接 は後頭骨の髁狀突起と載域の上關節窩との联接なり。

イ、囊狀靭帯 は緊張緩くして、頭蓋の屈伸動作を営ましむ。
ロ、閉鎖膜 は載域の前後兩弓より後頭骨大後頭孔の周圍の間を閉鎖す、之を前及び後閉鎖膜と云ふ、但し後閉鎖膜は椎骨動脈に穿通せらる。

二、載域樞軸联接 は載域の下關節窩と樞軸の兩側上面との联接及び齒狀突起と後關節窩との联接なり。

イ、囊狀靭帯 は三關節を緩く被包し廻旋の用に供す、而して他に三個の副靭帯あり。

第五十圖 脊柱頭蓋联接



ロ、翼狀靭帯 は齒狀突起の上端の兩側より起る強靭帯にして、次第に相遠ざかり後頭骨髁狀突起の内側に緊張す。

ハ、提齒靭帯 は齒狀突起の尖頂より起り、後頭骨の大後頭孔の前縁

に附着す。

ニ、横靱帯 は扁平強靱にして載域内面の一側より起り齒狀突起を壓迫し他側の内面に緊張して、椎孔を二分するものなり。而して中央より上下二脚を生じ後頭骨と樞軸體に附着す、故に其形ち十字形をなすを以て十字靱帯と云ふ。

運動 は齒狀突起を鉛直軸として、載域が頭蓋と共に廻轉す。

丙 肋骨联接

之を分ちて肋骨椎骨联接、肋骨胸骨联接、肋骨間联接とす。

- 一、肋骨椎骨联接 は肋骨小頭と椎骨體の肋骨窩との關節なり。
- 1 肋骨頭の靱帯 は二個あり。
- イ、囊狀靱帯 は肋骨小頭と椎骨體の關節を被包す、其前側に強厚なる副靱帯あり。

圖一十五第

肋骨椎骨联接



- ロ、放線状靱帯 と云ひ三個に分れ椎體及び椎間軟骨に緊張すべし。
- 2 肋骨頭の靱帯 も又三個あり。
- イ、前肋骨頭靱帯 は肋骨小頭及び肋骨頭より生じ、上位の横突起に附着す。
- ロ、後肋骨頭靱帯 は肋骨頭の後側より起り上位の横突起及び棘状突起根に緊張す。

ハ、中肋骨頭靱帯 は各肋骨と横突起との間にあり。

3 肋骨結節靱帯 は肋横關節囊の後側に於て、肋骨結節と横突起の

尖端に渉る。

二、肋骨胸骨联接 は第二乃至第七肋軟骨の前端と、胸骨の肋骨截痕の關節なり。但し第一肋軟骨は胸骨と關節せずして密に結合す。

囊狀靱帶 は軟骨膜の延長物にして、前後兩側に強厚の副靱帶あり、胸肋靱帶と云ひ、肋軟骨の軟骨膜より胸骨の前後兩面に向つて放線狀に分散す。

三、肋骨間联接 は之を内肋間靱帶、外肋間靱帶及び肋骨劍尖靱帶と云ふ。

肋骨運動 肋骨後端は二個の叢合關節にして一軸により前端胸骨と共に上下の運動を營爲し、同時に前後に移動す。

丁 下顎關節

下顎關節は顎顛骨の關節窩と下顎骨の髁狀突起との關節にして顎顛

第五十二圖 下顎關節



骨の關節結節も之に與かる所の髁狀關節なり。イ、囊狀靱帶は關節窩及び結節より

生じ下顎骨の關節頭を被包す。而して關節腔に一つの圓板あり、之に依りて關節腔を上下の二腔に分つ、此の圓板を關節間軟骨と云ふ。口、關節間軟骨(靱帶) は其周緣囊狀靱帶に附着して、關節頭の運動に従ひ進退を共にす。茲に三個の副靱帶あり。

ハ、内側靱帶(蝴蝶頸靱帶) は關節窩の内側より起り、一部は髁狀突起

の内面に附着し、一部は下顎小舌に附着す。

ニ、外側靭帯(顛顛頸靭帯) は顛顛骨顛骨突起の根部より、後下方に走り下顎頸に密着す。

ホ、莖狀頸靭帯(莖頸靭帯) は莖狀突起より起り、下顎枝の後縁に緊張す。

運動 此關節は咀嚼及び談話に際し、髁狀突起は前後左右に滑脱し、諸種の方向に運動す。

第二 上肢靭帯

甲 肩胛帶联接

一、胸鎖關節 は胸骨劍柄と鎖骨の内端との联接なり。

イ、囊狀靭帯 は強く關節を被包し、此關節窩には強き關節間軟骨を有す。

ロ、關節間軟骨(靭帯) は復凹面狀にして上面は鎖骨に向ひ、下面は胸骨に向つて關節腔を上下の二腔に分つ。又囊狀靭帯の上面及び前面は強固なり。

ハ、胸鎖靭帯 と云ふ、而して上面のものは頸截痕に沿ふて他側に移行す。之を

ニ、鎖骨間靭帯 と云ふ、又鎖骨の肋骨結節と、第一肋骨との間に一つの強き副靭帯あり。

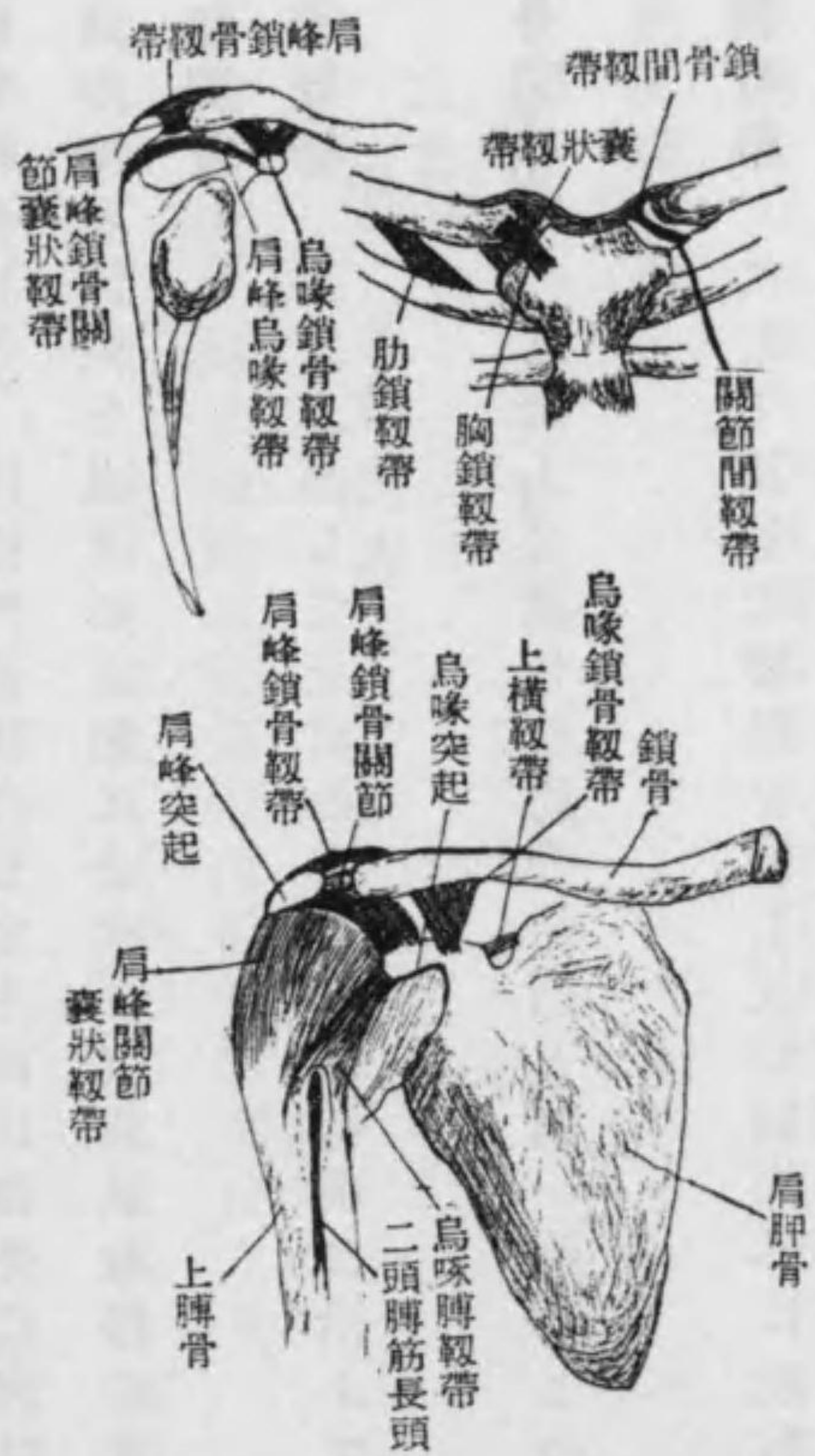
ホ、肋鎖靭帯 にして、鎖骨の運動を制し、且つ關節外に脱出を防ぐものなり。

運動 此關節は叢合關節若くは制限されたる全動關節にして、僅微なれども比較的繁多なる運動を營む。

二、肩峰鎖骨關節 は鎖骨の外端と肩峰突起との联接にして、是れ又叢合關節なり。

イ、囊狀靱帶 は緩く關節を被包す、此上面は強固なり。之を
 ロ、肩峰鎖骨靱帶 と云ふ、又關節腔内に屢々關節間軟骨あり、而して
 烏喙突起より鎖骨に渉る靱帶を、
 ハ、烏喙鎖骨靱帶 と云ふ。此靱帶は前後共に分裂す、前のものを菱
 形靱帶と云ひ、後のものを錐狀靱帶と云ふ。

第五十三圖 上肢帶聯接



運動 肩
 胛骨と鎖
 骨との運
 動は多般
 にして肩
 胛關節の
 運動に伴
 ひ、水平の

方向に於て角度を變じて、肩胛關節を前或は後方に轉じ、肩胛骨の廻轉
 にて、矢狀徑に肩胛骨下隅を内後方及外前方に轉じて肩胛關節を上或
 は下方に移動せしむる等なり。

乙 肩胛關節(上膊關節)

肩胛關節は肩胛骨の關節窩と上膊骨頭より成る、全動關節なり。茲に
 イ、關節唇(纖維様軟骨) あり關節窩をして益々深廣ならしむ。
 ロ、囊狀靱帶 は關節唇の周縁より起り、上膊骨頭に渉り緩く被包す。
 此上側に強固の副靱帶あり。
 ハ、烏喙膊靱帶 と云ふ、烏喙突起の基底より上膊骨の大及び小結節
 に附着す。而して結節間溝の部にありて、二頭膊筋の長頭を通ずる
 裂隙を生じ、茲に滑液囊を有す、之を
 ニ、結節間滑液囊と云ふ。

運動 此關節は上下前後及び側方等何れの方角にも運動す、即ち矢狀軸により上肢を側方に轉じ或は原位に復す、前額軸により前後に動搖し鉛直軸により廻旋運動を營む。

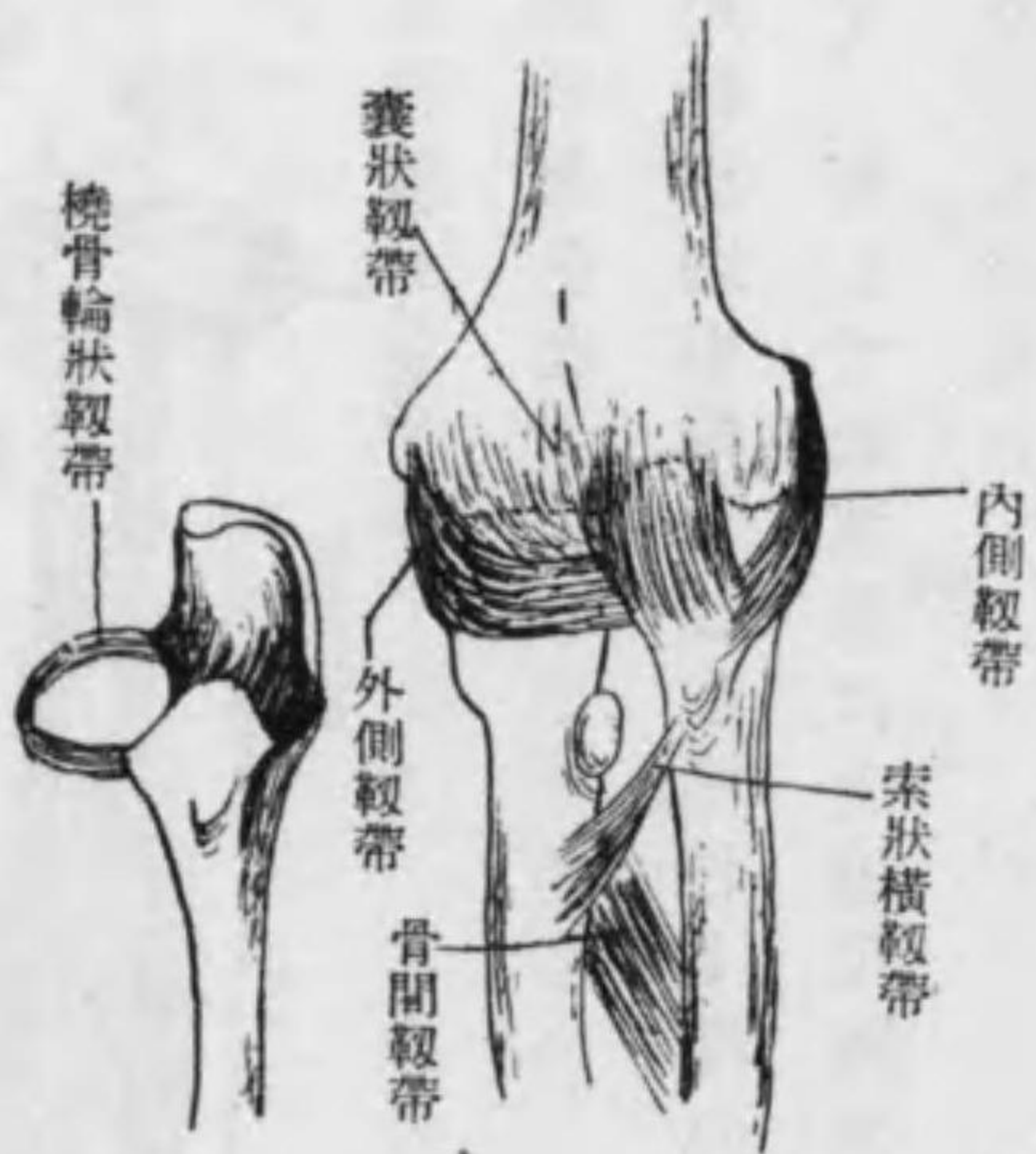
丙 肘關節

肘關節は上膊骨下端と橈尺二骨の上端との联接にして、之を分ちて膊尺關節、膊橈關節及び上橈尺關節の三とす。

- イ、**囊狀靱帶** は共同にして上膊骨下端より、橈尺二骨の上端に涉り三關節を被包す、此兩側に頗る強固の副靱帶あり、其一を
- ロ、**内側靱帶(尺側靱帶)** と云ひ内上髁より、尺骨大半月狀截痕の縁に附着す。他の一は

- ハ、**外側靱帶(橈側靱帶)** にして外上髁より、輪狀靱帶に終る。
- ニ、**橈骨輪狀靱帶** は強力にして囊狀靱帶の内部にあり。 橈骨小頭

第五十四圖 肘關節



を廻り前後兩端を以て、尺骨小半月狀截痕の前後に附着す。

運動 膊尺關節は單軸關節にして、軸は滑車の横徑に一致し、唯だ屈伸のみを營むべき蝶番關節なり。

膊橈關節は球狀關節なれども、運動は膊尺關節に制限せられ、前額軸を以て上膊骨小頭に沿ひ前後に移動し、或は縦軸を廻轉す、故に此關節を車軸蝶番關節と云ふ。

丁 下橈尺關節

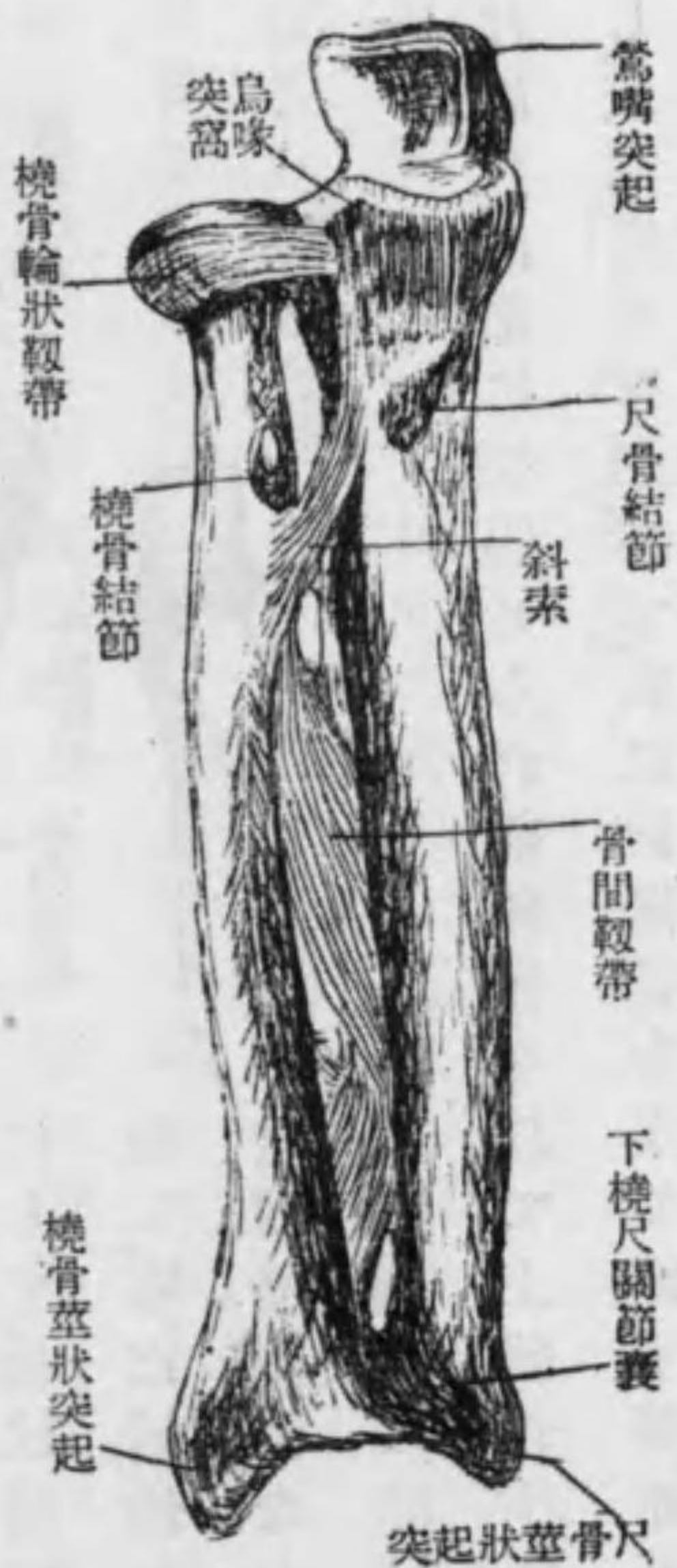
下橈尺關節 は橈骨下端の半月狀截痕と、尺骨下端の環狀關節面との

联接なり。

イ、囊狀靱帶 は緩澗にして互の關節を被包す又尺骨小頭の下面に關節軟骨あり、之を

斜索は又索狀橫靱帶とも名づく
骨間靱帶は橈尺骨の骨間に緊張す

第五十五圖 橈尺關節



ロ、三角軟骨 と云ひ橈骨下面の内側より尺骨莖狀突起に附着し、手腕

關節の一部をなす。

運動 尺骨小頭を軸となし、橈骨下端の小半月狀截痕を以て、軸の周圍を廻旋す。而して此運動は上橈尺關節及び膊橈關節と共に廻前及び廻後をなすものなり。

戊 手關節

手關節は五個の關節の集合したるものにして、即ち橈腕關節・腕骨間關節・腕掌關節・掌指關節・指關節是れなれ。

一、橈腕關節 は橈骨下端と、三角軟骨及び腕骨の上列即ち舟狀骨、半月骨、三角骨とより成る、髁狀關節なり。

運動 前額軸を以て屈伸を營み、矢狀軸を以て橈側屈曲、尺側屈曲を營む。

二、腕骨間關節 は腕骨互に不規則なる關節面を以て、联接する所の叢合關節なり。

運動 此關節は恰も二個の球狀關節にして、運動は専ら舟狀骨と有頭骨の軸により營まる。

三、腕掌關節 は腕骨の下列と、五個の掌骨基底との叢合關節なり。

運動 第五腕掌關節は稍や鞍狀にして、對拇運動は甚だ僅なる内轉運動を營む。拇指掌骨は大多稜骨と鞍狀關節をなす、依て此關節は二個の運動軸により、對小指運動及び外轉運動を營む。

イ、囊狀靱帶 は橈骨及び三角軟骨より起り二部に分れ、一つは橈腕關節を被包し、一つは腕骨間關節及び腕掌關節に延暢し共に一系をなす。而して副靱帶は

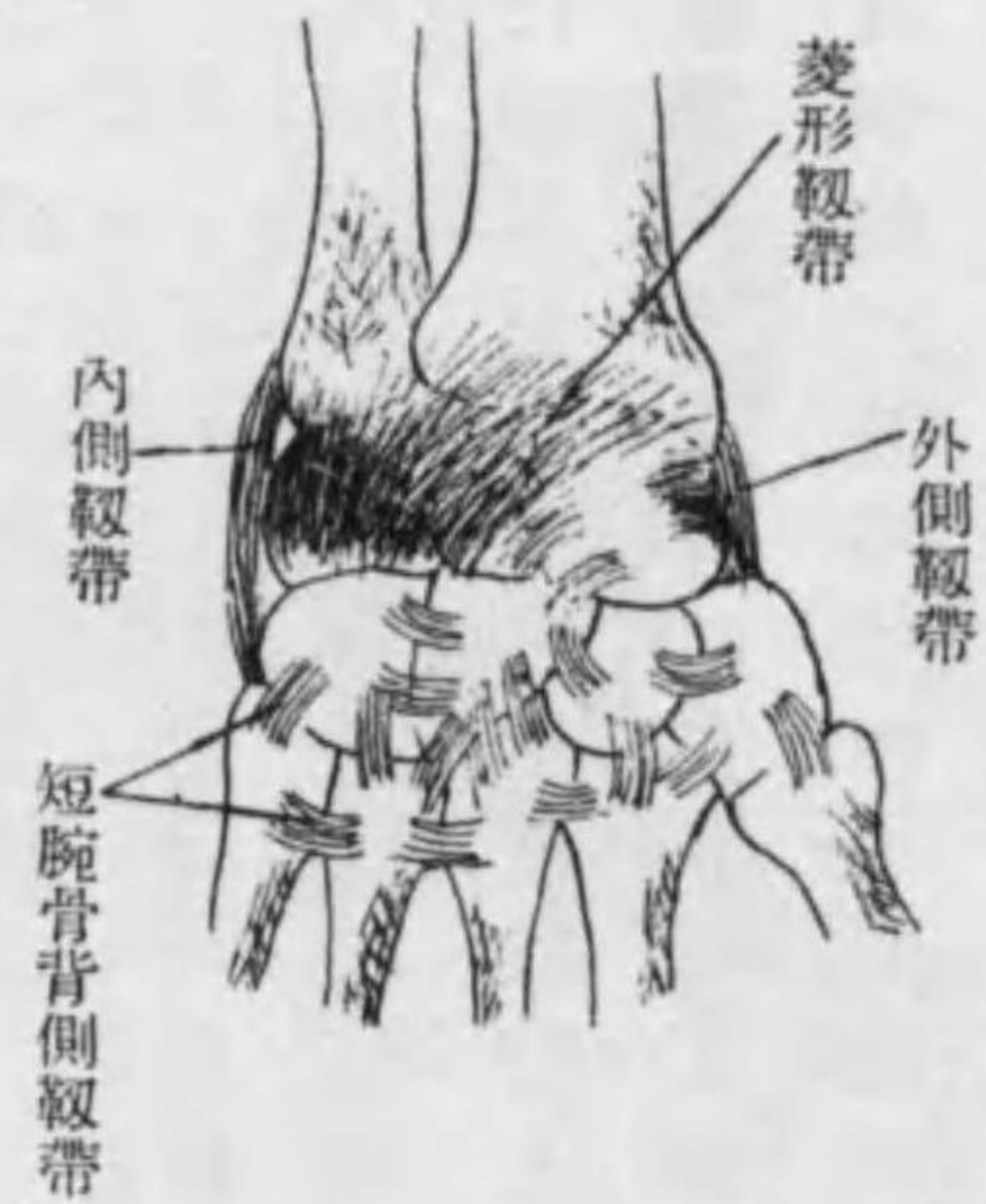
ロ、腕骨背側靱帶(橈腕背側靱帶) は左の二種とす。

1 菱形靱帶 は長且強厚にして橈骨より斜に三角骨に至る。

2 短腕骨背側靱帶 は數多の短靱帶にして、縱横斜の方向を以て各腕骨と掌骨基底とを連結するものなり。

ハ、腕骨掌側靱帶 は其纖維の方向により、上中下の三部に區別す。其一上部を弓形靱帶と云ひ、橈骨下端より腕骨の尺側に渉る。中部を放線狀靱帶と云ひ、有頭骨より起り近傍の腕骨に分散す。

第五手關節靱帶圖



ニ、内及外側靱帶 は橈及尺骨莖狀突起より腕骨各側に緊張す。又下部を横靱帶と云ひ、腕骨下列より掌骨基底に緊張す。

四、掌指關節 は球狀の掌骨小頭と、凹陷したる指骨基底との關節にして、囊狀靱帶は互を被包し、内外側靱帶を具ふ。

運動 此關節は混合したる蝶番全動關節にして、屈伸及び内外轉を營む。但し拇指は單に屈伸を營む蝶番關節なり。

五指關節 は蝶番關節にして、囊狀靱帶及び強き兩側靱帶を具ふ。

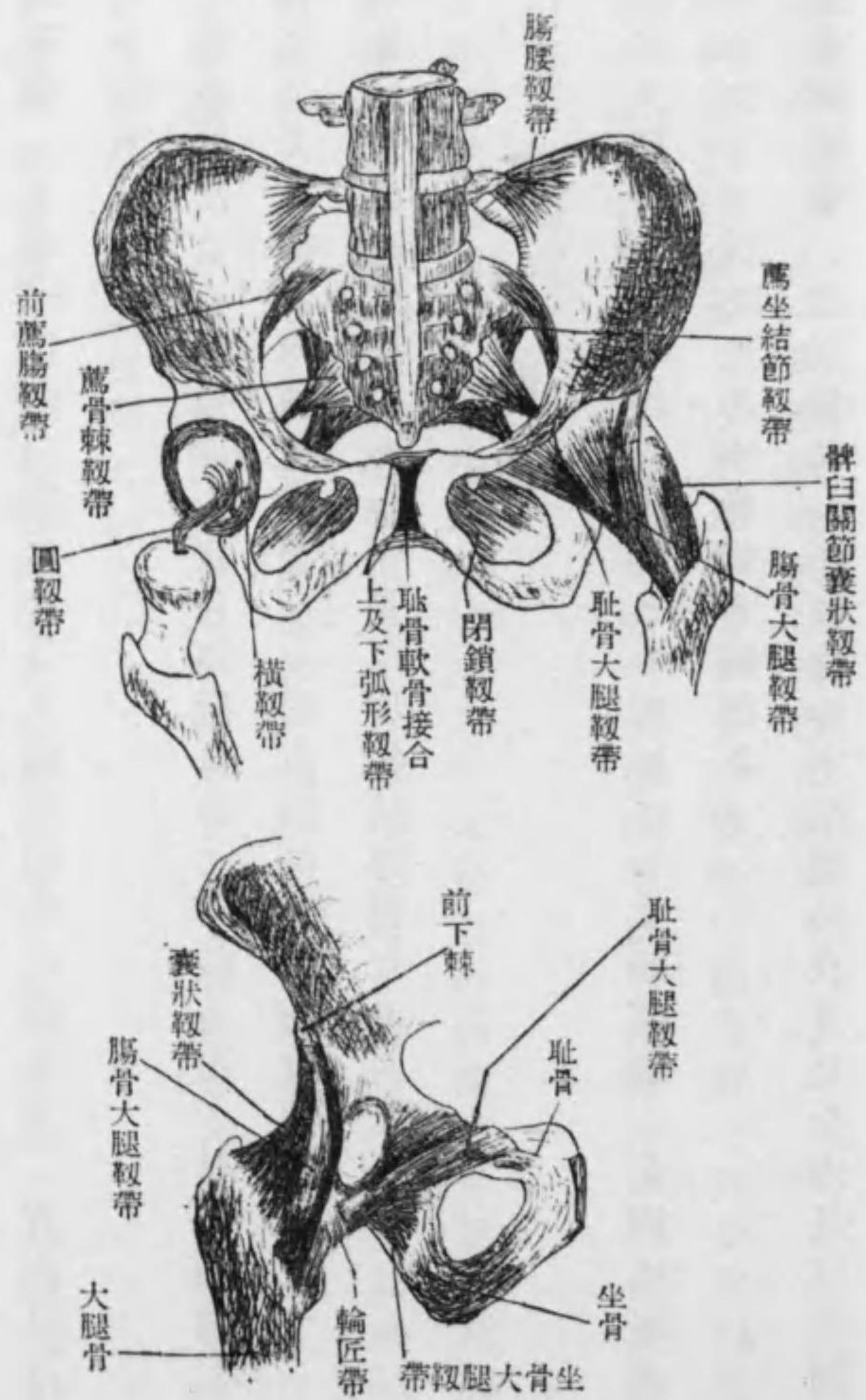
第三 下肢靱帶

甲 髌臼關節(股關節)

髌臼關節は脛骨の髌臼と、大腿骨頭との球狀關節なり。此關節は肩胛關節と類似すと雖も、關節窩の深きと、關節頭の球狀なると、運動の制限せらるゝとを以て異なり。茲に

イ、臼唇 あり高くして髌臼の周縁に密着し、關節窩をして益々深大ならしめ、關節頭を充分窩内に包擁す。而して臼唇は髌臼截痕部に至る時は橋狀をなす、之を横靱帶と云ふ。
ロ、囊狀靱帶 は脛骨に在りては髌臼の外周に附着し、大腿骨に在りては前は斜線に、後ろは轉子間線に附着し、大腿骨頭は囊内に包有せらる。副靱帶は囊狀靱帶に密着す。

第五十七圖 髌臼關節



ハ、腸骨大腿靱帶(腸股靱帶) は腸骨前下棘より起り、前は斜線に涉り、後ろは轉子間線に附着す。

ニ、耻骨大腿靱帶(耻骨囊狀靱帶) は耻骨枝より生じ、大腿骨小轉子に至

る。(此二靱帶は強固にして、屈伸運動を制限するものなり)
ホ、坐骨大腿靱帶(坐骨囊靱帶) は坐骨より地平に走り、轉子窩に終る。
 其他關節腔内に一種の關節間靱帶あり。
ヘ、圓靱帶 と名づけ髌臼窩に起り、大腿骨頭窩に附着す。質内には脂肪を含有すべし。

運動 前額軸による屈伸即ち歩行運動にして下肢を振子狀に運轉し、矢狀軸により外轉及内轉運動をなし、鉛直軸により廻旋運動をなす。但し廻旋は正直の廻旋にあらず、實は放線狀運動なり。

乙 膝關節

膝關節は大腿骨下端と、脛骨上端との联接にして、關節囊の前側に膝蓋骨の嵌在により成る所の、車軸蝶番關節なり。

イ、關節間軟骨 は二個にして脛骨の末端面に在り、是を内及び外關節間軟骨と云ふ。周圍縁は囊狀靱帶に癒着す。

1 内關節間軟骨 は半月形にして、大腿骨内關節髌と脛骨内關節髌の間に在り、前端は脛骨上端の前面に附着し、後端は後髌間窩の内縁に附着す。

2 外關節間軟骨 は略ぼ輪狀にして、大腿骨外關節髌と脛骨外關節髌の間に在り、前後端は相接近し髌間隆起に密着す。又兩關節間軟骨の前側に一帯あり、横靱帶と云ひ互を相連結す。

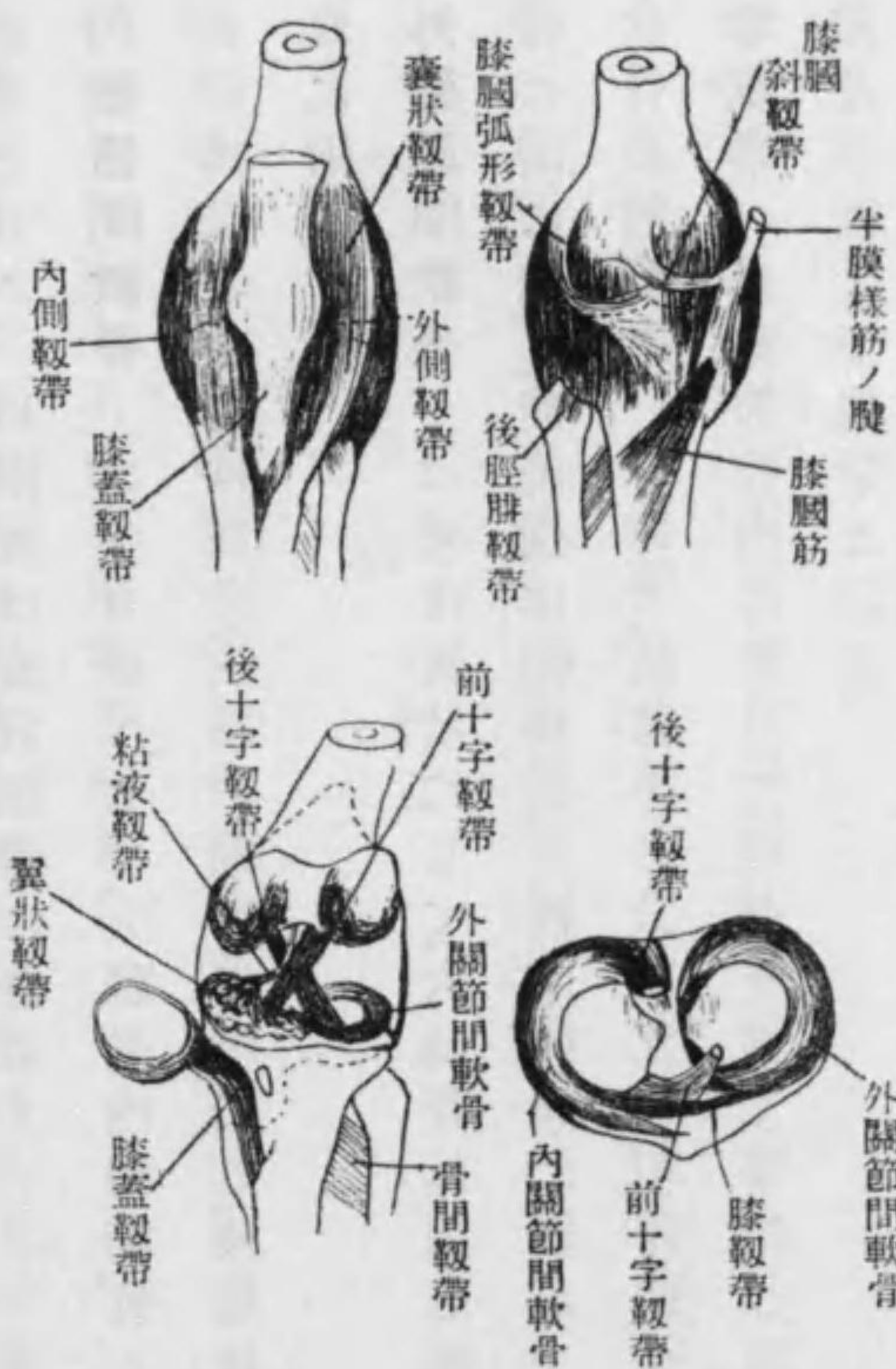
ロ、十字靱帶 は關節腔内に在りて、兩骨を強く連結し運動を制限す、之を前及び後十字靱帶と云ふ。

1 前十字靱帶 は脛骨髌間隆起の前側より起り、大腿骨外關節の内側に附着す。

2 後十字靱帶 は脛骨髌間隆起の後側より起り、大腿骨内關節髌の外側に密着す。

ハ、**囊狀靭帯** は最大にして兩骨を被包し、大腿骨に於ては前部と側部は關節間軟骨の縁より少しく高き所に起り、後部は軟骨面の際より生じ、脛骨に於ては側部及び後部は關節の下部に附着し、前部は脛骨結節に附着す。

圖八十五第
節關腓脛及節關膝



ニ、**膝蓋靭帯** は短強の靭帯にして四頭股筋の終腱より成り膝蓋骨の尖端より下りて脛骨結節に渉る。

ホ、**膝膕斜靭帯** は半膜様筋腱の一部にして關節囊の後側を上外方に走り、大腿骨外上髁の外側に終る。

ヘ、**膝膕弧形靭帯** は斜靭帯の下側に於て、大腿骨外上髁より内方に走り膝膕筋の纖維に合す。

ト、**内側靭帯(脛側靭帯)** は大腿骨内上髁より起りて、下方に走り扇狀に分散し、前大部は脛骨内面に附着し、後小部は内關節間軟骨の縁に終る。

チ、**外側靭帯(腓側靭帯)** は大腿骨外上髁より起り、腓骨小頭に附着す。**運動** は頗る複雑にして、膝蓋骨及び大腿骨の間は圓柱形關節にして前額軸によりて運動す。膝關節の前額軸による運動は關節面の形状と側靭帯及び十字靭帯の作用により、營まるゝ所の屈伸運動なり。又膝關節の屈曲位に於て脛骨は其縱軸を廻旋す。

丙 脛腓联接

脛腓联接は脛骨と腓骨との關節にして、上下及び骨間靭帯による兩骨幹の联接なり。

一、上脛腓關節 は腓骨小頭と脛骨の腓骨關節面との關節なり。

イ、囊狀靭帯

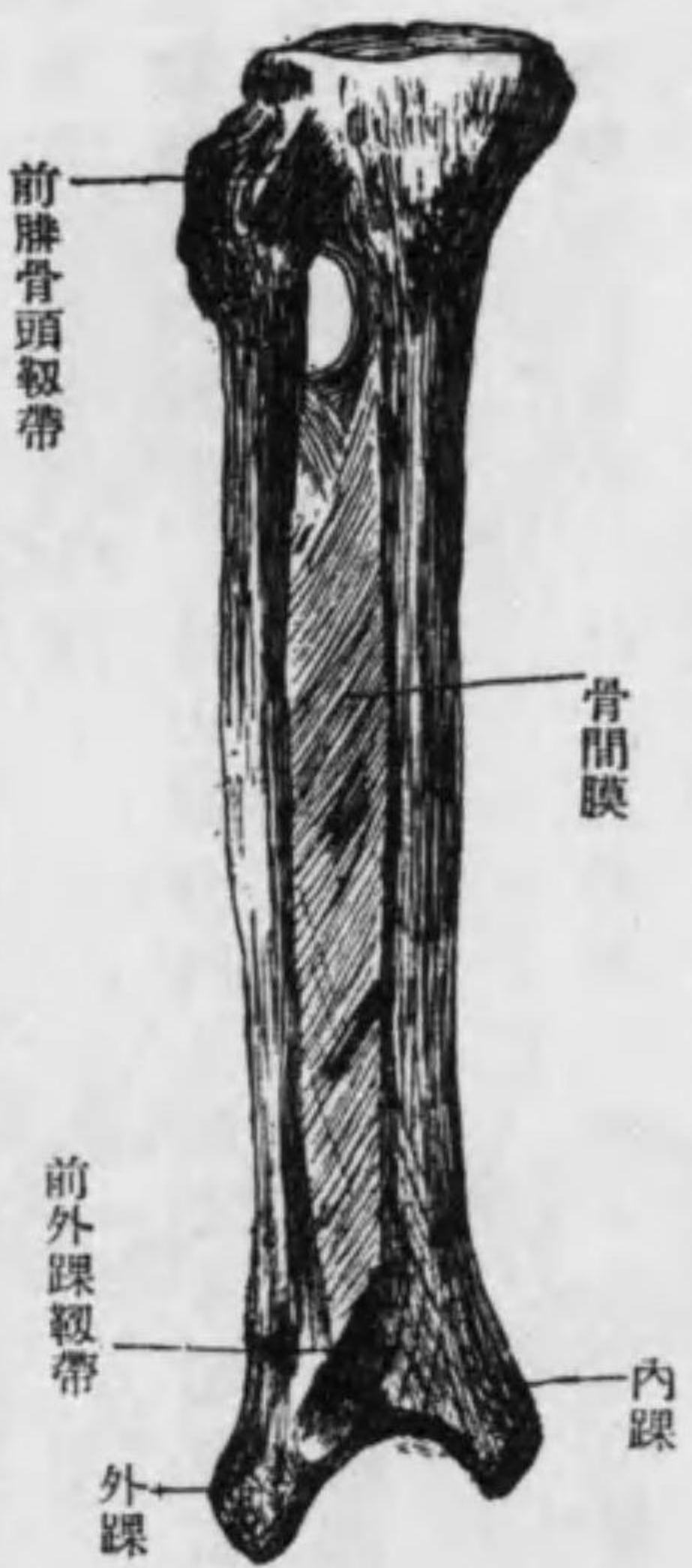
は強固に

して互を被

包し、前後に

副靭帯あり。

圖九十五第
脛腓關節



ロ、前面のものを前腓骨小頭靭帯と云ひ、後面のものを後腓骨小頭靭帯と云ふ。

ハ、骨間靭帯は 膜様の靭帯にして、兩骨の骨間櫛に緊張す。

二、下脛腓關節 は脛骨下端の腓骨截痕と、腓骨下端との關節なり。

此關節腔は足跗關節と相交通し、茲に副靭帯あり。

イ、前外踝靭帯 は外踝の前側より脛骨に緊張す。

ロ、後外踝靭帯 は外踝の後側より脛骨に緊張す。此二靭帯は二骨

の下端を結束し、下脚が距骨前廣部に運動する際に緊張す。

丁 足關節

足關節は手關節と同じく多くの關節より成る、即ち足跗關節、距骨跟骨關節、距骨舟狀骨關節、跟骨骰子骨關節、舟狀骨楔狀骨關節、跗骨蹠骨關節、蹠骨趾骨關節、趾骨間關節の八關節なり。

一、足跗關節(脚距關節) は下脚と距骨との關節にして、距骨の上面は矢狀徑に彎曲し、滑車狀にして脛骨下端と關節し、兩側は關節面を以て内外踝の間に狭まりて關節す。

イ、囊狀靱帶 は關節面の周圍を被包し、後側は弛緩し、前側は多くの脂肪を以て被はれ、側方は緊張す、故に屈伸運動を營む。而して内外側に副靱帶あり。

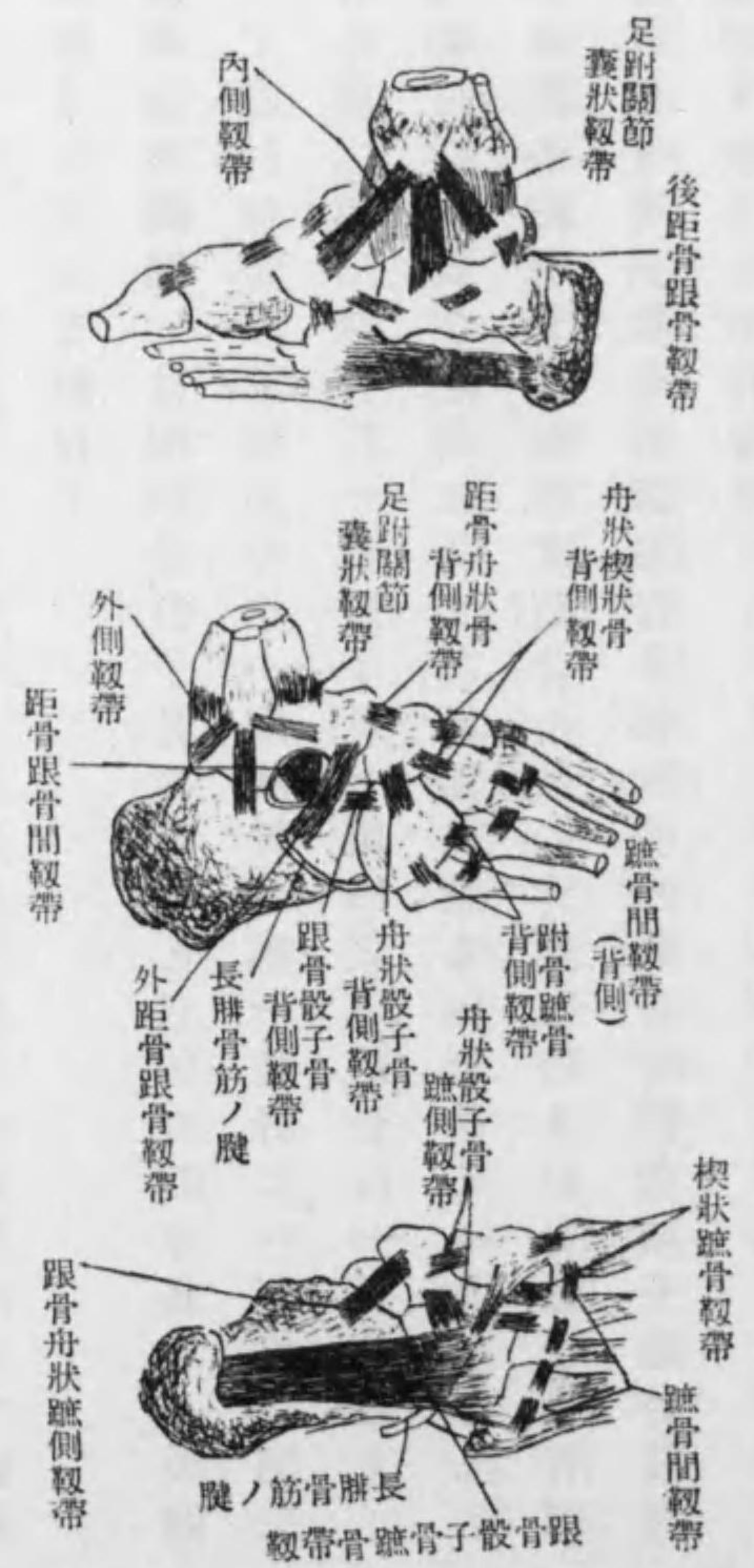
ロ、内側靱帶(三角靱帶) は内踝より下りて三部に分れ、前部は舟狀骨に、中部は跟骨(載距突起)に、後部は距骨に緊張す。

ハ、外側靱帶 は外踝より距骨及び跟骨に向ひ放線狀に分散す。而して距骨頭に走るを前腓距靱帶と云ひ、跟骨の側方に終るを腓跟靱帶と云ひ、距骨の後側に緊張するを後腓距靱帶と云ふ。

運動 此關節は單軸の圓柱關節にして、足の屈(足尖舉上)伸(足尖下降)運動を營む。而して足を伸展せば廻轉運動をなし得べし。

二、距骨跟骨關節(距跟關節) は跗骨竇に依り前後の二部に分る。
イ、囊狀靱帶 は關節面の周圍に附着して、其後部及び側部は弛緩す、前部は距骨舟狀骨關節の囊狀靱帶の一系なり。

第十六圖 足靱帶



ロ、外距骨跟骨靱帶 は距骨頸より跟骨の外面に附着す。
ハ、骨間距跟靱帶 は跗骨竇中に在り。
ニ、後距骨跟骨靱帶 は距跟關節の後側に在り兩骨を聯結す。
運動 足の屈伸及び内外轉なり。

三、距骨舟狀骨關節 は距骨頭と跟骨載距突起及び舟狀骨との關節なり。囊狀靭帶は緩く互を被包す。

四、跟骨骰子骨關節 は跟骨前端と骰子骨との關節なり。囊狀靭帶は強固にして互を被包す。

五、舟狀骨楔狀骨關節 は舟狀骨と楔狀骨(三個)との關節にして囊狀靭帶は強くして互を被包す。

六、跗骨蹠骨關節 は楔狀骨、骰子骨の前端と五個の蹠骨基底との關節にして囊狀靭帶は三個あり、第一楔狀骨と第一蹠骨に一個、第二、第三楔狀骨と第二、第三蹠骨に一個、骰子骨と、第四、第五蹠骨に一個等なり。

而して尙ほ背面及び蹠面に於て各關節に互る副靭帶あり、次の如し。

背面 1. 距骨跟骨背側靭帶 2. 距骨舟狀骨背側靭帶 3. 距骨骰子骨背側靭帶 4. 骰子骨舟狀骨背側靭帶 5. 楔狀骨舟狀骨背側靭帶 6. 蹠骨間背側靭帶 7. 骰子骨蹠骨靭帶。

側靭帶 7. 骰子骨蹠骨靭帶。

蹠面 1. 跟骨骰子骨蹠側靭帶 2. 跟骨舟狀骨蹠側靭帶 3. 骰子骨舟狀骨

斜靭帶 4. 舟狀骨楔狀骨蹠側靭帶 5. 楔狀骨蹠骨靭帶。

七、蹠趾關節及び八、趾骨間關節 は五個の蹠骨尖端と五個の趾骨基底との關節及び各趾骨間の關節にして囊狀靭帶及び内外側の副靭帶を具有す。

第三 筋 學

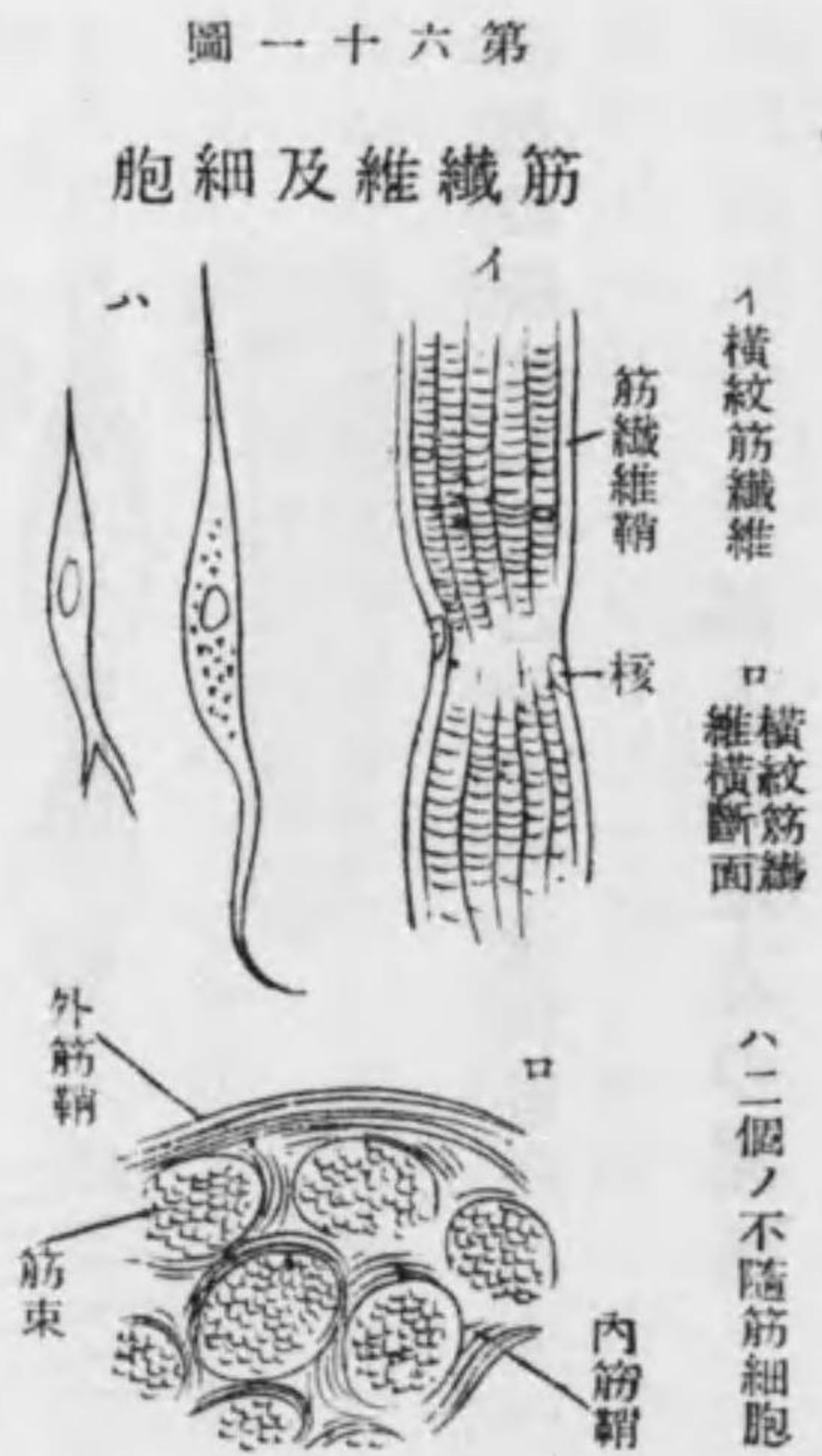
第一章 筋學總論

筋は通俗單に「肉」と稱へ、身體の運動を掌どる處の要具にして、之に隨意筋及び不隨意筋の二種あり。

隨意筋即ち横紋筋は赤色微細の肉絲(即ち原纖維)の結束たる筋纖維が更に集合して一束となりたるものにして、斯くの如く筋纖維の漸次集合して出來たる横紋筋は、更に又膜を以て被包せられて軀幹の周壁及び四肢等、渾身の軟部を形成し、能く神經の刺戟又は意識の作用に由りて自動性に自由に伸縮し、骨をして百般の動作を爲さしむるものなり。而して筋の兩端は大抵白色の固き索の如きものより成り、主として骨に附着せしむる媒介をなすものあり、之を腱と云ひ、其廣きものを腱膜

と云ふ。

不隨意筋即ち滑平筋は其構造横紋筋と全く異なり、従つて隨意筋に反し意志の作用に由りて自由に伸縮し能はざるものにして、自動性諸器



圖一十六第

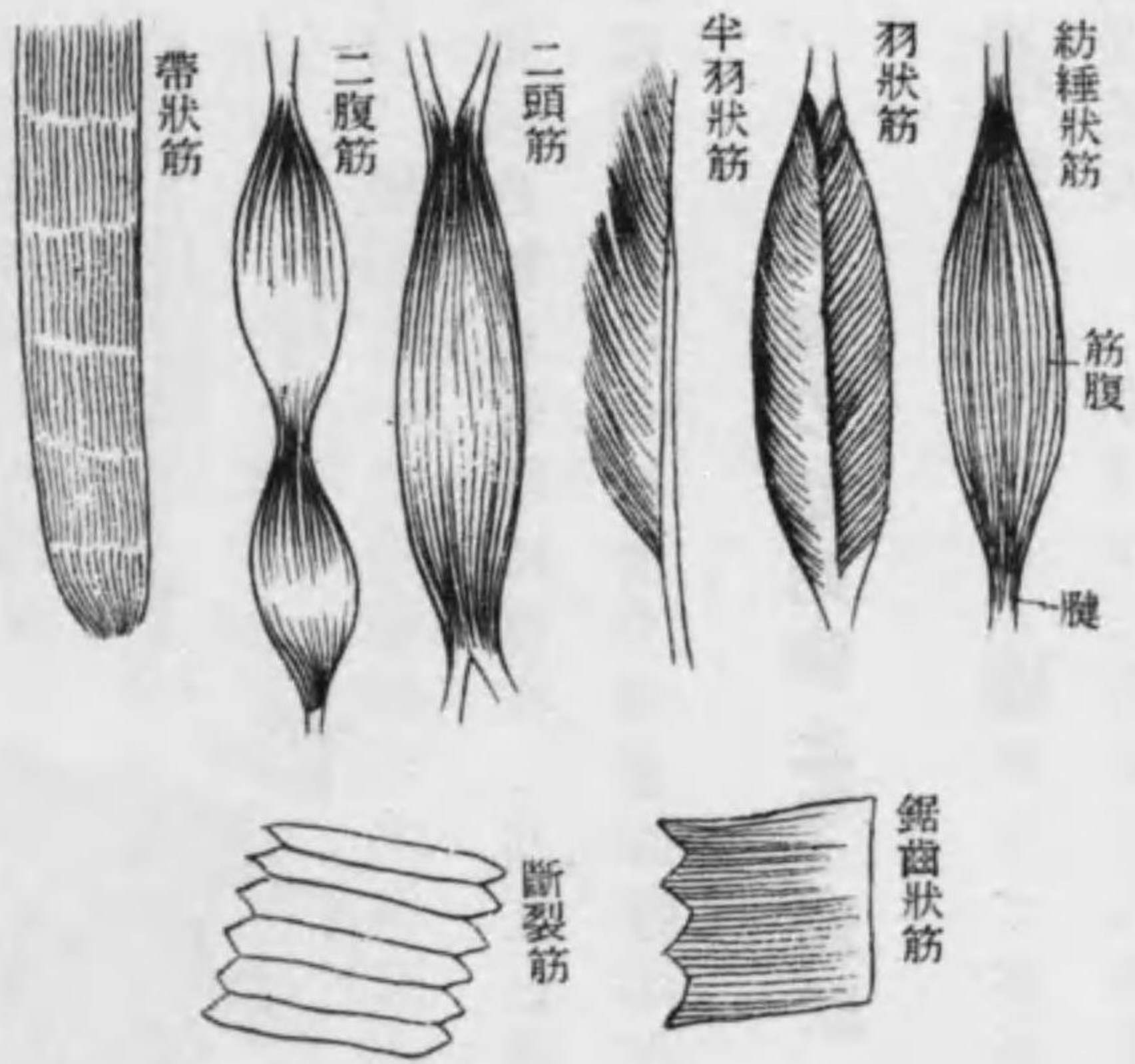
筋纖維及細胞

官の壁即ち内臓血管等に存在し、其壁を構成するものなり。但し心臓の筋肉は横紋筋なるも全く意志に隨はざる特殊例外のものなり。

◇ 筋の起始・停止及び形状

筋も亦骨の如く長・短・廣の三種ありて其形に従ひ羽狀筋・半羽狀筋・鋸齒狀筋・斷裂筋及び二頭或は三頭、又は二腹或は數腹筋と名づけ、皆必らず

第六十二圖 筋ノ形狀



締組織膜にして、之を以て淺深數層に分つものなり。

一骨より起り一或は數關節に跨るものにして、其一端即ち起始を頭と云ひ、他端即ち停止を尾と云ふ。又頭・尾の間を筋腹と名づく。

◇ 筋 膜

筋膜は筋の外面或は筋層間を被ふところの強き結

◇ 筋と神經との關係

筋の自由に伸縮し得るは其中に分佈せる神經に由りて導かれたる刺戟に由り起るものにして、若し神經の破壊せらるゝ時は此神經の分佈せる筋は忽ち麻痺を來して萎縮し、遂には消失するに至るべし。故に筋と神經とは離るべからざる關係を有するものにして、又胎生學上より之を觀るも甚だ密接なる關係を有す、即ち先づ始めに神經を生じ、然る後其周圍に筋肉を發生するものなり。依つて筋と神經との關係を知るは鍼治の應用上最も必要なるものとす。

第二章 筋學各論

第一 軀幹筋

全身の筋を大別して軀幹筋及び四肢筋とす。而して軀幹筋を更に背筋・腹筋・胸筋・頸筋及び頭蓋筋に分つ。

甲 背筋

背筋とは軀幹の後壁に位せる諸筋の總稱にして、之を分ちて淺層及び深層の二とす。

イ 淺層諸筋

一、僧帽筋

(副神經分佈す)

僧帽筋は三角形の大筋にして後頭骨上項線の内部項靱帶及び全胸椎の棘状突起より起始し、鎖骨の外端肩峰突

第三十六圖 背筋



起及び肩胛棘に停止せり。其作用は肩胛骨及び鎖骨の外端を後上方に揚げ、肩胛骨の基底を脊柱に向つて接近せしむ。

但し項靱帶とは全頸椎の棘状突起間より後頭骨の外後頭櫛に三角形をなして緊張せる膜状の靱帶を云ふ。

二 潤背筋 (肩胛下神經分佈す)

潤背筋は三角形をなし、第八以下の胸椎棘状突起、腰背筋膜、腸骨櫛の後部及び終末の三肋骨より起始して上膊骨の小結節棘に停止せり。其作用は上膊骨を後内方に引き且つ下掣す。

三 菱形筋 (肩胛背神經分佈す)

菱形筋は斜方形にして、項靱帶の下部第七頸椎乃至第四胸椎の棘状突起より起始し、外下方に走りて肩胛骨内縁に停止せり。其作用は肩胛骨を脊柱に向つて内上方に引く。

四 後上鋸筋 (背椎神經の後枝及び肩胛背神經分佈す)

菱形筋は大菱形筋及小菱形筋に區別せるものあり

後上鋸筋一名上後鋸筋